
Dragon Eye**第二篇** 星の音色と白の神話

夏空風癒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dragon Eye 第二篇 星の音色と白の神話

【Nコード】

N6577R

【作者名】

夏空風癒

【あらすじ】

半人前ドラゴンのクロッドは、ある日気付くと、世界規模の陰謀の渦の真っ只中にいた！？ 旅の途中、一昼夜にして、迷子の少年を拾ったり、寝間着姿の魔術師少女と喧嘩したり、空から隕石もろとも降ってきた、獣の耳をした異世界王女の面倒を見る破目になっっていたクロッド。そこから始まる災難続きの日々。迷子少年の高貴過ぎる身の振り問題に巻き込まれ、故郷に帰れば師は行方不明、あげく兄弟たちが反乱を起こして、さらには王女に！ どうすればいい。俺にどうしろと!？

序章終了しました。ここから凸凹四人組が数奇な運命に導かれて、様々な立場の者の思いが交錯するなか、中央大陸を中心とした動乱へと巻き込まれていく事になります。

第一篇を読まなくても楽しめます。

自サイトと同時に連載している作品です。

聖歴2年 … 彼に永久の栄光を。貴女に契りの花束を

青年がいたその場所は、張りつめた静寂に包まれていた。

過去にも例を見ないだろう、数万人規模の大軍団が整然と背後には並んでいる。しかし、そこには誰かの咳払い一つすら響かない。

無数の気配と完全なる無音の世界、それら二つが、痛いほど青年の背中に叩きつけられていた。

もしも立っていた場所が、例えば軍団の最前列ならまだ気は緩んだだろうか。

だが、そんな事は気にしても仕方がない。

どんなにもしもを想像したところで、彼らから一つ突出したところが、自分の立ち位置だ。

心底から自分でも異様だと思つ場ではあるが、しかし、ここに青年は居続けるしかない。

ずっと前から一所で動かず、未だに空を仰いだまま微動だにしない。ひよつとしたら背後の軍団の誰かはいい加減、自分の事をどこかの王が作らせた彫像のようにでも思つたかもしれない。

事を始めるのがひどく億劫だった。

だから敢えて何をする事もなく、一刻ほどずっと空を見上げていたのだ。

首が痛いとは思わなかった。

不自然な体勢でも、何かをずっと待ち続けるしかない事などいくらでもあった。今更氣にする理由がない。

ただ、少しでも時が遅れればいいと、願っていた。

(今日)

ふと、思つ。

(今日で、二日目)

あつという間の、二日。とても長かった二日。

そして、傷が癒えぬままに、自分は新たな一步を強要されている。その一步を、躊躇い続けている。

だが、踏み出さねばならないのだ。それを待ち望んでいる人々のために戦い続けてきた。それだけが、唯一自分に与えられた存在意義。

それだけが、今の所唯一自分に残っていて、自分を突き動かす、存在意義。

ソレは、ソレらしく在れと定められた。人間である事、平凡である事を許されず、神である事、非凡である事を望まれた。

だから、ソレらしく振舞う。だから 今日青年は、自分という“人間”を自らの手で壊して踏みにじる。

救いは達成されなければならぬから。

所詮救世主なんてそんなものだ。

世界を救ってくれる人間はいても……その人間を救ってくれる者は存在しない。

空っぽな心で、そんな風に痛々しいせせら笑いをしてみる。

だがその笑いすら、表情に出す事はソレには許されない。

青年は目の前に建てられた、白い墓標を見下ろした。そこには、

一人の女が眠っていた。

彼女については、あまり思い出せる事はない。

どこかの村の娘だったような事は言っていた。

成り行きで世界が彼女に強い事しか青年は知らない。静かで平和な暮らしをするはずだった小さな少女は、時を経て世界を揺るが

す天魔の女に成り果てた。

だが、それでも彼女は、笑えていたと思う。頭に大きな、鮮やかな色の花を挿して、天真爛漫な少女のように、くすぐったそうに肩を竦めたのだ。

例え、無慈悲な剣をその胸の中心に突き立てられても、彼女はまだ笑っていた。

花を挿した手が誰のものであって、

剣を突き出した手が誰のものだったか、

青年は、それを、台座の上の花を見ながら思い出していた。

葬送に用いられるような上等な花ではない。忌花とさえ言われるような不吉な花。

それが飾られるのが相應しいと、この場にいる者たちは思い、青年が彼女を貶め、その名を辱める事を望んでいる。

だが、彼女は敢えてその花を望んだ。

自分のために、と。

青年が、何も知らずに選んだ花を、笑い飛ばし、意味を教え、それでも身に着けてくれた、彼女。

自分がその屍の上に立つ、それだけの事に意義があるのだ。

鮮やかな暖色の色をした花を、そつと手に取る。

女の形見といえば、これと、そう、彼女が遺して行ったもう一つのものぐらい。

「卑怯だね」

青年は彼女に向かって囁いた。
返ってくる言葉がない事が、こんなにも胸に痛いとは知らなかつた。

けれどその痛みすら、青年にとってはやけに空虚だ。

心は、一緒に居たあの時、確かに満たされていたのに。
また、空っぽに戻った。

「卑怯だよ、おまえは」

同じ言葉を繰り返す。

「俺を遺して死んでいくなんて……ましてや、あんなドラゴンのために死ぬなんて。最低だ」

涙など、誰が流してやるものか。

誰がおまえの死など悲しんでやるものか。

「誰も喜びはしないさ。おまえがやった事は、ずるくて、最低で、最悪の行いだよ」

周りの事など関係ない。

自分は、ただ、ただ。

「俺はただ、おまえと一緒にいたかった……あいつと一緒に生きたかった……それだけだったのに」

ぐしゃりと、花を握りつぶす。無残に潰れた花からは、折れ曲がった花弁がいくつも地面に落ちていった。

花を握ったその手で、墓碑の石に指の腹を当てた。光が灯った指

先が石の表面をなぞるたび、死者の名が徐々に刻まれていく。

（彼女を偲ぶためじゃない。彼女の死を嘆くためでもない。何で俺がこんな事をしなくちゃいけない？ 何でこんな事をさせたんだ）
様々な想いをない混ぜにして、やがて、彼女の死は、墓碑に刻まれる事で確定する。

彼女に対してできる全てをやり終えたと思つた青年は、無言のまま、何も顔に浮かべず、振り向いた。

束の間忘れ去っていた戦士らの軍勢は、未だに静かなまま、そこに在った。

彼らの顔は皆、疲れ果て　しかし、例外なく、とある輝きを目に宿していた。

歡び。

勝利の美酒に酔いしれた者の持つ、狂喜へと高まりつつある感情だ。

自分が一言声を上げれば、彼らは胸に秘めた全てを爆発させるだろう。

平穏な時代の幕開け。それこそが、世界の人々の悲願であつたのだから。

腰に携えていた剣をのろりと引き抜いた。

曇天の中でもなお輝きを放つ紅い玉が、唯一、裝飾の少ない剣の

華となって煌めく。

剣を持った重い腕を掲げて、青年は声を上げる。

「時は来た　白の時代は終わりを告げた。ドラゴンはついに世界から駆逐された！」

暗い感情を抱えて、青年は誰にも気付かれる事のない、最大の皮肉を、最大の嘲笑を彼らに向けた。

嗤いが嬉しそうに見えるなら、歓喜の顔ととればいい。

言葉が希望だと思ふなら、そのまま素直に信じていればいいのだ。だが、問おう。

一体どうして。

なぜ自分が？

(なぜ、俺が　彼女の死を、喜ばなくてはならない？)

想いと裏腹に、声は続く。

さあ、喜べ、聖なる時よ。

彼女の亡骸を踏み台にして、幸せに包まれて、怠惰に平穩を貪るがいい。

「　今この瞬間より、世界はおまえたち人のモノだ！　」

「　！　」

意味を成さない轟音が響く。

同時に、光がその場に差しした。

誰もが頭上を見上げ、更に歓声を大きくする。

雲を、一体のドラゴンが割っていた。

魔獣、悪魔、と誰もが罵る存在は、彼に限っては、神の御使い、救いの神獣と称賛を向けられるものへと変わる。

金色の翼が、今日も黄金の日光と、雲から覗いた蒼い空に良く似合っている。

青年が見上げると、彼は静かな色を湛えた瞳で、そっと頷く。

示し合わせたわけでもないのに、ずっと叫ばれてきた言葉が、ここでも上がった。

今、救いはここに実現せり

一つの共通する想いを以って、長い平和の時代への始まりを、誰もが祝福していた。

だが今は全てが遠く、青年にとって夢の中のように感ぜられた。そんな聖句なんて要らなかった。

今となつては、もう　こんなもの、自分たちへの呪いにしか過ぎない。

聖歴二年　寒さも緩み、雪が解けて、ようやく春の訪れを感じつつあるファルブの月の二十五日。

聖戦と呼ばれたこの大きな戦いは、名実ともに終結した。
そして、孤独な青年の心を置き去りにしたままに、人の歴史が始まった。

微睡み始めた世界の中で、青年は小さく、今までを支えてくれた親友と、愛した女への贅辞を口にした。

彼に永久の栄光を。

貴女に契りの花束を。

嗚呼、誰よりも儂く、強く、美しく散っていった貴女に、もうこの言葉は二度と紡がれる事はない。

愛している。心から、貴女だけを。他ならない貴女のために、俺はこの魂を捧げよう。

何年でも、何百年でも。

永遠に近い時間であろうとも。
この心が壊れ、俺の全てが朽ちて、いつか貴女に寄り添う日が来るまで。

『生きる』と、その呪いを胸に。

願わくば、誰か、早く気付いて殺してくれ。

愛しいのに……世界の全てよりも重いのに。
それを手に懸けてしまった、人でなしだ。

血も涙もない化け物だ。

そつだ　俺が。

エルドラゴンこそが、世界を滅ぼす“悪”なんだから。

だから、殺せ。

再び彼女に巡り合った時、俺が同じ過ちを繰り返す前に。

そつだろつ？

いつ覚めるとも知れぬ眠りのような、長い時間の中で。

ある時、漆黒の翼が、かつて青年だった者の視界を埋めた。

そして、彼は、

その場で朽ちていった。

現れたのは、輝かしい栄誉と共に。

消えたのは、その身に集めた憎悪と共に。

そんな生だったが、それでも、死がこんな自分にもあったのだと、
ほっとしていたのも事実である。

聖歴2年 … 彼に永久の栄光を。貴女に契りの花束を（後書き）

なろうで更新停滞中の小説『Dragon Eye』から数年後の
お話。サイトと同時に連載は進行します。

- 1 - 零れ落ちた光

クロツドはぽつんと一人、町の前に立っていた。

「……ここが、イウエンか」

先ほどからずっと見上げていた町の外壁から目を離して、疲れた首をさする。

「面倒くさ」

呟いたのは一言だったが、その一言は実には的確にクロツドの心情を表してくれていた。

町に入るのが面倒臭いとか、そんな事ではない。これから先起こり得るあらゆる事を想像しただけで、とてつもなく気が重くなったのだ。

（『おまえ、ちょっと世界を見てきたらどうだ？』）

思い返せば、そう師に言われたのはまだたった一週間前の話だった。

「どうだ？」なぞ言われても困る。

例え師が提案したつもりであっても、師事する自分にとってみれば絶対命令とさほど変わらないのだから。

嫌もいいえもなく、もとからあるかどうか分からない荷物から最低限の物をまとめて、鞆を肩から下げて出てきた。

こうして旅に出してしまった今だから言えるのだとは思うが、今の師に鍛えてもらえと、住んでいた隠れ里で世話になった好々爺から紹介してもらい、彼に教えを乞うようになってから一年余り。初期に、確かひと月もしない間で、人型の時とドラゴンの時のための、基本からちよつとした応用までの体術、魔術をさらわれた。「できるだろう」「知っているだろう」の一言で文字通りさらっと流されたのには啞然とした覚えがある。確かにできるし知っていた

が、まさかそれだけで済むと思わなかった。

その後で始まったのがなぜか、処世術、荷物を小さくまとめる方法、求める情報の集め方、通貨の両替の計算、その他もろもろのやたらと選択肢が所帯じみた叩き込み。

傲慢でもないが、胸を張って言える。

絶対に旅に出す気だった。

師にしてみればとつた事もない弟子などを押しつけられて迷惑だと思っていたのかもしれない。自分も初め、誰かの弟子になりたいと言った覚えもないのに師のもとに放り込まれ、少なからず思った事があるので、師の事をとやかくは言えないのだが。

とはいえ、クロツドがいた隠れ里で教えられる事からしてみれば、ずいぶんあの師の動きには目を瞠るものがあつたし、きつちりと教えるべき事は教えていたと思う。好々爺の目は間違っではない。だが、それがまさか、さすがにたった一年で旅に出される事まで見越していたなんてないだろう。

そういう事で、師のもとに放りこんでくれた彼には極力恨みを抱かない事になっていたのだ。

して、いたのに。

「まず最初にジジイに報告とか、有り得ないだろ」

あの鬱陶しい好々爺に会いに行けと？

本格的な旅ではなくて、お試し、という事だろうか。

最初に旅に出た時に、故郷に報告しに行けと言われるとは完全に予想外だ。

重い溜息をついていると、あの、と、背後から幼い声がかかった。

「あの、すみませんが。ここで騎士風の男の人を見かけていませんか？」

振り返ると、誰も居ない。

首を傾げて少し視線を下にやると、クロツドよりも頭一つ低い位置に、声をかけた子供が立っていた。

紺のマントをすっぽり被って、フードのせいで顔はよく見えない。物乞いなどではないなとある程度の見当をつけたが、それにしてもフードで顔を隠すとは。

クロツドが眉を潜めると、子供も気付いたのか「すみません」と呟いた。

子供が手で払いのけたフードの下を見て、クロツドはあれ、と目を丸くした。

声からして少年だろうとは予想していたが、まさかこの近辺で瞳が鮮やかな紫色をしている人間に会うとは思わなかった。

「珍しいな……ヒスラン人でもないのに紫色か」

「えっ、やっぱり変ですか？」

「え？」

「あ……いえ、何でもないです。忘れて下さい」

言って、子供は紫の目を恥ずかしそうに伏せた。

フードを脱いだ少年は、まだ背が低い事からして、おそらく十三ほどだろうか。

緩く巻き気味の黒髪が短く首で切り揃えられていて、割と上層にいる奴か、とクロツドは思う。こつも綺麗に髪を刈り込んでいる人間は、今周りを行き交っている人々の中にも見当たらない。

(そついえば、真つ黒な髪も珍しいんじゃないか?)

改めてまじまじと見つめていると、少年はさらに縮こまる。

「あの……人を探しているんですが」

「あ？ ああ、そうだったっけ。騎士風の男？ 俺は今来たばかりだから知らないな」

「そうですか……ああ、どうすれば」

言つと、目に見えて少年が意気消沈したので、クロッドは慌てた。何だろうか。好々爺と同じで、構つてやらないと復活しそうにな気がひしひしと感じられる。あちらはわざとやる確信犯だが、こちらは本当にやっているのだから、余計性質が悪い。

そのうち誰かにつまく言い包められて、それにほいほいついて行く少年の姿がちらりと脳裏を過ぎり、クロッドは顔をしかめた。

……さつさと別れて見なかった事にしたのだが、何だろう、この強烈な後ろめたさ。間違つてもお人好しなんて柄ではないというのに。

半ば条件反射のように、言葉が口から飛び出た。

「俺、特に急ぐつて予定は一つぐらいしかないからさ。終わったら一緒に探してやろうか？」

きよとんと、少年はクロッドを見上げてくる。

「……よろしいんですか？」

こんな事を言われても、一度出てしまったものは仕方がない。好々爺と自分を恨みながら、クロッドは少年に微笑みかけた。

「ああ。あ、名前を覚えておいた方が良いな。クロッドだ」

少年は少し間を置いてから、一礼した。

「フュー、と呼んでください。ありがとうございます、クロッドさん」

町の中に入ると、二人は人混みをかき分けながら進んでいた。やけに人が多い上に皆浮き足立っているが、何か祭りでもあるのだろうか。

「おまえって、そもそも何であんなところにいたんだ？」

クロッドがフューに尋ねると、少年は困ったように首を傾げた。

「はい、えっと、連れの方と一緒にここまで来たんですけど……この町でもう一人、合流する予定なんです。僕が探している人は、その人に会いに行くから戻ってくるまで待っているって、宿の食堂に僕を残して出て行ったんですが」

「はあ？ 宿にいたんなら、何でまた外に出たんだよ」

「掃除の邪魔だと追い出されて」

それで宿の前でぼけっとしていたら、人の流れに吞まれて、あれよあれよと町の外に運ばれてしまったのだとフューは言った。

「……史上まれにみる鈍間だな、おまえ」
気を遣おうとしても、その間抜けさは言わずにいられないほど。

「やはりそうですか……」

しかし、すぐさま気の毒なほどに萎れた。

傍から見れば、年下を泣かす大人気ない青年の囃の完成である。

周囲からちくちくと非難めいた視線を浴びて、クロッドはフューに見えない所で顔をしかめた。

（俺のせいなのか!?!）

それとも呆気なく流されていくフューが悪いのか。

いや、間違いなく非はフューにある。そもそも宿まで戻ればいい話ではないか。

「宿に戻れば会えるだろ？」

「……………あっ!?!」

今気付いたのか。

思つて振り向くと、視界からフューは消えていた。しょうがない子供だ。大方また人に流されたのだろう。

「おい、フユ……」

呼ぼうとして、クロツドは見つけた。

町の建物の間を、引きずられるようにして男の二人組に連れて行かれるフュー。

何を思う間もなく身体が動いて、彼らを追いかけていた。

さっきの声、まさかあれで悲鳴だったのか。

いや、その前に。

「こんな所で人攫いに遭うのか!？」

事前を集めていた話では、少なくとも治安はそれほど悪くない上に、イウエンはその手の流通路から外れた町のはずだ。

だというのに攫われるとは。

(あいつどれだけ運が悪いんだ!?)

心の中で絶叫しながら、クロツドは追手に気付いて逃げ出す男らに向かつて、更に速度を上げた。

袋小路かどこかに追い込めれば、後はゆっくりと助け出す事もできる。焦るな。

言い聞かせてはいたが、嫌な予感は当たった。

頭上に突然気配を感じて、クロツドは息を呑んで立ち止まる。

軽い音を響かせて目の前に降り立ったのは、細身の男だった。

「止まんな、坊主。おまえさんには無理だ」

にや、と男が笑った。

しかし、その顔は一瞬にして驚愕の色に染まり、次第に苦悶へと変わっていく。

男の腹にめり込ませた拳を引き抜くと、クロツドはふっと目を伏せた。

「俺の連れだよ。返してくれ」

クロツドの細い見た目に騙されたのだろう。

あいにく、外見に似合わぬ怪力揃いというのがドラゴンの特徴だ。師に改めて磨き直された体術を舐めてもらっては困る。

ただ。

(……何で路上での喧嘩にまで通じんのか謎だよな)

割と危なげなものばかり仕込まれたはずなのだが、手加減次第でこんなに小回りが利くとは。

転がった男を踏み越えて進むと、既に遅かったらしい。

袋小路は袋小路だが、逆にこちらが追い込まれているような形になっていた。

フューは既に人攫い共の手に収まっているが、どうやらクロッドもおびき寄せて捕らえようと言う算段だったようだ。

少年の白く細い首に突き付けられたナイフを見て、クロッドは眉間に皺を寄せた。

「逃げれば……分かってるよな？」

フューの脇にいる男が、見下すようにクロッドに言った。

たった数刻前に知り合ったばかりの人間だ。別に見捨てても問題はないだろうが……。

それだけの時間で、フューがどういう人間かというのは嫌でもわかっていた。

「性質悪いぜ、つたく」

誰に向かって吐き捨てた言葉かは自分でも分からなかった。

男の癖に、ふるふると情けなく震えるフューの丸い瞳は、今にも

目から零れ落ちそうだ。さっきからナイフを突きつけられている首もやけになよなよしい。吹けば飛ぶような枝のようにひよろい身体も気に入らない。

師も痩身だが、あれは引き締まった肉食の獣を連想させる。こんな難のような雰囲気など欠片もない。

従順で素直で気の弱い、まさしく最弱。

だというのになぜ放っておけないのか。クロッドには理解し難かった。

しかし、この時確かにあの好々爺の勝ち誇ったような顔が目の前に浮かんだ。

彼はほくほく顔で言う。

「これが庇護欲じゃ」と。

(……マジでウザッてえ)

とりあえず、遠慮なく脳内で爺の尻を蹴り飛ばす。

結果として、クロッドは無抵抗のまま、人攫い共に捕まった。

*

最後に見たのは、男たちの実に腹の立つ笑顔だった。

「ぐっ！」

「うわわ！」

二人して乱雑に檻に放り込まれ、クロッドは呻いた。

がしゃん、と、身体に巻き付いた鎖が騒々しい音を立てる。先ほ

ど男を軽く伸ばしたのを見られたので予想はしていたが、この太さでは千切るのは無理だろう。

因みに、間抜けな声を上げたフューを縛っているのは、普通の細い縄である。

「……っはあ、くそ、おまえいくらなんでも間抜け過ぎだドアホ」「ううっ、い、言い過ぎですよっ！ さっきまではあんなに優しくったのに……」

「おまえにいちいち合わせてたら誰でも疲れるわ！」「ですがっ、連れの騎士様は合わせてくれました！」

「ああ、今ならそいつの根気を心から尊敬するね！ お疲れさんと声をかけてやりたいくらいだ！」

くそっくろツドは吐き捨てた。少年の瞳にはありありと怯えが浮かんでいる。

八つ当たりだとは分かっていた。

だが、この少年さえいなければ、こんな屈辱的な目に合わずに済んで、今頃は……。

「……………それぐらいにしておきなさい。いいえ、そろそろ黙れと言った方が良くのかしらね？」

血が上った頭に、冷や水を浴びせられた気分だった。

平たくて涼やかな女の声が耳に飛び込んできた。

転がって背後を見やると、十五程度の外見の少女が座り込んでいた。じゃら、と鉄の首輪から繋がる鎖が、彼女もまた囚われの身であることを仄めかす。

「そんな子供に八つ当たり？ 程度が知れるわね、下衆が」

「……………誰だよ」

少女は答えずに、つんと鼻を持ち上げた。

クロツドはしばらく唇を噛んだ後で、舌で湿らせて口を開いた。

「俺はクロツドだ。後ろの子供はフュー。で、おまえは何だ」

「ふん……ルミナ・ルラスキイ。魔術師よ」
その身形でか。

思わず言いそうになった言葉をクロッドは飲み込んだ。
いくらか汚れてはいるが、眩い白さのひらひらとした服は、明らかに。

「寝間着姿で言われても説得力ねえぞ。人攫い共が良心的な奴らで良かったな」

「ちょっとした事情があったのよ。ごちゃごちゃ言わないで欲しいわね。上客向けの良品で、手付けされていないものとして置いておくらしいわ。これでも今だけは自分の容姿に感謝してるのよ?」

片眉を上げて、ルミナは言う。

彼女の言う通り、確かに顔は整っている方だと言える。

陶器と見紛うほどに細やかで真っ白な肌と、珍しいとろりとした蜂蜜色の瞳、そしてさらりと長く揺れる白い髪。表情がやや硬いためか、「人形のようだ」と形容させるような、緻密で無機質な美しさがあった。

なるほど、性根が腐っていても貴族は見る目だけはある。いかにも彼らに好まれそうな容姿だった。

「で? あなた、何。人間じゃないでしょ」

「え?」

ぼかんとフューが後ろで呆ける。クロッドは舌打ちをしてルミナを睨んだ。

「どつという事ですか?」

「……説明が必要みたいね」

言いながら、ルミナは腕をこまねいた。

「擬態は上手い方だから、それと注意して見ないと分からないかもしれないけど。こいつの目を良く見てみれば? ちょっと縦に切れ長の瞳孔、それに全体的にうつすらと白目が色づいてる。ひどい時は耳が尖ってるらしいけど、こいつにそれはないわね。若いドラゴンは基本本人に擬態するのがまだへたくソなのよ。これが百年、二百

年となつてくるとほぼ擬態が完璧になるから見分け辛いらしいけれど……ってことは、へえ、あなた、外見からしても百年以下ね。ざっと六十年ぐらいってどこかしら

ドラゴン？ と目を瞠るフューを無視して、クロッドは低く舌打ちをする。

「……三十年だよ」

「 あら、まさかの天才肌？」

ルミナは目を丸くする。

「 いいや。おまえの予想通り、普通だよ」

ただ、師の居た場所で体験した事を思うと、嫌でも人への擬態は上手くなるのだ。

クロッドは彼女を睨んだままで唸った。

「 ばらすな。隠してる訳じゃないが、言うつもりもなかったんだ」

「 そう。でもその子には知る権利はあったわ」

ルミナは目を細めた。

再度舌打ちをして、クロッドは顔を背けた。

「 他人の秘密を見抜いて勝手にばらす女なんてろくでもねえよ」

「 ……あの、やめましようよ。とにかくここから出ないと駄目でしょう？ 僕たち、捕まってるのに」

少年の声に、しん、と檻の中は静まり返った。

「 あのね、この状況見て言ってる？」

ルミナがこめかみを揉みながら呟いた。

「 順に考えれば一番頼りになるはずのドラゴンがこんなぶつとい鎖で巻かれてるのよ。魔術師の私だって魔力封じの縄を巻かれてるんだから動けないわ。あんたは何もできないし。どうしろっていうのよ」

言葉無く隅に引っ込んだフューを見つめ、クロッドは無表情でル

ミナを振り返った。

「……おまえも大概ひどいぞ」

「あなたと一緒にしないで。事実を述べたまでよ」

檻の中の空気は、ここに至って氷点下まで冷え切った。

フューには悪いが、この険悪な空気を氷解させられる気がしない。ルミナにもその気がないようだった。

しかし、数刻後に先ほどの人攫いが戻ってきた時にはさすがに三人とも辟易しており、クロッドは檻から出されただけで安堵の息を吐く事になった。

外に連れ出されると、もう既に真夜中近い時刻のようだった。

黒布を頭から被せられ、急ぎ立てられた先で幌が付いた荷馬車に放り込まれる。他にも数人ほど同じように捕まった人間がいたが、誰も口を利かなかった。

「これからどうなるんでしょう？」

「普通どっかに連れて行かれて、競りにかけられるだろうな」

皮肉交じりに呟いたクロッドの言葉に、フューは震え上がった。

「良くて鑑賞、玩具扱い、悪くて趣味の拷問用とかね。ま、私みたいなのは貴族行きになるんでしょうけど。あなたも珍しいからそうなるんじゃない？ クロッドの方は……まあ、どっちとも言えないわね」

「そんなに珍しくなくて悪かったね」

唇をひん曲げて笑うと、ルミナも蒼白の顔に酷薄な笑みを浮かべていた。憎まれ口を叩ける内が幸せだという事だ。

馬車が動き出すと、ルミナとフューが姿勢を崩してクロッドの方へ倒れ込んだ。

大人でないとはいえ、勢いがなくとも二人分の重さは相当なものだ。御者の方に悪態を吐くと、クロッドは起きるに起きられない二

人のためにささくればかりの荷台に黙って横たわっていた。

おそらく早朝まで馬車は動き続けるだろう。

それまでにどうにかして逃げ出せはしないかと頭を回すが、やはりこの鎖が邪魔だ。

「……ねえ、あんた魔術は使えないの？」

胸の上に顔を乗せていたルミナが、ぼそぼそと囁きかけてきた。

クロツドは眉を潜め、囁き返す。

「やってみない事もないが、見た所あつちも魔術師を雇ってる」

ちら、と人攫いの一人を示す。腰に魔術を補助するための杖が差してあるのを見たのだから、間違いない。

「おまえら二人の縄を切る前に取り押さえられるのがオチだぜ」

「ドラゴンの姿に戻れば良いじゃない」

「簡単にできるか。おまえも言ったろ。人に擬態するのがヘタクソって事は、戻るのもヘタクソ。一苦労って事なんだよ。ある程度時間がないと無理だ」

「役立たずね……まあ魔術が使えるだけ良いわ。私の縄を切るだけでいいの。そうしたらどうにかしてみせる」

「……その言葉、信用できるか」

ルミナは片眉を上げてそれに応えた。

しばらく沈黙し、考える。

何もせずに連れて行かれるのが最悪の結果だろう。輸送の途中である今ならば人員も少ない。

暴れて逃げ出せるか。少なくとも、この少女が優秀な魔術師ならば、どうにかできる。いざとなればドラゴンに戻って少女とフューを引っ搦んで逃げればいい。

クロツドは再度人攫い共の様子を窺い、問題がないと判断する。

ルミナを縛る縄に、身をよじって手を押し当てた。

深呼吸。

一拍置いて、瞬時に藍色の淡い光が灯り、紋様を成した。

ぶつっと小さな音がして縄が切れる。

ルミナが素早く立ち上がり、気付いた人攫いが声を上げた。
魔術師が慌てて杖を引き抜くが、ルミナが早い。

「這い蹲りなさい」

ろくに呪文らしきものも唱えず、手を振り下ろしたただけで人攫い共が荷馬車から放り出され、数人が地面へ叩きつけられた。

残っている人数は四人。

ルミナが再び魔術を振るう。クロツドの鎖が耳障りな音を立てて割れた。フューの拘束も解かれている。

クロツドは飛びかかった四人の前へと躍り出ると、手前にいた男に素早く一撃を叩き込んだ。

傍らで一人がルミナが放った雷撃に吹き飛ばされる。まだ意識があったが、フューが飛びかかっておっかなびっくり、しかししっかりと頭を強打して仕留めた。

思わず硬直して立ち止まったもう一人の胸ぐらをクロツドは掴むと、脳天から叩き落として気絶させた。

最後の一人に意識を向けた所で、クロツドは息を呑んだ。

残った男が、泡を食って御者台の隅へと手を伸ばしている。薄っすらと荷馬車に配置された魔力の流れる道を一瞬で見ると、制止の声を上げた。

「よせ！」

遅かった。

「野郎……っ！」

隅にあつた魔術具が作動し、荷馬車が爆発する。

攻防に怯えていた奴隷らから悲鳴が上がったが、一瞬でそれも炎に呑まれた。

前方にいたクロツドらは爆破の衝撃で大きく放り出された。薄い草地の上に強かに身体を打ち付け、気付くと、放り出した人攫い共がこちらへ罵声を上げて向かってくる。

近くに倒れていたフューへ駆け寄った男の手に、抜身の刃が光った。

「フュー！」

腕を振るい、風の刃で間一髪、男を吹き飛ばす。フューを引つ張り寄せてから辺りを見回すと、荷馬車が進んだ分だけ僅かに人攫い共からは距離があった。だが。

「魔術師！」

フューに気を取られている間に、ルミナが捕まっていた。

「この……調子に乗りやがって……！」

「……っ！」

男に腕を振り上げられ、苦悶の表情が少女の顔に浮かぶ。

「ルミナさん！」

フューが叫び、クロッドは舌打ちする。

見捨てようかとも思ったが、フューのこの様子では後で鬱陶しい事になるだろう。

だがどうやって助ける、と思案した時

頭上が突然、真昼のように明るくなった。

「何だ！？」

男たちが次々に異変に声を上げ、どよめいた。

青白い光が草地を隈なく照らす。

何かの魔術か、とクロッドは思った。

しかし彼らの仲間がやった事ではない。ルミナもぽかんと空を見上げているだけだ。

では誰が？

「クロッドさん！ 上です！ 魔術なんかじゃないですよ！」

周りと同じように空を仰いでいたフューが、クロッドに促した。

「星が」

フューが指差した。

「星です、空の星を見て下さい！」

「星？」

相對している敵から意識を逸らす事は自殺行為にも思えた。だが、フューの切羽詰った声に抗えずに、言われるがままに空を見上げる。

天を埋め尽くす星の中。

そこに、今まで見た事もないような、蒼い光の筋が一つ、走っていた。

「はあっ!？」

腹の底から素っ頓狂な声が出た。何だこれは。

あまりの驚きに、その場の全員で乱闘を繰り広げていた事も忘れてた。

今までなかったはずの光の筋の出現。まさか、こんなに明るい光がどこから現れたというのだろうか。

筋の先頭を突っ切る巨大な光の塊の周りには、屑のように光の欠片が付きまといっている。その眩さに、周囲の星が光に負けていくつも見えなくなってしまうほど。

というより、あれは星と同じ場所にあるのではないか。

知識からすれば規格外の大きさだが、クロツドにはそれが何なのか心当たりがあった。

師が幼い時にも、あんな光の筋が空に走った事があつたらしい。

更に、先達のドラゴンらは言う。

光の筋が現れる度に、世界は大きく揺れ動いた。ろくな動き方はなかった、と。

聖典でも『凶星は白い禍を呼び寄せる』と、謎の不吉な記録があるのだから、人間であれ、知らぬ者は恐らく少ないだろう。

「……凶星　『蒼い矢』か!？」

忌まわしき異名を口走った時、その星から、

ぼろっ、と、

『光に包まれた何か』が、

『落ちた』。

ただでさえ恐れられている星の出現から、更に派生した異常事態。

人知を超えた恐怖に震えた人攫い共は、ルミナを放り捨てて逃げ出し、奴隷らも必死に千切れた鎖や重りを引きずり、悲鳴を上げて方々へと散った。怪我をして動けない者もその場に蹲って嘆き、神に救いを請うている。

ここに至り、場はまさに混沌とした様相を呈していた。

「クロツド、さん」

「……何だよ」

「何か、落ちたアレ……だんだん、大きくなってませんか？」

「……大きくなって？」

馬鹿か、とクロツドは腕の中の少年に吐き捨てた。

隣におっかなびっくりやってきたルミナも、色を失くした顔で星から零れ落ちた光を眺めている。

「大きくなってるんじゃないかねえ……あれは　」

「こっちに落ちて来てるのよ!？」

ルミナがクロツドの言葉を引き継いで悲鳴を上げた。

隕石だ。それも、凄まじい速度で飛来している。

「死にたくないなら走れ！」

「まっぴらごめんです!？」

死ぬという単語に反応したか、フューが半べそをかきながら先頭をきつて走りだす。すぐにクロツドが追いつき、ルミナと彼の手を取って宙高くへと放り上げた。

「ちよつとお!？」

「ひえええ!？」

抗議と恐怖の入り混じった悲鳴を聞きながら、

「　　瞳よ!」

クロツドは叫んだ。

視える世界が、切り替わる。

それと同時に、四肢が大地を掴んだ。

宵闇色の翼を広げ、宙を掻き、駆ける。

ドラゴンは、大地から、空へと舞い上がった。

前足の中に宙へ上げた二人を受け止めると、クロツドは隕石の軌道から必死に横へと逸れて旋回した。

「しつかり掴まってるっ!」

「ちよつ　冗談じゃない!　降ろしなさい!」

「今更この高さで降ろせるか!　死ぬぞ!」

「死んでもいいから降ろしなさい!　さもないと殺すわよ!」

「訳の分からない事抜かしてんじゃねえ!？」

「馬鹿!　フューが気絶してるのよ!　気付け!」

「はぁあ!？」

どこまで軟弱な精神だ。

すっかり肝を潰して意識を手放したフューも、少年とはいえ重さはそれなりにある。彼を支えながらドラゴンにしがみつくなど、確かにルミナには荷が重い。

しかし、現実残酷だ。

喚き合っている間に隕石はやってきた。

『マジでありえねえ！』

混乱の極致でクロツドは絶叫した。

『何だっというんだよ！？』

そして。

巨大な質量がクロツドらの背後を通過し。

隕石が大地への大激突を果たし、

全ての感覚が吹き飛んだ。

暴風すら可愛く思える程の風が吹き荒れた。

かまいたち
鎌鼬が生じたのと、生存本能のように全力で障壁を張ったのはほぼ同時。

『ぐああああああああつ！』

「つ、」

きりきり揉まれながらも、クロツドは必死で手の中の二人を守る。衝撃波が障壁を割り、クロツドの鱗をずたずたに引き裂いた。

地獄だ。

薄らと思っ。

たった十数秒という、しかしあまりにも過酷で長すぎた時間を、クロットはどうか耐え切った。

一難去った後の空で、ぼろぼろの翼で、しばし呆然と飛翔を続ける。

現実離れた体験に、ルミナも意識のないフューを抱え、どこか気が抜けている様子だった。

平坦だったはずの大地は、大穴が開いていた。無理やり押しつけられた土が穴の縁で盛り上がり、さらに遠い場所まで土の塊が飛び散っている。木々は衝撃で根こそぎ折られて、全てが綺麗に横倒しになっていた。辺りにばらばらと倒れたままの奴隷はぴくりとも動かず、生死も見ただけでは分からない。

しかし、そんな状況で、何よりも目を引いたものがあつた。穴の中央、最も深く落ちくぼんだ場所で、未だに蒼白く光る塊。おそらく隕石の本核だったのだろう。

それが、

もぞ

「……………ん？」

もぞ、もぞ

「……………嘘でしょ？」

もぞり、と。

「……………動いた、か？」

ゆっくりと光を集束させながら、塊　いや、その『生き物』は、
頭をもたげる。

一見、少し大きな犬とも猫ともとれる体軀は、妙に透けている。
透けた身体の奥は闇のよう。ともすれば吸い込まれそうな黒の中で、
ちかちかと蒼白い点が、星のように無数に瞬いていた。

獣はふるふると眩暈を振り払うように頭を震わせてから、クロツ
ドらに気付くと、首を傾げた。

そして、再び全身を光で包み

「……………女？」

一瞬の後に、その場には煤まみれの少女が出現し、こちらを見つ
めていた。

ルミナやフューーなら、辛うじて人型をした何かだという事しか分
からないだろう。

だが、クロツドの目にはしっかりとその少女の姿が捉えられてい
た。

そして、息を呑んだ。

藍の薄布で覆われた肢体はひどく白い。両手両足首には、ふわふわとした銀色の毛がついている。その手をついて、起き上がった少女の顔にかかっていた淡い蒼の髪が、剥き出しの白い肩に散るのも見えた。

露わになった少女の顔を見て、更にクロツドの思考は停止する。

少女は　銀の星を散らした、蒼い瞳から。

ぼろぼろと、やはり星を内包した涙の滴を零していた。

淡い桃色をした、薄い唇が小さく動き。

その動きさえ逐一追っていたクロツドは、少女の発した言葉の意味を、知る。

少女は言っていた。

助けて、下さい。と。

そうして、糸が切れたように、ふっつりと、彼女はその場に倒れ伏した。

・ 2 ・ 二人の護り手

「どうなってる？」

「よく分からない。たぶん、気絶しているだけだと思う」

初めてみるわ、とルミナは眉を潜めた。

「両手と両足首。この銀の毛、衣服かと思っただらこの子の体から生えてるのよ。きつとさっきの動物の姿と関係があるんだと思う……それに、この耳よ」

穴の底で横たわったまま、意識のない少女の耳にルミナは手を伸ばした。こちらは、髪よりも少し蒼が濃い。

「獣の耳だわ。……やっぱり本物。温かいもの」

「本当かよ」

言って手を伸ばすと、ぱちん、と乾いた音でルミナにはたかれた。

「何者であつても女の子よ。無闇に乱暴に触つてはいけないわ」

「……………あ、そ」

顔を逸らすと、フューを背負い直した。気絶した後、降りるまでに一度意識を回復したのだが、今度は眠気で潰れてしまっている。

ルミナとは二つ、三つ程度しか歳が違わないはずだというのに、随分とその容姿や言動には幼い所が多い。よほど外から隔離されていたのだと思えないほどだった。

「それより、どうする。どこかの町に行くにしても、金目の物は捕まった時に全部奪われてるぞ」

「……………その時は、」

ルミナはクロッドを指差した。

「あなたに全員誘拐されたって事にしておくわ」

「おい」

苦い顔で呻く。

「今すぐおまえをここで放置してもいいんだぞ」

「そもそも私とあなたって運命共同体だったかしら」
言われて、クロツドは目を見開いた。

どういう意味だと声を上げかけたところで、ルミナはふっと微笑む。

「冗談よ」

ルミナの細い指が、すっと少女の蒼い髪を梳いた。とても先ほど魔術を振るって、人攫いの男を数人吹き飛ばしたとは思えない、たおやかな手だ。

「この状況ではあなたと私でどうにかするしかないものね。あなたの連れも、この子も捨て置けないし」

クロツドは、ルミナの言葉にしばらく沈黙した。

「いやあつて、訂正する。」

「……魔術師」

「なあに？」

「こいつは俺の連れじゃない。町で迷子になっていた。今もたぶん、町に本当の連れがいる」

ぱつと見は愛くるしい顔が、音もなくクロツドに向けられる。

「なら、もとの町 イウエンに戻るより仕方ないじゃないの？」

「ああ。運が良ければ、人攫いの根城に戻って旅費とかも取り戻せるしな」

「ちようど良かった。私も杖を取り戻せたらと思っていたところよ」
杖なしでも魔術が使えていたようだが。

クロツドがその意味も込めて眉を上げると、ルミナはああ、と頷いた。

「あれだけではね。杖があればもう少し大きな術が扱えるわ。どの道、杖がなくちゃ魔術師なんてやっていけないし……」

「……それなんだが。おまえ、その格好はどうするんだ？ まさか寝間着で旅をするとか言わないよな」

「お節介ねえ、あなた」

呆れたように言われて、クロッドは鼻白んだ。またしても好々爺の「ふおっふおっ」と高笑いする声が幻聴のように耳に響く。「なるようになるわよ。どうせ私、これがあるし。何とでも想像してもらおうわ」

首の鉄の環を示し、人形顔に似合わない、人間臭い笑みを彼女は浮かべた。

きっと彼女ならそれすら武器にして何とかする。そんな気配がひしひしとクロッドには感ぜられた。

「それで？ フューの連れはどんな人間なの？」

「どうもどつかの騎士みたいだ。こいつも見たところ、上流の方にいる人間だしな……」

おまえはどうなのだから、とちらりとルミナをみやると、ルミナはふーん、と納得しながらも無表情だった。

詮索する気はないが、こちらもどうもフューと同じ臭いがする。

貴族の人間二人に挟まれ、謎の存在を前に困惑する異形が一人。想像して、クロッドは若干自分の目が据わるのを自覚した。入る町を一つ間違えただけでこれほど面倒に巻き込まれるとは。

「さつさと連れに引き渡すかして、俺も早く元の旅に戻るよ」

「それが良いでしょうね。……にしても、騎士がつかなくて。いくら聖衣を纏っているからって、この子、どれだけ身分が高いのかしらっ。」

「……聖衣を纏う？」

「フューみたいに、黒髪で紫の瞳を持つ人間。有名なのは？」

そういう事か、とクロッドは合点が行った。

伝承では、かつて聖戦において世界を救ったとされる聖人も、黒髪、紫の瞳を持つ存在だ。しかも、ひどく人間離れた中性的な容姿をしているという。どこまで話が美化されているかは定かではないが。

少女の髪を梳く手を止めて、ルミナはふと顔を上げた。

「でも、困ったわね。この女の子をどうやって運べばいいのかしら。」

そもそもフューについていた騎士は既に彼がいない事に気付いているはずだから、まずフューの方を探すべき……?」

ぶつぶつと呟く彼女の声を聞き流しながら、クロッドは他の場所へと目をやった。

いずれにしても、二人でフューと少女を一度に運ぶのは少々難しい。

それでもあれほど派手な隕石の落下だ。異常に気付いたイウエンの人間がやって来ているかもしれない。

大穴の縁まで上ると、クロッドは、ん、と異変に気付いた。

「……魔術師。おい、魔術師!」

何よ、と穴の底から声が返ってくる。

「周りに倒れていた人間が全員消えてる!」

「……何ですって?」

ルミナが慌てて穴の縁へ上ってきた。クロッドが脇にずれて場所を譲ると、彼女は白い髪をさっと流して、素早く辺りを見回した。

隕石が辺り一帯の木や岩を薙ぎ払い、丘を削り取ったため、視界は非常に開けている。

上空から見下ろした時も点々と奴隷や人攫いの体が転がっていたはずだったが、いつの間にか、どこを探しても彼らの姿が見当たらない。

「どついつ事?」

「知るかよ。大体、動けないように見えた奴まで消えてる。聞きたいのはこっちの方　っ!」

言いかけたクロッドの耳が、かさ、と草を踏む微かな異音を捉えた。

何、と言いかけたルミナに目線で黙れと合図を送り、音の方向を捉えようとする。

だが、その必要はなかった。気付いた時には、クロツドらの正面のやや遠くに、今までなかったはずの人影があった。

「……何だ？」

「転移魔術よ。それで突然現れたように見えただけ」

ルミナが、しっと低く鋭い囁きを漏らした。

「まさか、ここにいる全員を転移で送ったんじゃないでしょうね…

…そうとなれば、尋常じゃない魔力の持ち主だわ」

確かに、とクロツドは思った。

人影が現れた瞬間、身の毛がよだつような威圧感を感じた。あれは、強大な魔力の気配だ。

クロツドが目を細めて何者かを見定めると、その人物は白色のマントを被り、その上から同色のフードを目深に被っていた。男か女かも判別がつかず、長身である事でやっと男だと分かるような風体だ。

男はクロツドらの姿を認めると、すっと足を踏み出した。静かにマントの裾を捌き、こちらに逃げる事も、前に出る事も許さず、ゆるりとした速度で近づいてくる。

やがて、クロツドとルミナから十数歩といった場所まで近寄ってくると、男はそこで止まった。

「無傷か？」

フードの下から、確認するように声が響く。

ルミナが小さく息を呑んだ。

クロツドは横目で一瞬彼女を見やった後、また男に視線を戻す。

「無事なのか？ その子供」

言われて、クロツドは男が気にしたのは、こちらが背負っているフューの事だと気付いた。

「……フューの連れか？」

「そうなる予定だった、と言っておこうか」
ゆるりと男は首を振る。

「もう一人、イウエンで落ち合った男と共に宿を確かめたら、彼がいなくてね。調べたら人攫いが連れ去ったと知って、町で彼らの根城を潰したが、既に姿がない。そこに、外でこの騒ぎだ」

肩を竦めると、男はすつと手を差し伸べた。

「君たちは？ 見たところ、ずいぶんおかしな取り合わせだ」

「……私たちも一緒に人攫いに掴まっていたのよ。周りがこうなる直前に荷馬車の中でひと騒動を起こしたら、」

ルミナが頭上の星を指す。

「あんな巨大な星が現れて、更には隕石が降ってきたのよ。ちなみに、私の隣にいる奴は最初にフューを拾ったらしいわ」

「穴の中にも一人居るようだ。そっちは？」

「……女の子よ。こっちも巻き込まれて……奇跡的に無傷。でも気絶してるわ」

よくもまあそこまで適当に言うものだ。

そんな感想を抱きながらも、言っている陰で、ルミナがそつと体をずらした事にクロッドは気付いた。

それもそのはずか、と思い直す。

男は、『町で根城を潰した』と発言した。つまり、一人、もしくはフューの連れだった騎士の男と二人で、その場を制圧したという事になる。

もしも危害を加えるつもりなら、こちらは一たまりもなかったかもしれない。

クロッドのそんな危惧を感じ取ってかは知らないが、男はおもむろに、マントの下からやや大きい頭陀袋を取り出した。

重い音をたてて地面に放り出された袋から、からりと、金属がはめられた木の先端が転がり出る。

「……まさかそれって」

ルミナが小さな声で尋ねた。

「ご察しの通り、根城にあった荷物だ。君たちも含まれているんじゃないのか？」

「信じられない……」

ゆるゆる頭を振った後、ルミナは小走りに袋へと駆け寄った。金属がついた木切れの端を掴んで引っ張り出すと、中から見事な装飾のついた魔術師の杖が現れた。

「やっぱり、私のものだね。良かった……」

ほっと安堵の表情を見せて杖を抱きしめたルミナを見下ろし、男はくす、と笑った様子だった。

「お役に立てたようで」

ルミナは杖を傍らに置くと、袋の中を漁り始めた。ややあって、二つの小さな袋を中から取り出す。

一つは見覚えはないが、ルミナのもののような。

もう一つは。

「ほら、クロツド」

ばさつ、と飛んできた袋をとつさに受け止めて見れば、確かに自分の荷物だった。袋に残っていた魔力でも見分けたのだろうか。

胸を張って小さく微笑んで見せたルミナに頷くと、クロツドは自分たちを見守ったままの男に向き直った。

「で？　ここまで親切にしてくれたのは嬉しいが、あんたは何がしたいんだ？」

「……ふむ」

男は顎に拳を当てると、口の端をほんの少し吊り上げた。

「そうだな。お礼がしたい、って言えば、その子供と一緒に来てくれるか？」

言葉が終わるが早い。

景色が擦れ、変わった。

「っ！」

有り得ない、と口の中で叫びそうになる。

クロツドは若くともドラゴンだ。ルミナも魔術師。おまけにフユーまで加えれば、男は同時に四つも存在を転移させた事になる。いや 五つか、とクロツドは、足元に転がる蒼い少女を見て思った。そして、負ぶっていたフューは男の手の中に収まっていた。これほど大きな魔力を持った存在を含む大人数を、簡単に転移させられる人間など見た事がない。

動揺を隠し切れぬまに見回すと、そこはイウエンの町の中を通りだった。

夜中のためか、人気はほとんどない。

「ほら、こつちだ。この宿」

男の声に導かれて、通りに面していた宿の一つにルミナが躊躇いがちに入っていく。

自分も入るか、それとも立ち去るか。

どちらにしても、フューの身柄は男に渡っている。

クロツドもしばらくそこに突っ立ったままでいたが、やがて溜息を一つ吐くと、足元の少女を横抱きに抱え上げていた。

「……………ん、う」

抱き上げられると、無意識にか、少女は安定を求めるようにクロツドの服を掴んだ。頭も胸に擦り寄せられ、何やら小動物を相手にしているような心地になってくる。

「入らないのか？」

声をかけられ、クロツドは顔を上げた。

ドアからは宿の明かりが漏れている。

フードの男の後ろには、なるほど確かに、フューが言った通り騎士風といった格好の男が、何事かと覗き込んでいた。帯剣しているというのもそうだが、どこかの騎士団の印なのか、かちりとした服の襟元に鈍く銀に輝くバッジがある。その上、金髪に碧眼で、彫りの深い顔立ちもどこか気品が漂っていた。間違いなく貴族の一人なのだろう。

ここまで揃えば、疑う必要もそれほどないか。
考えて、クロッドは声を発する。

「……………あんたら、誰だ？」

思ったよりも、声はずつと擦れて乾いたものしか出なかった。

クロッドの質問に、男はフードの下で少し驚いたように息を吸い、それから軽く笑った。

最初に答えたのは、騎士の男の方だった。

「エリック・ヒュールス。ハルオマンド公国の騎士だ」

遅れて、エリックの手前にいた男がフードを脱いだ。

白い布の下から、見事な白銀の髪が零れ落ちる。

伏せていた瞼を男が開くと、鮮やかな紫色の瞳が現れていた。

「こっちは騎士じゃないが、同じく、ハルオマンド公国の下で動いている。レイディエン・ラリアン　レダン、と呼んでくれ」

北大陸のヒスラン人？

ぽかんと口を開けたクロッドは、再び促され、呆然としたまま宿のドアを潜った。

宿の一室に上がって程なくして、レダンがエリックと共に、湯気の立つカップを手にも部屋に入ってきた。

「飲むといい。温まる」

テーブルの上に置かれたそれを、クロッドはじつとねめつけるように見た。

「……別に毒は入れていないぞ」

「分かってるよ。変な匂いがしねえもん」

エリックの方に低く呟き返しながら、二人から聞いた言葉を元に考える。

ハルオマンド公国とは、確か、中央大陸の北西部に位置する大国だったはずだ。イウエンの町があるこの辺りはその傘下の小国で、公国はここから大体南西に位置している。

その下で動いているという二人は、少なくとも、間違ってもそこらのごろつきや傭兵などでは有り得ない。身綺麗な服装といい、明らかに身分の高い人間の下で動いているし、公国では相応の扱いを受けている事だろう。

そして、とクロッドは思う。

ベッドで蒼い少女と共に寝こけているフューは、それ以上の立場にいる子供、なのかもしれない。

ルミナの方を窺うと、彼女は二人のいるベッドの近くで椅子に座りこみ、何かを考えている様子だった。

「……、いるか？」

「……あとで頂くわ」

「ふうん」

カップに口をつけると、この辺りの香草を使った湯らしい。すつと通る香りと共に、温かいものが胃まで滑り落ちて、いくらかクロツドの気は緩まった。

同時に、溜息をつく。

「火を起こせるとはねえ」

「別にここの薪を使わせてもらった訳じゃない。魔術だよ」

目も伏せがちに、レダンがカップを傾けた。

「冬明けだからね。今の時期、一番物が少なくなっている。イウエンの彼らは公国民ではないのだから、余計にここで甘える訳にはいかない」

「……レダン」

クロツドはぽつりと呼びかけた。

「あんた、人間じゃないだろ」

「……そういう君も、ドラゴンだろう？」

隣にいるエリックは、どちらの言葉にも驚いた様子は見せていない。

つまり、レダンが異形である事を知りながら共に行動している。

クロツドの事は、おそらく階下にいた時にでも彼から聞いたのかもしれない。

「も？ 『君も』って事は、あなたはドラゴンなの？」

ルミナがふと顔を上げて聞いた。

「まあ、端くれではある……はぐれ者だよ」

小さく笑うその顔には、自嘲する気配は見られない。

何の気負いもなく、自分が変わり者だと自覚しながら、むしろそれを誇っているようだった。

「だから、君たちみたいなのが混じっていても移動させる事ができたんだ」

宿の小さな一室にドラゴンが二人　ぞつとしない話だ。

「……にしても異常だな。まだぴんぴんしてるなんて。例え一人だけとしても、ドラゴンを移動させるのにどれだけ消耗するか、知らない訳じゃないだろ」

またしても、微笑んだままで彼は全てを語らない。

話したくないのか、聞かせられないのか。それとも別に話す気がないのか。

いずれにしても、強大だ、という事実は変わらない。

これほどの力の持ち主がこの中央大陸に潜んでいながら、なぜドラゴンたちの間で話題にすら上らなかつたのだろうか。

カップ一つに口元と自分の邪推を隠しながら、クロッドは更に問う。

「ハルオマンドの下にいるのは」

「そのエリックが仕えているのと同じ人間に頼まれてね。その子を安全に連れて来て欲しいって言われたんだ」

頼まれた　命令される立場の者が使う言葉ではない。むしろほぼ対等。それでいて、ハルオマンドの配下であるという事を否定はしなかつた。

(エリックとやらの方とはかく、このレダンを従えられる人間が、ハルオマンド公国に存在すると　恐ろしい話だな)

口の中でそう独りごちる。

「ところで、君の好奇心はこれでもう満たされたのかな」

尋ねられて、クロッドは目を瞬いた。

「まあ、一応は」

「では、今度はこちらから聞くのか。というか、対面する上では一番大切な事だけだね」

言いながら、彼はにっこりと笑う。

「君たち、名前は？」

「ついでに、」

そして、笑みと対照的に、少しも笑っていない目が鋭くベッドを見た。

「君の事も、少し、聞いてみようか？」

問われて、思わずルミナと顔を見合わせてしまう。

ベッドの上では、いつの間にか蒼い少女が起き上がって、眠そうに眼をこすっていた。

レダンに問いかけられてきょとりとした後、困ったようにこちらを見つめてくる。

見つめられた方は、顔を引きつらせた。

「……何で俺を見る？」

「何か関係があるのか？」

どうなんだ、と。

エリック、レダン、ルミナの三者から突き刺さる視線に、クロッドはカップを持ったまま硬直するしかなかった。

因みに、このレダンことレイディエン・ラリアン。

笑うと意外に美人だという事が、この時発覚した。

「……それで、どうなったんですか？」

やはり、仔リスのように頬をぱんぱんにする事はない、か。

少年フューの上品な食事風景を眺めながら、クロッドは溜息交じりに答えた。

「どうもこうも。隕石から現れたあの女、一体何者だったと思う。おまえの従者のレダンとエリックもそうだけどな、とんでもねえ奴だったぞ」

むっとフューは眉を寄せ、目を伏せてパン切れを口に押し込んだ。しばらく口を動かしていたが、飲み下して、少年は言う。

「あの二人は従者じゃありませんよ。僕を迎えに来てくれた人たちですから。お化けみたいに言わないで下さい」

「傭兵崩れまで雇ってた奴隷商の根城をたった二人で鎮圧したら、十分お化けだろうが……」

まさかそこまで大規模なものがイウエンに存在しているとは思わなかったが、浮上した問題はそれだけでは済まなかったようだ。発覚するなり、今日の未明には早馬が町の門を出ていったという。

今後イウエン周辺にも様々な噂が立つ事だろう、と、難を乗り越えたクロッドは、既に全く他人事として事態を捉えていた。

……それと、レダンまでもがドラゴンだったという事は、しばらくフューには黙っておいた方が良さそうである。

『お化け』の二人は、現在フューとクロッドが遅い朝食を摂っている部屋にはいない。イウエンから出立する人数が急に増えたため、その調整に動いている。昨夜意識を取り戻した蒼い少女とルミナは服を着替えると言って不在だった。

がた、とテーブルに頬肘を付き、クロッドは嘆息する。

「寄り道したら、師匠は怒るかねえ　？」

何がどうであれ、確実に、面倒に巻き込まれつつあるのだけは確

かだな、とクロッドは思った。

「初めまして、アウルフィアの方。私、わたくしアストラ・シンシアフと申します」

開口一番に、隕石から出現した少女はそう告げた。

彼女の外見は、夜空の下で見た時もそうだったが、獣のような耳を除けば普通の人間とはほとんど変わらなかった。

淡い蒼の髪も特に妙ではない。蒼い髪を持つ人間は中央大陸の東方にも存在している。肌はどこその王国の姫君などよりも白そうだったが、決して不健康な色ではなかった。瞳は獣だった時に似てか、濃い蒼の中にいくつもの星が点々と瞬き、覗き込んだ者に不思議な世界を見せている。

そして……フューと同じで、全体的にひよろっこい。

じろじろと観察しながら、だが、とクロッドは首を傾げる。

気が弱くてお人好しそうに感じさせる顔立ちだが、フューと違うのは、何やら少女の根幹の部分にしっかりと芯が通っていきそうな事だ。

一体芯の何がどう違うのやら、と思いながら、少女の口にした言葉について、目を伏せがちに聞いた。

「ああ、こっちこそ初めまして……けど、アウルフィアっていうのは？」

「アウルファイアとは、あなた方の世界を指す言葉です。つまり、今私がいる世界の事ですね」

「……何だか、世界が別にあるみたいない言い方ね」

クロツドの側らに座るルミナが、半目でそう言った。

「? はい、事実そうですが」

しかし、少女はきよとんとしたのみで、事も無げにそう答える。

しばらく思案顔になった後、アストラは手を窓の外へ差しのべた。

「あの星が見えますでしょうか?」

「……まあ、ここからでも一応見えるね」

「随分と明るい星だが、あれは凶星の『蒼い矢』ではないのか?」

レダンとエリックが好き勝手に相槌やら疑問を口にする。

「アウルファイアでは、そのように伝えられているようですが……実際は少し違っています」

アストラは困ったように微笑みながら、へた、と耳を垂れ下げた。

「あれは、私どもの世界のエマルファイアから、異なる世界であるアウルファイアへと通じている、今の所判明している唯一の道なのでございませう。それと、私が降ってきた時の隕石ですが、あれは私が力任せに道を突破してきたせいで生じたものでして。本来なら、普通に通れば全くこのように被害を出す事無く、アウルファイアに降り立つ事ができるのですが、少しこちらの都合が立て込んでいて、出る場所がずれてしまいました。それだけのために、アウルファイアの方々にはご迷惑をおかけしてしまい、本当に申し訳ないと思っております」

「……非常事態が起こってあんな事になったのか?」

しかも、巨大な穴ぼこを平原のど真ん中に作るほどのものが、ただの余波。

聞いてクロツドは呆れた。本体であった彼女の周りで起きていたのは、果たしてどれほどのものだったのやら。

とはいえ、考えても詮無い事ではあるのだが。

「……この惨状云々は抜きにしても、つまり、貴女は異なる世界か

らやってきたと言いたい訳だ?」

エリックの問いかけに、アストラは頷いた。

「はい」

即答する少女を前に、クロッドは眉を寄せた。

疑う余地は、ない。

事実、隕石が星から降って来て、その中から彼女は出てきたのだから。

だが。

「……なあ、一ついいか?」

「はい、何でしょう?」

ぼかん、と口を開けたまま、クロッドはアストラの耳を指差した。

「その耳は?」

「え?」

ぴくん、と、ふわふわと毛に覆われた、大きな三角の耳が震える。

「ああ、これですか? アウルファイアの方には珍しいでしょうね。」

エマルフィアでは一般的なんですけど」

「……化けるのが下手って訳ではないのか」

「はい?」

「あ、いや。何でもない」

否定しながら、これがドラゴンであれば腹を抱えて笑い転げられただろう、とクロッドは内心でぼやく。半人前以前に、四分の一人前にも満たないようなぼろの出し具合だった。

自分の師の近くにいた幼いドラゴンは、クロッドの周りにいた幼年の者たちからすれば恐ろしいくらいの人化の完成度を誇っていたのだが。蛇足のように思い出し、遠い目をする。良くも悪くも、あの師がいた場所は異常だった。

(……師匠なら、こいつの言う事についても何か知っていたのかね)
内心に呟きを落とすと、緩く頭を振る。

師の知識とて、限界があるはずだ。そんなに何もかも知っているのは、そう、神といった、ドラゴンや人間を超越した存在だろう。

考え込んだクロッドに代わり、ルミナがアストラに質問を投げかける。

「それで。あなたはまたどうして、ここにやってきたの？」

少女ははつと表情を変えた。

「あ、はい。それはですね」

彼女が耳を軽く震わせると、胸の前にほわんと小さな星色の光が灯った。

質問したルミナだけでなく、クロッドもまた目を瞬かせて、しばらく光に見入る。

やがて光が何かの形を成して、少女の手の中に収まった。

覗き込むと、クロッドより一回り小さな手の平に、球を平たく楕円に延べたような形をした、金の首飾りが乗っていた。

「これは、私たちの間では“ヴァンリール”カンタ” こちらに通じる言葉で言えば、王の証と呼ばれるものです。通称カンタと呼びますね」

「ヴァンリール”カンタ……」

レダンが顎に拳を当て、考え込むように呟いた。

「王の証を持つって事は、君は王族か何かなのか」

「ええ、まあ」

少女はそこで手の中のカンタを見下ろして、ほろ苦い笑みを浮かべた。

「このカンタですが、本来はいくつかの力ある宝玉がはまっていて、将来王となる者を守り、王位まで導く力があるとされています。…

…しかし、見ての通り穴だらけで、今は宝玉は一つしかありません」
少女の言う通り、中央に大きなもの、周りに点々とそれより小さい、五つの何かがはまりそうな空洞が環状に開いている。唯一埋まっている空洞は環の上方で、そこにあるのは星色の石だった。つまり、全部で六つの石がはまるのだ。

「ルーティルは星の如く、イオは淡き紫紺を流し、アウインは宵の

美しよ、ベリルは深き真理の賢者、クオンは淀みなき意志となり、
王の血の紅きルベラを崇める」

聖句のように唱え、少女は息を吐いた。

「古くから伝わる、カンタに収められたそれぞれの石を称える歌です。ここにあるのは『導き』を司る星色のルータイルのみ。残りの宝玉であるイオ、アウィン、ベリル、クオン、そしてルベラは、随分前にこの世界にやってきたヴァンリール。先達の王の一人が、戦乱に巻き込まれた際にアウルフィアに置いて来てしまったそうです。そして」

ここにきて、アストラの声がしぼむ。

「私がこのアウルフィアに来たのも、それらの石を集め、エマルフィアに戻って民を護るため」

（『 私はそんな使命を携えて、この世界にやってきたのです』）
アストラの静かな声が脳裏に響く。

「使命、ねえ……」
クロッドは頬杖を突いたまま、アストラの言葉の数々を反芻していた。

昨夜はあの蒼い少女からは、彼女が抱える理由しか聞く事はできなかった。

しかし、それを聞いたところでクロッドに何ができる訳でもない。五つの石のどれか一つについて行方を知っていたならば、話は別だ

ったのだろうか　それも無いのだ。

王族の使命？

「そんな大層なもの抱えて、どう生きるつもりなんだか」
溜息交じりに呟いたのを、フューがじっと見つめている。

「……何だよ？」

「クロツドさんは、アストラさんの使命には興味はないんですか？」
「ねえよ。大体何だって俺がそんなものに首を突っ込む必要があるんだよ」

クロツドの返答に、フューは眉を潜める。

「……僕は？　僕の時はどうだったんですか？　興味本位ではなかったんですか？」

「あれは、ただの迷子だと思ったんだよ。一体誰が、あんな面倒な奴らがおまえなんかに関わってると思うんだ？　誰だって親か連れかに引き渡して終わりだと思っただろ」

それがどうすればここまで事態がこじれるのだ。

イウエンで予定していた一泊は絶対にこんなはずではなかった。

「おまえはあれか？　そういう星か何かの下にでも生まれてるのか？」

「違いますよっ！　いくらなんでもひどいです、クロツドさん。僕はちゃんと星位聖の定めた日に
「
がたん、と椅子が鳴った。」

「おい、おまえ」

咄嗟にフューの口を塞いで、クロツドは低く囁いた。

こちらの豹変に、フューは目を真ん丸にして、椅子から腰を浮かせた中途半端な姿勢で硬直した。

少年が完全に黙ったのを見ると、クロツドは軽く殺気も含めた、

どす混じりの声を喉の奥から絞り出す。

「……星位聖なんてのは、確か聖神教でも御大層な吉日とやらを定める星見の最高位だろ？　ここは信仰に身を投げ打つ貴人ばかりがうろつく王都じゃない。無闇に大声で自分の出自を語るな。死ぬぞ」

「……っ、」

一気に血の気を失くす少年の口から手を離すと、クロッドは立ち上がった際に後ろへ倒れた椅子を引っ張り起こした。

「……ま、こいつは世間知らずみたいだから、たまにこれぐらい言っただけでいいだろ？」

問いかけは、フューに向けてではない。

「ああ、おかげで助かった」

部屋の入口に立っていたエリックは、クロッドの後ろにいるフューに向けた目を、そっと注意するように柔らかく細めた。

「秘密は誰が聞いているか分かったものではない。知られて身の危険が生じる可能性があるならば、自分の事を無闇にばらすのはやめておけ。……ここは生家ではないのだから」

言われて、フューは俯いた。

叱られてもすぐにしよげる。

少年のくるくるとしたつむじを眺め、クロッドは半目でしばらく椅子に座るかどうするかを決めあぐねていた。

しかし、結局フューの頭に手を置いた。

きよとんとする紫の瞳から顔を背け、フューの黒髪をぐちゃぐちゃにかき乱しながら、クロッドは内心で独りごちた。

(やっぱり関わるんじゃないか)

と。

「それで、結局どうする事に決めただ？ 我々の提案に乗るのか？」

エリックが口にした提案とは、彼らについてハルオマンド公国へと向かう事だ。

幸いにも、イウエンからそれほど遠くはない。寄り道をしたとしても日程に支障が出ない程度だろうが あまり気が乗らない。

「俺、エウロア山地の方に行かなきゃならないって言ったよな？」
「だが急ぎではないのだろう。世界を見て来いと送り出されたのなら、ついでに来てても問題はあるまい」

好々爺への報告は、のんびりしていい事でもないはずだが。言いかけてクロッドは口をつぐむ。

「 ああ、そうだ。アストラというあの少女の事だが。異世界から来た、という事は伏せたが、それ以前にこの世界に、彼女は身寄りを持たない。故郷も存在しないような流浪の身となる事は目に見えている」

「……だから？」

クロッドは低く、エリックに聞く。

「私とレダンはハルオマンド公国の者だ。そして、昨夜アストラを保護した時点で、彼女の身はここイウエンではなく、公国の預かりとなった」

聞いて、クロッドは小さく舌を鳴らす。

「面倒を押しつけられたって事だな」

「まあ、そうなる」

反吐が出るとまではないかないが、気分は良くはなかった。

イウエンの連中にとって、昨日の騒ぎによって現れたアストラと

いう存在は個人ではない。面倒事だ。

それを大国がわざわざ拾ってくれたのだから、彼らは諸手を上げて歓迎するだろう。そしてその時点で、公国側であるエリックやレダンは、アストラを伴ってハルオマンドへ帰還する義務が生じている。

不可能ではない。故に、途中で放り出す訳にもいかない。いや、そうする事も可能だろうが、実行できるほど二人は非情ではない。貴人に近い人間ほど、情を持つか、持たないかに二極化していく。そして二人は前者に属していた。

心理に付けこんだ、あざとい方法だ。

「……嫌いなんだよ、そういうの」

小さな呟きを拾って、フューがクロツドを見上げた。

視線を無視したまま、エリックに尋ねる。

「ルミナはどうなった？」

「彼女は彼女なりに事情があるようだ。共にハルオマンドに行く事を承知している。故に、後はクロツド、君だけになる」

「ふうん」

クロツドはフューをちらりと見た。

（『クロツドさんは、アストラさんの使命には興味はないんですか？』）

（『ねえよ。大体何だって俺がそんなものに首を突っ込む必要があるんだよ』）

アストラの使命などに興味はない。むしろ無謀な挑戦としか思えない。

だが。

「行くよ、ハルオマンド。あんたの言った通り、こっちの旅は別に

「急ぎじゃないからな」

「ぱかん、とフューの口が開いた。エリックが眉を寄せるが、少年が気にする様子はない。」

「クロツドにとっては、それほど驚かれたという事が心外ではあったが。」

「……クロツドさん」

「何だよ」

「どつという風の吹き回しですか？」

「俺はいちいちおまえに、今俺が考えた事の報告をしなきゃいけないのか？」

「クロツドはそう大いに呆れて、」

「あの女の使命に興味はねえが、俺が何でもかんでも面倒がると思うなって話だ」

「一度関わったからには、一つ終わる所まで付き合つのもまた一興だ。」

「師に教わった通り、無理にでもそう思う事にすると、少しだけ嫌厭する気も薄れた。」

「なあに？ 結局あなたも来る事にしたの？」

「若干呆れ気味にルミナがそう言ったのは、イウエンの町の外で顔を突き合わせた時だった。」

白い髪に合わせたのか、それとも元からのレダンの持ち合わせでもあったのか。ほとんど白に近い淡い色のローブにすっぽり身を包んだルミナの姿は、クロツドに服に着られているような印象を抱かせた。少女の後ろには、同じような色合いの服を着たアストラがこつそりと隠れている。こちらはすらりとした体格で長身気味のためか、細くてぶかぶかだが、埋もれているという感じはしなかった。「気が向いてな。おまえこそ、何だつてこの旅に同行するんだ?」「だつて、私の旅は別に行く当てはないもの」

ルミナは肩をすくめた。その拍子に、クロツドは彼女が既に首輪をしていない事に気付いた。いつの間にと取つたのだろう、と考えていると、少女はこちらの沈黙をどう捉えたのか、再び口を開いた。

「家には戻らないわ。手引きしてもらつて出てきたの。奴隷として攫われたのはただの手違いだつたし……」

言つと、そのままクロツドの隣をさつと通り過ぎて行く。と、立ち止まつて振り向いた。

「あなたは?」

「俺は　まあ、師匠に追い出されたようなもんだ。目的地は一つあるが、その後は決まっていな」

そう、とルミナは頷いて、離れた場所にいるフューと付き人である二人の下に歩いて行った。

(……さて)

クロツドは改めて、取り残された格好になつたアストラの方を振り向いた。

「……皆さん、いろんな理由でここにいらつしやるんですね」

感慨深げに言つのは置いておくとして。

ひくひくと被つたフードの端が動くのを見て、クロツドは頬を引

きつらせた。

「おまえ、あんまり耳は動かすなよ。獣の耳が生えてる人間なんかこの世界にはいねえぞ」

「人間じゃないですよ。元の姿は御覧になったでしょう？」

言われて、あらゆる意味で衝撃的だった昨夜の事を思いだす。

そう、まだ昨日の事なのである。

一日が長いものだ、と感じながら、アストラが現れた時の記憶を掘り起こすと、確かに獣のような姿を一瞬だけ見ていた。

「……身体が透けてた。あれは？」

「ああ、私たち、身体の中に小さな空を抱えているんです。そうですね、アウルフィアの皆さんが魔術、というものに該当しますでしょうか。魔力みたいなものなんですよ。力の使い方自体はかなり変わっているんですけどね」

機会さえあればいつかお見せします、と、少女はほわんと微笑んだ。

「……あ、そ」

「む、ひどいです、クロツドさん」

目を逸らすと、アストラは目尻をめつと吊り上げた。

「素っ気ない態度ばかりしていると嫌われちゃいますよ」

「大きなお世話だよ。つうか、おまえいつ俺の名前を知ったんだ」

「ルミナさんから聞きました」

それから一拍置いて、躊躇うように彼女は「人でないとも」と付け加える。

「あの。……鱗がその顔中に生えるって本当ですか？」

「そりゃさぞかし気色悪いだろうな」

どこまでも他人の秘密を勝手に漏らす女だ。

舌打ちして本人を見やると、ちょうどルミナはクロッドとアストラを呼んだところだった。

「二人とも、何をもちたしてるの？ そろそろ出発よ」

「あ、はい！」

慌てて、アストラはとたとたと走っていくと。

「あっ」

やりやがった、とクロッドは洗面になった。

あるかないかという石に躓き、アストラが見事にすっ転んだのである。

地面に倒れたまま、きゅう、と呻く少女の首根っこを掴んで引き起こす。

年下のフューだってここまで間抜けではない。

「氣い付けろ」

「す、すみません」

苦笑する少女から顔を背け、嘆息する。

こんな不注意な女が、本当にハルオマンドまで無事に辿り着けるのだろうか。甚だ疑問だ。

同じ事をルミナも少なからず感じていたのか、アストラを不安そうな顔で見えていたが、ふとクロッドを見て言った。

「あら？ あなたどうしたの？」

「何だよ」

顔が熱っぽい、とルミナは言う。

「……ん？」

そういえば、妙に身体が熱い。

「おいおいおい、」

クロッドは冷や汗を垂らした。

まさか、異世界特有の妙な病気をもらったのか。

「レダンに聞いたら？ あなたの先輩でしょ、一応？」

「……フューが見てるぞ」

「大丈夫よ。今はエリックに何か言われてるみたい。とにかく、自分の体調ぐらいいつかり管理しておきなさいよ、ドラゴンくん」

改めて去っていくルミナの背を見送ると、クロッドはぼそりと呟いた。

「……おまえの方がよっぽど年下だろ？」

結局、出発するまでにアストラはもう二回ほど何も無い所で転んで、その度にフューやらエリックやらに助け起こされていた。

「熱っばい？ ああ、魔力熱だな」

聞かれると、レダンはすぐに答えを返してくれた。

歩いている時は、転びやすいアストラを心配してフューとルミナが彼女の両脇を挟み、その少し後ろをエリックがついて行く、という隊形になっていた。

レダンとクロッドは一番先頭に立って歩いているため、必要以上に声が後ろに届く事はない。

「幼い時、個体によるが、魔力の量の変わる幅が多いと頻繁に倒れたりして熱を出すそうさ。兄がよくかかった病気だな」

「ふうん。……あなた、兄貴いるんだ？」

「ああ、いる。ここ数年顔を合わせてはいないけどね。まあ今は元気にやっつてるようだから、君もきつと大丈夫だ」

言いながら、レダンは少し眉を寄せた。

「見たところ軽度のようなのだが、辛くなったら言ってくれ。何とかしてやる」

「何とかって、できるのか？」

「魔力が急に多くなりすぎるからいけないんだ。吸い取るぐらいはしてやれるから。ただし、少し多めには残しておくけどね。こればかりは身体を慣らしていくしかない」

「あ……なるほどね」

しかし、今までこれといった急激な身体上の変化はなかったのだが。

「成獣の時間が近いんじゃないか？ ちょっと鱗を出してみてくれ」

言われて、手の平に少しだけ鱗を出現させた。夜では宵闇色の鱗も、日の下では少し濃い、とろみのある蒼に見える。

浮き上がったそれを軽く爪で叩き、ふむ、とレダンは首を傾げた。

「子供ながら、だいぶ硬くはなっているな。並みの魔物の牙や爪程度なら、簡単には通さないだろうが」

「つまり？」

「まだまだ気を付ける必要がある。重い一撃だと貫通しかねない。

特に人間が扱う剣や矢は対魔物用の物もあつたりするから、もしも対峙する場合は油断しないように」

生々しい話だが、それだけ可能性があるという事だ。

神妙に頷いて、クロッドは鱗を再び人間の軟な皮膚へと変えた。

そういえば。

「……あなた、鱗は何色？」

「実は、太陽が出てると嫌がられるんだ」

レダンは小さく微笑む。

「何で？」

答えは、レダンがクロッドにかざした手の平から返って来た。

「っ!？」

眩しい。彼の手の中央がきらきらと発光している。

「……んだよ！」

「こついう事だ」

「はあ？」

彼が手を少し傾けると、きら、と太陽の光を反射して輝く白銀の鱗が見えた。

呆れて脱力するクロッドを見て、レダンは爽やかににやにやと笑っていた。

「利点は、こついう嫌がらせができる事」

確かに地味ながら痛い攻撃である。

クロッドは胡乱な目でレダンを見つめ、無言で頭を何度か縦に振ってやった。

後でどうにか報復しよう、と決意した。

「あの二人は何をぎゃあぎゃああと喚いているのかしら？」

「会ったばかりなのにすっかり仲が良くなっちゃってますね、クロ

ツドさんとレダンさん。僕、まだレダンさんには馴染めてないのに」
よっぽど気が合うのだろうか。

アストラを挟んでフューとルミナが顔を見合わせると、後ろを歩くエリックが口を開いた。

「レダンは私の時のように固くならなくとも大丈夫だ。あれの方がむしろどちらかという気安いから、貴方も話しやすいだろう」

「……あなたの人見知りっぷりは推して知るべし、って感じね」
「う」

ルミナからの憐れみを含んだ視線に、フューは顔を歪める。

「それにしても、あなたとレダンって全く対照的な人間じゃない？
片や真面目、片や飄々として掴みどころが無しって……よく一緒に行動ができるわね？」

「レダンは家の主に氣質が似ているからな」

エリックはぼやくように言った。

「二人揃ってみる。からかわれる身からすれば恐ろしい事この上ない」

「……まあ、弄られそうな損な性格してるものねえ、あなた」

「ルミナさん、エリックさんにまで言うなんて……怖いものなしです」
「すね」

アストラがやや無理のある微笑みを浮かべて言った。

「でも、という事は、レダンさんは魔術を使うからエリックさんの後援になるんですね？」

「魔術は彼が得意とするところだが……目立つのを嫌うから、あまり使わないな、あいつは」

エリックはフューを見下ろした。

「むしろ私より前に出て、殴る蹴る、頭突き目潰し足払いといった方法で薙ぎ払う奴だ」

エリックの言葉を聞いて、全員が微妙な顔をした。

それは……凶暴過ぎる。

「繊細な見た目と性格見事に裏切ってますね!？」

この一行の無茶っぷりは慣れるしかなさそうだった。

そもそも、繊細という言葉が似合うルミナやレダンがなぜ一番危険な匂いがするのか、フューには理解できない。

「あ!？ 言ってる傍から!？」

「アストラが声を上げた。」

「えっ!？」

フューが振り向くと、クロツドの飛び蹴りをレダンがさっといなしている所だった。

「あ、足取られた!」

「あいたっ! 背中ぶつきましたよ!？」

「負けず嫌いね……立ち上がったる」

「今度は……おっと」

「うわぁ、うわぁ」

「……あ……足払い……」

アストラが蒼褪めた横で、エリックが淡々とクロツドの動きを分析している。

「なかなか動きが切れているな。あのレダンをこかしたか」

立ち止まって二人の喧嘩を眺めていると、倒れたレダンがむっくりと起き上がる。

いったん途切れた手合せの流れがまた始まった。

「本気になったな」

「あの二人馬鹿じゃないの？」

「子供っぽいんですか、レダンさんって？」

「いや、あれはクロッドが若くてレダンが面白がってる方だ……つと、危ないな。レダンの奴、関節を極める気だったか。うまく逃げたが」

「ええっ!？」とは、フューの声である。

「クロッドさん、逃げて逃げて！レダンさん本気ですから！」

「レダン、怪我をさせるなよ。腫れると後で面倒だ」

「了解」「馬鹿野郎！」と二つの返事が返ってきたが、その後で悲鳴がフューたちの方まで聞こえてきた。

「あ……あぁー」

見ていて怖くなる。

「勝負あつたのかしら？」

「ぴ、ぴくぴくしてますよ……!？」

「いや、まだ抵抗してる。あのクロッドとやらはすごいな。よく鍛えられている方だ」

家の騎士団に入らないだろうか、と呟いているが、ドラゴンが騎士になってもいいのだろうか。

思っただけで、いや、とエリックが首を振った。

「レダンもそうだったが、ドラゴンは全身が武器で鎧だからな。新しく武術を学ぶのは逆に戦闘力を押し下げる可能性もあるから、面倒なんだそうだ」

「……レダンさん『も』？」

何だ、とエリックが眉を上げる。

「クロッドから聞いていないのか？一見でレダンがドラゴンだと見抜いたぞ」

「ええっ!？初耳ですよ!？」

「そりゃああなた、その時寝ていたし、そもそもドラゴンを人間が

転移させられる訳がないって魔術の常識も知らないもの。無理ないわ」

ルミナがばつさりとそう告げた時。

組み伏せられたクロッドの手がぱったりと地に落ちて、手合せはレダンの方に軍配が上がった。

「いやあ、なかなか良かった。怖い技を決めるし、関節をやるうとしたらぬるぬるとカロウみたいにすり抜けていくんだから、手強いな」

「あんたが強すぎるんだよ！ 何だよさっきの関節技、死ぬかと思っただぞ!？」

「場合によれば意識くらいは落ちるね、確かに」

「レダン!」

「ははははは」

悲鳴のようなクロッドの抗議を、レダンは軽く笑い飛ばす。

その横で、アストラが「カロウって何ですか?」「美味な魚だ」とエリックとやり取りをしていた。

「それで、今僕らは大体どの辺りにいるんでしょう? 朝早くから出発して、結構西まで進んできましたよね? で……こうしてシウォー又川の河原で休憩している訳ですけど」

「クロッドさんばてましたものね」

「アストラ」

「はひゃいっ!?! すみません!」

一方、フューがぺろん、と荷物から引っ張り出した物を見て、全員がぼかんとそれを凝視した。

「地図？」

「えっ、珍しいですか？」

「いや、おまえ、それ……ひょっとして大陸地図か？」
クロツドが聞くと、フューはにっこりと頷いた。

「あ、はい。お父さんが役立つかもってくれたんです」

「『かも』って……あなた、本物だしたらその地図はすごい価値よ」

ルミナが擦れた声で言う。

「まだ大雑把に地域を把握したものぐらいしか各国にはないのに……あなたといいあなたの父親といい、常識を知らない訳？」

慌てた少年は、交互にエリックとレダンの顔を見る。

二人はこめかみに手を当てたり、眉間を揉んだりとそれぞれ苦悩していた。

「……まあ、細かい事は後日改めて明かす事にしよう。ここでは少々不安が残る」

げんなりとした顔で、レダンがその場を収めた。

とはいえ、随分と精巧に作られたものに見える。

しげしげとクロツドが広げられた地図を眺めたところ、地図は原本ではなく、手作業で写されたもので、そこにいくつも書き足して補足がされているようだった。

現在よく知られた中央大陸の国名、主な山地や川、平野。街道も大きなものは残さず太い線で書かれている。

相当量の資料、文献が無くては、到底書ける物ではない事は確かだ。

「まあ、あれだ。今はこの辺りだな」

エリックが指でぐるりと円を描いたのは、ほとんど大陸北西部の山脈近くで、シウォー又川もかなり上流まで遡った地点だった。

「ここからシウォー又に流れ込む支流沿いに南下して、明日はルデイの坑道を通る。今日は行けたとしても坑道の前までだな」

「ルデイ……山脈の下を通る大坑道よね。伝説では、蛇の魔物が掘ったらしいっていうけど」

「はあ、とクロッドは溜息を吐く。

「飛べば早いぞ。イデイエの山脈なんかここから数刻で超えてやる」

「金輪際嫌よ。あなた、飛び方怖いのよ」

言って、ルミナがふと期待を込めた様子でレダンの方を見たが、彼は首を振った。

「やめておいた方がよい」

エリックがぼそりと忠告する。

「彼の飛び方は慣れないと酔うと定評があるからな」

「それは……嫌です」

アストラが控えめに反対の声を上げた。

「まあ、そういう事だから大人しく歩こうじゃないか」

レダンは頷き、懐から取り出したパンの欠片を口に放り込んだ。

「ルデイの坑道を通ったら、今度はどこまで行くんですか？」

こちらの世界の地図を見るのは新鮮なのか、アストラがきらきらと星の散る目を輝かせた。

「そりゃ、山脈の反対から出てるこの川沿いに下って行くしかないだろ？」

「あ！」

クロッドの言葉に、フューが顔を明るくした。

「じゃあこの中流辺りのリートの町から、舟で対岸のテッタまで渡

って」

「そこから再び陸路で北上、目的地、オリスヴィツカを目指す」
ふーん、とルミナが目を側めた。

「魔物ばかりの黒の森があるせいで大回りね」

「あ、それで上流付近には町の名前がないんですね」

「そういう事だ。まあ、リート辺りまで来れば、ほとんど家の領地は目前だけだね」

「何ていう領地なんですか？」

「大公領だよ。数年前はラーニシエス領と呼ばれていた。というのも、ラーニシエス大公爵家が、代々ハルオマンズの地で五百年以上支配してきた土地だね。下手するとこの大公家自体、ハルオマンズ建国以前から存在してるんじゃないかって言われている。早い話が歴史ある土地だって事かな」

そして、エリックが最後にこう締めくくった。

「フューはもちろんの事、残りの三人も、ラーニシエス大公に謁見する事になる。失礼のないように気を付けてくれ……とはいえ、」

「まあ彼の性格からすると、とても礼節を気にしそうにはないんだけどね。公の場では別、って程度かな」

レダンが苦笑した。

言われた側のクロッドとルミナは、何が何だか良く分かっていない顔のアストラを挟み、複雑な顔を見合わせる。

「……大公、ですか？」

「えらくまた話が飛躍したな」

よもやハルオマンズ公国最高位の男に会う羽目になるとは思わなかった。

「だって、そうだろ。ラーニシエス大公といえ……」

「三年前、旧ハルオマンド王国に政変を引き起こし、中央大陸北西の実権を名実共に握った男……そして、中央大陸北部の情勢において、現状最も大きな不確定要素」

ルミナは言つて、腕をこまねいた。

「でも、何だつてまたそんな男が、フューみたいな子供を迎えに側近の二人を寄越したのかしら」

「みたいな、と例えたものの、ルミナ自身、フューがただの貴人でないとは察している事だろう。」

聖教の天文学最高峰、星位聖に生まれの星を定められた子。

大陸全土の地図という強力無比な力を与えられた子。

そして、大国の主が、おそらく懐刀とも言つべきこの二人をつけた事実。

かたん、と、大公が盤上の駒を転がす音が聞こえた気がした。

何にしても。

クロツドは内心で呟き、冷や汗を垂らす。

ひよつとすると、これは。

たった六人というちっぽけな規模で、大陸北部を揺るがす事態が動いているのかもしれない。

面倒に巻き込まれた程度の話では済まなくなってきた事を、ルミナと二人で察しつつあった。

・ 3 ・ 一転、公国へ（後書き）

『1・始まりの出会い』で序章におけるクロツド編は終了。次回からは別の登場人物たちが動き出す事になります。

- 1 - 花園の祝福、彼女の再訪

大公領の中心地たる都、オリスヴィツカの頭上は曇り空だった。

開け放した窓から吹き込む湿った風は、白いレースカーテンを重たく揺らして、仄暗い執務室の中に入り込んでくる。

ともすれば遠雷も聞こえてきそうな そんな春の嵐の気配を感じながら、ぼんやり眺めていた窓の外から、視線を下へと落とした。百年単位の年月をかけて使い込まれた机の天板を、そつと手で擦る。飴色の表面は塗料を塗った訳でもないのに艶があり、冷たくて心地良い。

家人のおかげで埃一つないこの机の上で、この辺り一帯を治めるラーニシエス家の当主は長い間、様々な思案を巡らせ、土地を護ってきた。

その時代ごとに合った立ち回りを続けてきた領主家の意志がこもっているように思われて、少しの間瞼を閉じる。

「……考え事？」

かちゃ、と背後で音がする。

振り向くと、見慣れた娘の顔がこちらに微笑みかけているのが目に入った。

淡い陽光にも似た金髪を頭の後ろで丁寧にシニヨンへと結び上げ、べつ甲の櫛を潔く一刺ししただけ。仕着せを何の違和感もなく着こなす姿は完璧な侍女の一言に尽きる。

娘の名は、アンジェリーナ。娘に近しい者たちは、彼女より彼らに許された名を用い、サシヤ、と呼ぶ。

そのサシャの側らには、ティーセットの載った台が停まっていた。彼女から目を逸らし、窓の方を見やる。

「もう、そんな時間かな？」

休憩は一日に最低三回。

初期に根を詰め過ぎて一度倒れた事で、彼女にしつかりと釘を刺されたのは未だに身に染みている。

「少し早いわ。でも、今日の執務で裁量する分は、それほど量が多くないって聞いたから」

「まあ、強力な助っ人が居てくれるからね」

白んだ窓の外を眺めながら、言った。

午後の気怠い昼下がり。そんな、都の至る所で溢れていそうな光景が、外界から一つ離れたここにもやってきている。

数年来の疲れを癒すように、とろとろと流れる時を過ごすには、丁度いい時間だった。

それとも、と、部屋に満ちている静寂の捉え方を変えてみる。

今日の空と同じように、これは嵐の前触れだろうか、と。

部屋の中に二人も居ながら、無言のまま、時間だけが流れている。やがて、ほんのりと執務室の中に漂い出した香りは、嗅ぎ慣れたものだった。

「ねえ、大公」

「何」

「……机の上のそれ、何なの？」
「手紙」

百年使われた机の上には、何年も前からあったのだと言っても納得できそうなほど、古びた封筒が置かれている。

わざと古ぼけた封筒を選んだのは、別に深い意図はない。

適当に良さそうな物を見繕ってくれ、と言って、逆に執事に聞き返された。

誰に出すのか、と。

答えると、渡されたのがその封筒だったのだ。

「何度も出そうと思って、出せないままなんだ。さっさと出せってレダンにもエリックにも怒られたんだけど」

執務机の椅子を引き、身を沈める。

サシャがそつと差し出した紅茶を受け取り、一口含ませて一息をついた。

「出しにくい相手？ あなたほどの人が？」

「私にだって一人ぐらいいても、どうせ君は驚かないだろう？」

サシャは一瞬表情を固まらせたが、その次には、「まあ、」と曖昧に頷いた。

「心当たりがあるもの。あなた、私まで心配させて泣かせたものね」

「理解してくれて助かるよ」

苦笑いする。

「……彼女は、今？」

「さあ。どこにいるんだろうね。どこにいても不思議じゃない気がするんだ」

指を絡ませて手を組む。

顎を乗せるか、額を当てるか。迷った末、結局、そこに鼻先を埋めた。

「でも、届け方はどうしてか知ってる」

言った時、ノックの音が来訪者を告げた。返事を返すと、執事が入室してくる。

その手に抱えられた鳥籠の中に、鷲が押し込められていた。サシャが脇に退き、自分は立ち上がって手紙を拾い上げる。

執事が籠の扉を開けると、窮屈そうに鷲は籠から抜け出て、執務机の脇の止まり木に降り立った。翼を悠然と広げた彼の首元には、透明な玉の首飾りが光る。

近づくと、鷲は主人の意を悟って、じつとこちらを見つめてくる。口に指を寄せると、甘噛みされた。

「甘ったれ」

くす、と笑った後、そっと手紙を首元の玉へと近づけた。白い光が漏れて、一瞬で手紙は玉の中へと吸い込まれ、透明だった玉の色も真紅へと変わる。

身を屈めると、ずっしりとした量感が右肩にのしかかった。左手を回して、太い足や胷、翼を順に叩き、魔術をかけてやる。

「今のおまえなら、海を越えて行けるだろう？」

聞くと、鷲は喉を鳴らした。

サシャと執事の二人が見守る中、無言で窓際へと寄り、そして、

「行け」

鷲はゆっくりと翼を広げ、主人の肩を押して、外の世界へと滑り出た。

重苦しい雲の下を、低く滑空して彼は飛び去って行く。

「どこへ行ったとしても。あの子は、必ず君の下に帰る。そうだろう?。」

言って薄く微笑み、思い浮かべた男の名を呼んだ。

「カーレン・クエンシード」

誰かが自分を呼んだ気がして、薄っすらと目を開く。視界の端で花が揺れて、額をまろく風が撫ぜた。

春の初めに来てもまだ、ドラゴンらが住まう北大陸のクラスア山地は寒いの一言に尽きる。ようやく下界の真冬程度に寒さが緩まったという所で、それでも厳寒並みなのだから、本格的な冬の世界は推して知るべしである。

しかし、厳しい気候の中、湖の湖畔の一角であるここだけは一年を通して結界に覆われている。太陽の力で大気の温もりが保たれていて、寒さを避けるにはうってつけの空間であり、夏だとしても、湖の近くであるために空気は涼やかだった。

近年は もっぱら、カーレン・クエンシードの療養場所として使われてきたのであるが。

数年前、クラスアの外で瀕死の重傷を負った事が原因で、半年まともに動く事すら許してもらえなかった時期があった。

例えば散歩。

たまに気晴らしでもしていないと、鬱々と心が滅入って仕方がなかった。故にベッドを抜け出して辺りを出歩く訳だが、

そんな自分を見かけると、里のドラゴンはまるで死人でも見たかのように全員顔を蒼くして、カーレンをベッドに突っこむ。

仕事もそうだった。

クエンシード一族を束ねる長になっていながら、自分の住む里であるウィルテナトの状況は愚か、他の里の事すら最新の状況について知らない。

どうしたものかと、ぶらっとドラゴンの姿に戻り、翼を広げて崖から飛び立とうとすると、

足にしがみつかれて引き戻され、またしてもベッドの中に突っこまれる。

腐って昼寝にここを選ぶと、発見したドラゴンにはすわ意識を失ったかと騒がれ。

「昼寝も満足にさせないのか」とその時の彼を叩きのめして気絶させ、体力の健全ぶりを示したところで、ようやくあちこちを出歩く事を許されたという経緯があった。

深呼吸をして、胸の中に改めて大気を迎え入れる。

花の中にこうして埋もれていると、花卉で溺れそうな気さえした。何といっても、世界が甘い。しつとりと朝露を滴らせる花から、ふわりと芳しい香りが匂い立つのだ。

たとえ直に見えなくとも、肺を一杯に満たす香りが、辺り一面に

色とりどりに花が咲き誇っている事を容易に想像させた。

何に導かれた訳でもなく、気まぐれに、色濃く眼前に迫る蒼穹に手を伸ばして　その手を、もう一つの白く細い手が取った。

自分の他、誰もここには居なかったはずだというのに。

「……………？」

驚きに目を見開いてまじまじと眺めていると、くすくす、と笑い声が聞こえた。

「カーレン、驚いた？」

里では聞いた事のない声だと思った。張りのあって、澄んだ若い女の声。

だが、どこか懐かしいと思うのはなぜだろう。

頭を右へ少し傾けて見ると、長い銀色の美しい髪を緩く二つに縛り、頭の両脇から肩の前へと降ろした、娘と言ってもいい少女の姿が目に入った。

クエンシード。

天を貫く山の奥地、ウィルテナト　この場所に住まうドラゴン
の一族が冠する名を、そう呼ぶ。

そして、カーレンの手を握って微笑んでいたのは、一族の特徴となる、白銀の髪と紫紺の瞳を持った少女だった。

目が合った瞬間、とあるドラゴンがかつて垣間見せていた優しさを少女の瞳の奥に見て、鋭く痛みが胸を走った。

「……………ユイ？」

その名は、もうこの世界のどこにもいない、小さな幼馴染のものだった。

だが、その幼馴染の面影を残し、女として成長していた彼女は、大好きだった彼がすぐに自分と気づいてくれた事にもっと喜んだようだった。

「久しぶり。元気にしてた？　あれから、もう、熱を出して寝込んだりしてないよね？」

言われて、過去を思い返す。幼い時は、魔力も身体も成長の仕方が不規則だった。その度ごとにしょっちゅう体調を崩していたので心配しているのだろう。

「……………ああ」

「立派になったねえ、カーレン。クエンシードの長さまになったんでしょ？」

「……………そうだな」

「で、エルニスお兄ちゃんは副長なのよね！　私、ずっとそうなればいいのになあって思ってたから嬉しい」

えへへ、と笑ってから、ユイはふつと遠い目をして溜息を吐いた。「ふう……………それにしても、うっかり寝ていたらもう三百年経っちゃったのかあ。きつとお兄ちゃんもベルも変わっちゃってるのよね」

とはいえ、私も精一杯変わってみたんだけど。

言って、ユイは胸を張る。立派に成熟した身体つきだというのに、わざわざびったりとした服を着て、彼女の身体が描く流線を強調していた。太ももなどは特に、際どいところまで見え隠れしているような気がする。きつと兄のエルニスが聞けば、大いに嘆いた後に、それを目撃した自分の首を絞めにかかるだろう、とぼんやり想像した。

「……………どこでね？」

耳に飛び込んできたユイの前置きに、カーレンは再び意識を向ける。

「あのね。今日はちょっと、カーレンに一言物申しに来たのよ」

ユイの真剣な顔を眺め、カーレンは目を何度か瞬いた。

「……何だ？ 急に改まって」

「改めて言っておく必要があるから改まってるのよ！」

びし、と音でもしそうな調子で、指が鼻先に突き付けられた。

「カーレンのお姫様の事。彼女から、『絶対に』、気を抜いちゃダメよ！」

カーレンの身体が瞬時に強張った。

「……何で、その事を知ってる」

「どこがおかしいの？ 私は未来を識るドラゴンよ！ 舐めてもらっちゃ困るんだから」

ユイは頬を膨らませた。

「カーレンは昔から変なトコで鈍ちゃんなんだから！ 女の子って敏感よ……絶対、今までのツケを払って身綺麗にしておくこと！ さもないと後悔するわよ。あ！ それとこれお兄ちゃんにも言っておいてね！？ もしもベリブンハントを泣かせたりしたら承知しないんだから！」

「いや、ベルとエルニスについては心配ないと思うが……」

カーレンはこめかみに手をやった。気のせいだろうか。頭痛がする。

「……ユイ、おまえまさか、私をずっと見ていたりしないだろうか？」

「ちょっと、カーレン、何当たり前の事を聞いているの？ 私があげたヴィランジエの首飾り、ずうずうつとつけてたじゃない！」

ユイが目を丸くするのを見て、カーレンは今度こそ頭を抱えた。

「いろいろ知ってるよ？ 例えばカーレンがもうすぐ成獣するかし

ないかつて時にすつごく綺麗な女の人に来てー、聖騎士の軍団の隊長さんだったもんだから、まさかドラゴンだって言い出せなくて結局無理やり弟子にさせられたりしてたわよね？」

「分かった……やめる」

「あ、あと盗賊団に絡まれて成り行きで拾った女の人と……」

「……ユイ」

「他にも何だかすつごく荒れてた時期があつて、お酒にお金に……これまたやっぱり」

「ユイ。それ以上言うならこちらにも考えがある」

「だから身綺麗にして話よ。お姫様には下手に隠したりせずに話すのよ！ 約束だから」

思い出すだに恥ずかしい過去（というか遍歴）を赤裸々に白日の下に晒してくれる少女から目を逸らし、カーレンはぼんやりと空を見た。

ああ　　そういえば彼らの母親が、よく悪戯をしでかしたエルニスやベル、そしてついでのように巻き込まれたカーレンにも、恐ろしい顔をして説教をしたものだったが　　ユイも彼女の子供という事か。

「まあ、お姫様についてはこの辺りにしておいて。今までがついでの話ね」

「本題じゃなかったのか」

「ここからよ」

言つて、ユイはおもむろに手を伸ばして、カーレンの喉元　鎖骨の中心辺りに、とん、と軽く触れた。

「あなたが今、持っている力……霸王ドラゴンつていうんだっけ？　普通のドラゴンと何が違うのか、私には今一つ分らないんだけど……いろいろ見え過ぎちゃうらしいわ。使い所には十分気を付けるのが良いってホーちゃんが言つてた」

「……見え過ぎる？」

カーレンは眉を潜めた。

ドラゴン
霸王。

それはカーレンが、生まれながらに秘めていた力。力というよりは、一つの資格であり、様々な理由からカーレン自身を制約の中に縛り付けていたものだ。深手を負ったのと同じ時期に、ようやく自分のものとして自由に扱えるようになったものの、未だにそれが何なのかは漠然としか掴めていない。

おそらく、ドラゴンよりも一つ上の次元の何かへと自分の存在が昇華されるのだろうとは、当たりをつけているが。

だが、それよりも、ユイの口にした人物の方が気になった。

「ホーちゃん？」

「そう、ホーちゃん」

ユイは微笑み、頷いた。カーレンの疑問に答える気はないようだ。「私はね、たまにカーレンの近くにいない時、ホーちゃんと一緒にお茶飲んでたりしてたの。……でも、今回はその間に大変な事があったみたいだね。……頑張ったんだね、カーレン。お姫様と、自分のために」

す、とユイが喉元を突いていた指を下ろし、カーレンの左胸と、脇腹の辺りを撫でていった。

服の上からだったが、そこにある深い傷跡を、ユイは正確に探り当てた。

彼女の手が通り過ぎた後、胸の傷の辺りを掴むと、カーレンは目を伏せる。

「……もう、走らなくていいか？」

「うっん、もう少しだけ頑張る必要があると思う。でも、それだけ今までは一番、カーレンの心が辛い時だった。これからは、……少なくとも、気持ち程度はましなはずよ」

ぼそぼそと言われた言葉に、カーレンは溜息を吐いた。どうやら、自分が平穩を得られるのはまだまだ先らしい。少し考えればそれもそうかと納得もできる。一つの一族の長になっただけで、何もないと楽観視するのはあまり現実的ではないだろう。

「頑張つて。あともう一、二息だよ」

言つて、ユイは立ち上がった。

「それともう一つ」

「まだあるのか」

「これで最後よ！」

一瞬苦笑すると、ユイはそれをすっきりした笑みへと変えた。

「起きたら」、お兄ちゃんと岩棚に行つてみて。これも絶対ね。覚えた？」

頷くと、ユイは「よろしい」と満足げに呟き、

「それじゃあ、またね」

言つて、湖の中へと“入つていった”。

一瞬、心臓が嫌な跳ね方をした。

死を連想する。

おかしい話だ。もう彼女は死んでいるのに。

かつて、幼馴染は魔物に殺され、自分の前で死んでいった。

その傷はかなり癒えたと思つていたが、やはりまだ深く心に刻まれているらしい。

「ユイっ」

目を瞠つて、次の瞬間には跳ね起きた。

湖に足を踏み入れると、身を切る冷気が体を這い上がってくる。

構わずに進むと、鳩尾辺りの深さまで水をかき分け、カーレンは

口走っていた。

「待て 早まるな！」

「こっちの台詞だ、馬鹿野郎。寝言はベッドの中で寝て言え」

後頭部に強烈な衝撃が走り、そして、カーレンは夢から覚めた。

*

「おまえ、とうとう夢遊病人か何かに成り下がったんじゃないだろうな？」

耳に馴染んだ声が言った。

突然頭を強打され、痛ましく腫れ上がったただろう場所を押さえて、カーレンは呻いた。顔のすぐ近くでは、水面がちゃぷんちゃぷんとこちらを嘲笑うように揺れている。

寝ても覚めても、場所は湖の中だ。

気付くと現実と夢が重なり合っていた、というのは、経験がない訳ではなかった。だが、実際に寝たままで移動していたのはこれが初めてである。眠りに落ちる直前の記憶では、自分は確かに岸辺で寝転がっていたのだから。

痛みが少し収まってくると、カーレンは自分を制止した彼の名を呼んだ。

「……エルニスか」

カーレンの幼馴染、兼、右腕を務めるクエンシードのドラゴンが、背後で盛大に溜息を吐く気配がした。

「一応聞いておくが。気は確かか？ そうだな、当ててやる。仕事の多さに嫌気が差して現実逃避気味に入水自殺を凶つたんだろう」
エルニスに向き直ると、カーレンは端的に自分の中で起きていた出来事を説明した。

「……ユイが花畑の中にいた夢を見ていたんだ」
言った途端、どうにも言葉足らずだと思った。

案の定、エルニスの眉尻が情けなく下がっていく。「勘弁してくれ」と口の中で呟いたらしかった。

「なあ、本当におまえ頭大丈夫だろうな？ 妹があの子から迎えに来たとか言うなよ、頼むから。仕事が多いなら多いと言ってくれ。皆に言つて減らす努力をしてやる」

「いや……だから、一種の啓示だと……。……？」
違和感を覚えて、カーレンは胡乱な目でエルニスを見つめた。

「……いつからだ？」

「さあ。ところでおまえ、頭は大丈夫か？」

もう一度エルニスが繰り返したので、カーレンは呆れた。

彼に近寄ると、喉の奥からたつぷり息を吹きかけた。

しばらくお互いに無言だった。

ややあって、カーレンが引き攣った笑いを浮かべながら吐き捨てた。

「朝食は“トカゲ”の鱗煮でいいか？ 馬鹿」

ぶはっ、と、エルニスが空気の塊を肺から押し出した。

そのまま爆笑し続ける彼に背を向け、「いつその事入水自殺を本

当にしてやろうか」と毒混じりに笑う。

「悪かった。拗ねるな」

「拗ねてはいないが、面白くはないな」

きつと最初は、朝方から湖の中にいるカーレンを見つけて、血相を変えて飛んできたはずだ。エルニスが気を落ち着かせるための方便だと思つ事にした。

「それを拗ねてるって言うんだろ。ああ、朝食は鱗煮じゃなくて普通の肉か魚がいいな」

ふむ、とカーレンは唸る。

「肉、か」

二人して耳を澄ませたが、辺りでは小動物の気配はおるか、鳥の囀りすら聞こえなかった。

「……仕方がないな」

溜息を吐き、湖の結界の外へ向かって泳ぐ。

結界の中と外では、大気も水の温度も違う。どれほど違うかという、結界のすぐ外側から湖に厚い氷が張っているぐらいだった。

氷の上へと這い上ると、途端に濡れた全身に叩きつけるように吹いてくる寒風に、ぞっと背中が逆立つのを感じた。

後から続いて氷を軋ませたエルニスもまた、寒さに顔をしかめている。

「げ……後で絶対に火に当たるぞ」

「ああ。だが、」

頷くと、カーレンはくいつと親指で氷の下を示した。

「その前に、一仕事してもらおうとしよう」

しばらく体を揉んだり擦ったりしていたエルニスは、カーレンのその動作を見て、一瞬黙り込む。

そして、意を得たりとばかりに、にや、と笑った。

雪の斜面を勢いよく駆け下る。

革のブーツの縫い目から、ぞっとするほど冷たい冷気が足先にまで忍び寄ってくる。

布を何枚か巻いたはいいが、ブーツの中は湿っているのか乾いているのかも定かではなかった。

着込んでいる物もありったけの防寒の魔術を施したが、やはりまだ若干粗い部分がある。不完全であっても、ほのかな温かさはないよりはましだったものの、いつかここを訪れた時よりも格段に感じる寒さは厳しいもの。

本当に、ここに住んでいる彼らが強いドラゴンたちである理由が嫌でも分かる。

一つはこの寒さ。もう春も近いというのに、極寒と表現してもまだ生ぬるいような、究極の環境。

それに。

「！」

ズン、と、眼前の雪を割って、下から巨大な魔物が姿を現した。見上げるほどの巨体に、思わず足を止める。

形容するとすれば、熊、だろっか。

さっき出くわしてから、ずっと追いかけてくるのだ。

極限に近い世界にも拘わらず、こうして生息する魔物たち。クラズアの生態系では、ほとんど大人しい生き物はいないと言ってもいい。

弱肉強食、ここに極まれり。幼いドラゴンでも、数日もてば良い方だという。

定期的に成獣したドラゴンたちで魔物狩りをしているそうだが、それでも彼らの住処の周りはこんな風に、人間の想像を絶する強さの魔物ばかりだ。

ちなみに。

食べると、美味らしい。

「、、！」

人間には理解不能な雄叫びを上げて、熊の魔物が腕を振り下ろす。唸りを上げて迫るそれを避けて飛び退ると、大量の雪が衝撃で吹き飛ばされた。

誰も踏みしめて汚す事のなかった処女雪が、あっという間に表面から削り取られる。分厚く積もって固まったはずの氷の層は割れ、黒い岩肌が裂け目から顔を覗かせた。

「……、」

眉を潜めてしのぐ方法を思索した時、更に背後で雪原が揺れる。横目でちらりと見ると、山の斜面を駆け抜ける黒い群れが迫っている。

一、二……

頭数を数えて、くすり、と思わず笑いが漏れた。

三十。それと目の前の熊を合わせて三十一体。相手に不足はないだろう。

手加減はしない。

だってこれは、自分に課された試験だから。

熊から逃れながら、軽やかに雪の上を走る。

目的の経路を半分は走った。

残りは手の中で済ませても、次の一撃までに何とか間に合うだろう。

この攻撃の魔術の欠点は、威力が大きいくらいほど構成する時間が長くなる事。どのやり方の魔術でも同じ事だが、意味の抽象化による省略は、こちらの方がよっぽど極端に突き詰めやすい。

さあ

口の中で呟いて笑う。

お遊びは終わり。

ここからだ。

手袋に覆われた指先を、宙に這わせる。

同時に、足元を魔力が走り、辺りが一面銀の光に輝いた。

一筆書きの左右対称に似せた幾何学な図形。

途中で切れた部分を描き出すように、宙には小さな続きが現れる。先ほどのものに加え、更に身体の奥底から練りだした魔力をこれでもかと放り込み、腕を横に鋭く振り切ると、宙の図形は先ほど走って描いてきたものと同じ大きさになった。

「 いけ」

小さな呟きと共に、二つの紋様が重なる。

次の瞬間、周囲が白く弾け飛んだ。

地響きの中で悲鳴が背後と正面から同時に上がる。三十一の魔物の断末魔は、聞いていてなかなか怖気が走るものだった。

巻き上がった細かい氷の粒が霧に変わる。

次第に静かになると、白く変わった視界は薄っすらと紅色になり、やがてむっとする血の匂いが辺りに充満した。

それらを再び紋様を描いて風で吹き飛ばすと、周りの様子はすっかり一変していた。

「……あ」

そして、大量に転がる魔物の死体を前に、気付いた。

困った。やりすぎた。

仕留めた真つ黒な彼らを見つめ、考える。

これは、さすがに自分一人では食べきれない。

もともと山で過ごしながら少しずつ、合計で三十体魔物を狩る予定だった。それが予想以上に行軍がはかどってしまったから、こんな凶作戦を使ったのだが……考えなしに一気に片付けたのは悪手だったようだ。

反省している中で、ふと思いつく。

どうせなら、お土産に持って行こうか、と。

荷物から縄を取り出して、彼らを団子にする事にした。

何せ数が多い。苦戦しながら何とか形にまとめた所で、ず、と地面が揺れた。

ん……地震？

見回したが、さんざん周囲の斜面の雪を吹き飛ばしたばかりだった。雪崩の危険はなさそうだ。

ほっとしながら振り向くと、ぱかんと口が開いた。

何だろう？

遠くに見える湖から、なぜかもうもつと白煙が上がっていた。

痛い。腹が痛い。

酷使に耐え兼ねて、崩壊の危機に瀕したと判断した腹筋が悲鳴を上げている。

しかしこの状況を目の前にしては、彼らを働かせずにはいられない。

要するに　カーレンは、腹を抱えて笑っていた。

「ごー！ の！ ド馬鹿！ 私たちを殺す気だった訳！？　ねえ！？」
「いだっ、がっ！　おい、カーレン、笑ってばかりいないで助け痛
つ！？」

「無、無理、だ……………つ、く、あは……………！　おまえ、私を笑
い殺す気か……………くはははははは！」

「がああこの役立たず！　ベル、仕方がなかったんだ！　事故だ、
事故！　不可抗りよいだだだだ　だから悪かったって言ってん

「だろ！」

「聞・こ・え・な・い・わ・よ！」

ぎりぎりぎりぎりとして更にエルニスを締め上げるのは、カーレンの幼馴染であり、エルニスの恋人でもあるドラゴン、ベリブンハントだった。

湖面が爆発した直後に対岸からすつ飛んできた彼女は、今は頭の高い場所でひとまとめにした銀髪を振り乱し、怒り心頭でエルニスの頭を抱え込んで関節を極めている。

岸边には打ち上げられた魚が元氣よく跳ねまわっており、それも相まって、更に二人の様子が滑稽なものとなっていた。

「大体、魚を取ろうとするだけで、どうして湖の表面をまんべんなく吹っ飛ばす羽目になる訳！？ 湖には水汲みに来てる子供たちもいるのよ！？」

「ベル、その辺にしておいてやれ。こいつの言う通り、不可抗力だった……まあ、不本意ながら、だろうがな」

ベルは疑わしそうな目をしながらも、エルニスを締める腕を緩めた。

「何よ？」

「範囲を限定して、炎の力で湖の水をひっくり返してもらおう予定だったんだがな」

言つて、カーレンは極めて原始的で物理的な原因を述べた。

「くしゃみだ」

意外な事故のきっかけに、ベルの顎がかくんと落ちた。

「……くしゃみ？」

ただでさえ赤くなっていたエルニスの耳が、更にかあっと染まる。しかし、もとからの赤さが痛みからだけでない事を知るのは、今

の所カーレンただ一人だけだろう。

いや、もう数人ほどいるか、と、ちらりと傍の岩陰を見て思う。

「ひゃっ」と慌てて引っ込む小さな頭が四つ。ベルに遅れてやってきた子供のドラゴンたちだ。

「見つかったわ……」

『どうしよう、怒るかな長さま』

『さあ……でもほら、エルニス兄ちゃんいろいろ幸せそうだし』

『ベルお姉ちゃんったら、気付いてないのかしら？』

『……挟まれてるな』

『挟んでるよな』

『ベル姉ちゃんのとってやっぱり柔らかいのかなー』

『さあ……』

隠れてこそこそしているつもりだろうが、残念ながら声がこちらまで聞こえてきている。

(……あんな年の癖に、随分ませてきたな)

さて、いつ気付くだろうかと思いつながら、さっさとカーレンは人数分の魚の処理に取りかかった。

指摘するのもまた一興だろうが、放置しておくのも面白そうだ。

「ほら、おまえたちも出てこい。一緒に食べよう」

火の準備をしながら言うと、躊躇いながらも、そろそろと岩陰からやってきた子供たちが、じっとカーレンを見つめてくる。

子供の一人が呟いた。

「長さまー、質問」

「何だ？」

「エルニスお兄ちゃんって幸せ？」

ちらりとエルニスとベルを見る。

「くしゃみ？」と顔を見合わせていた二人だったが、今はお互いに真っ赤になって慌てて離れるところだった。

どつやらもう気付いたようだ。

「まあ、役得なんじゃないのか？」

今からもう腹が一杯だ。

ぼそりと呟いた後半は、子供たちを笑わせはしたが、幸いにも彼らの耳には入らなかった。

副長エルニスの不本意な失敗で獲れた魚だったが、七人で食べた白身のそれは、旨かったとだけ言っておく。

団子にして運びやすくはなった魔物たちだったが、やはり重かった。

とはいえ、彼らが食べるなら、これぐらいまるっと腹の中に入れてしまうはずだ。

何せ、昔見た宴での食べっぷりはすごかった。きつとこの近辺の魔物が彼らの胃袋を支えているに違いないと思うほど。

それを言うなら、なぜ自分の知っているドラゴンたちは、普通に見た目から予想される通りの分量で食事ができるのだろうか。

……きつと、何かしているのだろう。ここしばらくの間に得た知識から当たりをつけると、たぶん体の中での処理を、大食いになるその時だけ活発にしているのだ。

昔は吐いても食べる人がいたというから、無駄にしないのなら羨ましい限りだと思う。自分は少し……いや、普通よりは多いだろうが、彼らから比べると、やはりいくら食物が旨くともほんの少しし

か食べられない。なので本当にそう思うのだ。

思いながら、えいつ、と、斜面の上で団子に乗せたそりを蹴る。

坂は楽だ。

多少モノが重くとも、そりに載せて滑らせるか、球体だから転がせば済む話なのだから。

しかし……団子と比べた自分の軽さを考えていなかったのはうっかりしていた。大抵の荷物は雪の上でも踏ん張れたので、いつもの癖で縄を持ったままだった。

持っていた縄に引っ張られて、ぽーんと、身体がすつとんで。

危ない、と思ったが、そのままそりが止まりそうになかったので、やけくそ気味に魔物団子の上に飛び乗った。

運は良かっただろう。

何せ、滑っていく先は、目的地の玄関口である岩棚である。

……途中がほぼ垂直降下のようになっているという、大変頂けない点を除けばの話だが。

果たして無事に、ウィルテナトに辿り着けるのだろうか。

爆走するその上で、ちょっと不安になった。

「……………」

そのドラゴンは、退屈だった。

岩棚の上からぼけっとウィルテナトの外を眺めているものの、相変わらず、今日も山の腹を撫でていくのは雲か風ばかりである。たまに転げ落ちる黒い点は、遠目には分かりにくい、ただのはぐれた魔物だろう。いつもの事だ。

最も、たまに真上から降ってくる事もあるので油断はできないのだが。

守り役だったドラゴンが長へと轉身したために、こちらに回ってきた役。しばらく当番制だったそれが、いつしか自分の担当になっている。

というものの、実に張り合いのない毎日で、今日もそうであるはずだった。

だが、そんな彼の耳は、妙な異音をとらえた。

かりかり、と、氷を削るような音がする。

「……………」

異常に気付いて振り返ると、それは初めは小さな音だったが、だんだん大きくなってくるようだ。ドラゴンは気付いた。

かりかりが、がりがり、しまいにはごりごりという音になっていく。

「！？」

そして 彼は目撃する。

魔物が絡み合った黒い塊が、見上げた先の斜面のはるか向こうから滑り落ちて来ていた。

「っ」

過去にも例を見ない珍現象に、一気に顔から血の気が引いた。

この時ドラゴンが取った行動は、極めて自然なものだった。

逃げるのではなく、攻撃するのではなく。

混乱と恐怖のあまり、必死で咆哮し。

こうして、ドラゴンの里の玄関口で起きた異常を知らせたのである。

ぼろり、と。

突如としてウィルテナト中に響いた大音声に、啞然としたベルの口から魚の身がこぼれおちた。地面に落ちる前に、すかさずエルニスがひよいと摘み取って、ぱくつと口に放り込む。

隣人の密かな悪事に構う余裕もなく、ベルはぼつりと言った。

「……何事？」

未だに続く仲間の咆哮に、咄嗟に立ち上がっていたカーレンは、瞬時に人型から漆黒のドラゴンへとその姿を変えていた。

ベルや子供たちが何を言う暇もなく、一瞬で湖の上を飛び越えて岩棚へと急行する。ひとつ遅れて、翡翠の体躯を走らせ、エルニスが後に続いた。

「何!？」

「見たい!」

「私も！」

「行こう！」

呆然としたままのベルを置いて、口々に叫び駆けだした子供たちは、次の瞬間、カーレンによって固化された湖畔の結界で、激しく顔を強打していた。

「……うう」「……」

そろって脳天からひっくり返った子供たちを見つめ、小さく呟いた。

「……あんたたち、馬鹿ね」

長ともあろうドラゴンが、不用意に守るべき群れの傍を離れるはずがないのである。

その点、随分とあの幼馴染も長らしくはなつたのだろう。

何はともあれ 自分は完全に出遅れた訳だ。

さて、とベルは立ち上がり、至極あっさりとは結界をすり抜けて、自らもワインレッドのドラゴンへと変化した。

『そんな大事にはなっていそもないんだけど……見物にでも行くかしらね』

子供らの恨みがましい視線は、見て見ぬふりである。

岩棚の上に一飛びでやってきたカーレンは、すぐに絶叫していた仲間の姿を発見した。

顎を一杯に落としている上、目は驚愕に引き剥かされている。混乱の最中にあると察して、彼が見ている方角へと目をやった。

そして、反応に困り、目を細めた。

……何だ？

「おい、何だあれは！？」

「知るか」

追いついたエルニスが背後から怒鳴るが、カーレンは首を振る代わりにそうばやいた。

理解不能だった。

なぜウィルテナト近辺に住んでいる魔物の群れが、わざわざ一塊になってこつちに突進してくる。しかも『転がる』のではなく『滑ってくる』形で。

来るものは仕方がないが、それにしても不可解だ。

どうするか、と軽く思考を巡らせた後に、カーレンは小さく溜息を吐いた。

腰に巻いた革紐に手を這わせると、三本の漆黒の太い棒を探し当て 肘から手の先ほどの長さのそれらを、軽く中に放り出した。

適当にその内の一本を掴み取ると、横に振る。空気を切る音と同時に、残りの二本が、ばらり、と無数の鱗へと変じた。

魔物の塊は、こちらにぶつかると残りの数秒程度、といったところか。

目測で大体の時間を区切り、鱗から変じた剣を構える。

「とりあえず……右に放るか」

ぼそりと呟きを漏らすと、エルニスが混乱したままのドラゴンの襟をさつと引つ掴んで、カーレンの左後方へと避難した。

視野の端でそれを確認してから、カーレンは頃合いを見計らって、

「待って！ 待ってお願い！ 今切るのは駄目ええええ！」

塊が少女染みた声で叫び、下から爆発を起こしてぽーんと空高く跳ね上がる。

確実に、怪現象としても許容できる範囲を超えた。

啞然とする前に、聞き覚えの有り過ぎる声に動揺して、カーレンは思わず剣を取り落としていた。

結局、魔物の塊はカーレンらの頭上を楽に飛び越えて、雪の上に重々しい轟音を立てて突っ込んだ。

そして。

見上げると。

「あ」

奇妙な既視感を覚えた。

何か、数年前にも似たような事を経験した覚えがあるのだが。それが記憶の中で蘇ると同時に、カーレンは無意識に腕を広げ、懐に強烈な体当たりを喰らい、派手に雪の中に埋もれた。

「おお。おーおー。大丈夫か？ カーレン」

「……何とか、な」

息が詰まる。喘ぐように返すと、ざくつと碎けた雪を踏み分けて、半眼のエルニスが覗きこんできた。

「全く、誰かと思ったら」

呆れた様子で吐かれた独り言。

その続きを引き継ぐ訳ではなかったが、溜息交じりに咳かすにはいられなかった。

「おまえか」

問われて、腕の中の人物が首を傾げた時、さらりとその黒髪が腕に落ちた。

見つめ返してくる丸い黒目には、人となりを表すかのような柔らかな光が宿り、最後に見た時にもまして澄み切った色が美しい。

背も容姿もずいぶん成長したらしく、顔立ちには以前のあどけなさが欠片ほどしか見受けられない。すっかり年頃の娘と呼んでいい外見に変貌していた。

それでも、自分が見間違えるはずがない。

五歳という幼少の頃から知っている。以降何かと見守ってきた彼女の面影が、しっかりとその中には残っていたのだから。

そんな少女、ティア・フレイスは、こちらの言葉にこもったものの多くを理解すると、あはは、と誤魔化し笑い声を上げていた。

「久しぶり！ カーレン！」

喉元に擦りつけられた頭のこそばゆさに目を細める。首を仰け反らせると、カーレンは鼻から嘆息した。

「……ああ……三年ぶりだな……ティア」

それに と、カーレンは離れた所の魔物の塊をちらりと見て、内心で付け加えた。

またいろいろな意味で、大物に成長してきたようでもある、と。

「もう十七か？ 背が大きくなったな、おまえ」

しかし、彼女は気持ち、不満そうにカーレンを眺めていた。

「……それしか言う事がないの？」

「……他に何か言える事があるのか？」

しばらくお互いにじつと顔を眺めていたが、ティアがかくんと肩を落とした。

エルニスが冷めた瞳でこちらを見た。

「諦める、ティア。そういう奴だ」

「……そういうドラゴンだったわよね、そういえば」

「こういつ自分に理解できない話の時は、無視するに限る。」

ティアごと上半身を起こして雪の上に手をつくすと、少女は文句を言いながらカーレンから離れて、魔物の塊へ向かって歩いていった。途中で立ち止まって、思いついたように、近くにひっくり返っていたそのの様子を調べ始めた。どうもあれで魔物を運んでいたらしい。「それで」、とカーレンは尋ねた。

「後ろのアレはおまえの仕業か？」

「ウィルテナトのみんなへのお土産なのよ。仕留めすぎて食材として余ったのもあるけど。団子にしたら、運んでくる途中でこんな事になっちゃったの」

改めて、魔物の塊　ティア曰く魔物団子を見やると、どうも先ほどの衝撃で縄が切れたらしい。ばらばらと山が崩れたような形になっていて、牛の形をした魔物の他に、ところどころからなぜか人型の黒い足が突き出しているのが見えた。

「ヘクスはいいが、ヒュロウまで一緒というのはまずいぞ。あれは肉が筋張っていてあまり美味くない」

「あら？　あ、本当。ヒュロウが混じってるわ……上級を三十匹仕留めろって言われていたのに」

振り向いてティアがぼやいた内容に、横にやってきたエルニスが眉を潜めた。

「仕留める？　誰から言われたんだ」

「父さんよ？」

「父さん？」

「ロヴェエの事。弟と旅の初めにそう呼ぼうって決めたら癖になっちゃって」

ティアが何でもなさそうにそう告げた。

彼女はそう言うがロヴェエはカーレンの実父だ。もちろんその正体は『ドラゴン』であり、間違っても『人間』ではない。

それがどうして父なぞと呼ぶ気になったのだろうか。

「……おまえ、カーレンの義妹か何かになるつもりか？」

「そんな気は全くなかったけれども……やっぱりそうなっちゃうのかしら？」

エルニスとティアの会話を前に、カーレンは思った。

その前に、まず人間の少女がヘクスを三十頭も仕留める事自体が異常だろう、と。

間違っても素人がぼんぼんと倒せる魔物ではない。

それを三年で可能にしたとは、一体ティアにどんな『教育』を施したのだか。今後ロヴェには一度会って問い詰める必要があるな、とカーレンは内心で呟いた。

さて、改めてティアの方を見ると。

「きゃああああっ！ ティアじゃない！？ やだ、久しぶり〜！

三年ぶりよね!？」

「ベル！」

「もう何この子！ 可愛いっ、可愛すぎる！ すっかり女の子になっちゃって、本当にティア・フレイスなの!？」

「ベルこそ。しばらく見ない間に綺麗になったんじゃない?」

「あははは！ 分かる?」

「分かる!」

……いつの間にかやって来ていたベリブンハントが、ティアを独り占めしていた。

「……あいつら何の会話をしてるんだ?」

「気にするな」

下界をぶらぶらしていた時に、ああいう女同士の再会のはしゃぎ様は星の数ほど見て来ている。

興味深いのは、百年経ってもどこでも同じような会話ばかりだった、という事だろうか。

カーレンは首を振りながら続けた。

「昔聞いた受け売りだが。あれに水を差すと百年恨まれるらしい」

「……そうか」

「ああ」

ドラゴンにしてみれば百年という単位はそれほどでもないが、人間ならばほぼ永遠と言って良い意味合いでもある。その辺りの話はエルニスも慣れてきたらしく、『放置するべき』と正しく意味を理解して、未だに自失状態のドラゴンを正気に戻しに行った。

一方で、残ったカーレンもまた手持無沙汰に感じたために、横の花が散る如き空間を無視して、魔物団子の処理に取りかかる。

今日はおそらく大宴会だろうな、と、ウィルテナトの習わしを思い返してぼんやり考えた。

とはいえ、少女の土産物の末路は圧巻の一言に尽きた。

一頭だけ混じっていた大熊の魔物を見て、クエンシードの女勢はぎらっと目を光らせた。その手に爪やら刃物やらが光るのを見て、男勢がたじろいだほどである。

ものの数分で大熊をただの肉塊へと変貌させ、更に切り刻んで食肉へと解体していく様はもはや神業。

残りのヘクスやらヒュロウやらは、普段魔物狩りに出ている連中が駆り出されて運び、女たちによってがりがりと使えるものとそうでないものに分別されていく。

しかし、腐っても相手は魔物である訳で、食べ難い部位である骨でも、薬となる部分はしっかりと回収されていた。

昔、育ての母が　まあ、その、かなりえげつない　言うにも困る代物を常用の傷薬に投入しているのを目撃してしまい、随分と

衝撃を受けたものだったが、今となつてはこちらも作る側である。そんな事をぼんやり考えるのは、カーレンもまた、今まさに大鍋の上で混ぜ棒を握っているからだつた。

「何で俺がこんな事やってるんだ？」

「言つな。仕方がないだろう、数が必要だつたのは事実だ」

隣でぼやいたエルニスに、反射のように返す。

材料は常に生で新鮮である事が求められる。

薬を作る手が足りない。そう言つて、大鍋を掻き回すのに現在の長と副長が駆り出されるといふ事態になつていたのだ。

湯気は立つ癖に煮えない深緑色の水面を眺めていると、鍋の外から覗き込んでいるティアがふーん、と呟いた。

「何だかそうしていると、噂に聞く呪い女まじなみたいね。毛皮のローブが似合つてるわ」

「あれも魔術師の類だろう……若干人に言えないようなものを扱つてるだけで」

カーレンは溜息をついた。混ぜ棒を鍋の端にひっかけると、ティアに指摘されたローブを彼女の頭から被せる。陽光に反射して、銀の毛がふわふわと品のある艶と輝きを見せた。

彼女が寒そうに見えたのもそうだが、台に乗つて、鍋の上で湯気を浴びるのはかなり辛いのである。ローブの下から現れたシャツをばたつかせても、ぼとぼとのそれに湿つた空気が入るだけで、カーレンは熱のこもつた息を吐く。

すっかり赤く火照つた顔から汗を拭いながら、エルニスが呻いた。「御袋の苦勞が分かる……息が詰まる。こんなの毎回やりたくねえな」

「昔教えられた時にも同じ事を言っていなかったか」

「そうだったか？」

言っている隣で、クエンシードの女が一人やってきて、無造作に

抱えていた籠からヒュロウの内臓をばんぼんと鍋に投げ込んだ。

目を丸くして様子を見守っていたティアは、わ、と声を上げる。

「すごい色……蒼になった」

「どうなったらこんな真つ蒼になるのか想像つかないだろ。血液に含まれてる成分が、もとから入っていた薬草に反応するんだよ」

笑いながら説明するエルニスに、ぼそつとカーレンは指摘を入れた。

「焦げ付くぞ、副長」

「おっと、俺とした事が。最後は中火だったか、長？」

「とろ火」

「了解」

軽く手を振ると、鍋の下で勢いよく燃えていた炎が下火になっていく。

「……炎に特化してるって、便利ね」

ティアが感心したように呟くが、エルニスは片眉を上げた。

「湯袋代わりに使われるこつちとしちゃ、堪ったもんじゃないぞ」

横の会話を聞いていたカーレンの頭に、この冬のエルニスの姿が思い起こされた。

身を屈めてティアに近づくと、こつそり囁いて教えた。

『実は、子供らに暖を取られてしょつちゆう埋もれていた。……笑つていいぞ?』

思わずといった様子で、少女はぷっくり膨れた頬と口元をローブで覆い隠した。

「カーレン、エルニス。薬ができたら向こうで肉食べるわよ! もう焼いてるって! ティアも見えてないで早くこつち来なさいよ!」

ベルの声が飛んできた。

「別に肉はたくさんあるし逃げんだろ」

ぼそつと呟いたエルニスの声がどうやって耳に入ったのか、離れ

た所で叫んでいたベルが眉を潜めてやってきた。

「何言ってるのよ？ 酒がなくなっちゃうじゃない」

「おまえ、この前酔い潰れて俺が介抱する羽目になったの忘れてないか……？」

エルニスとのやり取りに、ティアが苦笑した。

「相変わらず、ベルって……」

「大酒呑みだな」

「樽二つ開けられるあんたに言われたくないわよ」

「え！？」

「……三つだ」

ぎよつと目を瞪るティアの前で、懨然とした面持ちでカーレンは訂正を入れた。

「肉は七つぐらい確保しておいてくれ。食べる」

「エルニスは？」

「俺も七つ」

「……私、一つ食べられるかどうかも怪しいんだけど」

一抱えほどもある肉の塊を指差して、ティアが小さく主張した。

「何気の小さい事言ってるのよ！？ 三つは食べなさい！ 出ると

こ出ないわよ！？」

「無茶言わないでよ！？」

騒ぎ出した女二人の横で、エルニスがじつと自分の恋人を見ている事に気付き、カーレンはその視線の先を追う。

腰……か、胸元か。毛皮のコートに隠れて見えないが、きっと、ベルの服のその下は、などと考えているのではないだろうか。

あっさり邪推すれすれの見当をつけて、カーレンはふつと目を伏せる。

初めて自分の上に落ちてきた時のティアの細さと、今回二度目
いや、三度目か　の時の腰つきの感覚を比べてみて、気付いた。
痩せ細った細さではない。しっかりと肉というものが付いて、そ
の上で女らしく締まった感じだ。

どちらにしても、あの子も随分と育ったのだな、と　娘の成長
を知った親のような、妙に複雑な気分になった。

少し目を離している隙に、エルニスが止める間もなくベルが早速
酒に走り、ティアまで巻き込まれそうだという事に気付いたのは、
それからしばらく後の事である。

「あっはははははははははは！」

ジョツキを空高く掲げて高笑いするベルの声を聞きながら　カ
ーレンは少し、頭を抱えていた。

「……悪い。この間久しぶりに町に降りた時、いくつか相当きつい
酒を仕入れた覚えがある」
「いい。どうせ酒が良からうが悪からうがああなるのは時間の問題
だからな」

ベルがいつ倒れるかとエルニスがそわそわするのを横から眺めつ
つ、カーレンは横で擦りついてくるティアを呆れた目で見やった。
「こちらもどうも間に合わなかったな」

ふぬう、と訳の分からない唸り声を漏らしてもたれてくる少女に、
思わず溜息が零れる。

「酒に弱かったか、おまえ？ 前に宴に参加した時は普通に乳割り
を飲んでいただろうが」

「おい、よく見るカーレン」

横からエルニスが指摘を入れた。

「ティアが飲んだその酒、おまえでも樽一つ半が限界の種類だ」

「ああ……『魂入り』の」

ベルも、よくもそんなものをただの人間である彼女に飲ませたも
のだ。

「ほら、もう飲むな、ティア」

「ん、でもせつかくもらったしい……」

「いいからこつちに寄越せ。残りは飲んでやる」

ぐだるティアの口を適当に黙らせ、半分に減った杯を力の入らな
い手から抜き取った。そのまま一気に煽って中を空ける。

しばらく半目で様子を眺めていたエルニスが、言った。

「おまえ、もう親だろ？」

「この子の故郷でもよく言われた。別に世話焼きではないし、ティ
アもしっかりしているはずなんだが……妙な所で昔から手がかかる
だが……丁度いい事もあるものだ。」

「言いながらちゃっかりひざ掛け代わりにするなよ、おまえも」

「もう子供の体温ではないのが残念だが、それなりに温かいからな」
膝の上にぐでつと半分潰れたティアの身体を預けさせておいて、
カーレンは脇に置いていた肉をかじる。

周囲からの疑わし気な視線についてはこの際無視を決め込んでい
た。

カーレン・クエンシードが一時期は育てた子であり、何かと目を
かけてきた『寵姫』である。傍に侍らして何が悪い、と開き直って
いるのもあったが。

一族の連中の真ん中で騒いでいたベルの声が、ここにきて急に大
きくなった。

何やら口上を述べているらしい。

ぼんやり聞いていると、どうもティアが話題に上っている。歓迎の音頭を取るとかどうとか　　そうこう言っている内に、ベルは酒を威勢よく撒き散らしながら、杯を再び空へ突き上げた。

「でーわっ、三年ぶりにやってきたあーティアにいーっ!？」

完全に出来上がっているな、とカーレンは苦笑し、ティアの頭上で同じように杯を掲げた。

とはいえ、もう既に杯は乾いているのだが。

『お帰り！　久しぶり!』

『乾杯!』

がっぱん、と豪快に杯と杯がぶつかり合い、そこら中にきつい果実と酒精の香りが充満する。

「語呂良し!」「それもまた良し!」「とどこかから合いの手が入り、喧しくて仕方がない。

「ついでにいー!？」

『早くくっつけ!　自覚しろ!』

『特に副長とおまえ!』

「ってちよつとお!？　私とエルニスじゃなくてえー　　ってティア、笑わないの!」

膝の上でへらへらと笑っていた少女は、慌ててカーレンのローブをひっぱり上げて口元を隠す。

さつきから一度も上着を返してもらっていない。酒で体を温めなければ寒くて仕方がないのだが、仕様がないと許していた。引っぺがすのはもちろん、一緒に包まるような気も起きない。

「もっいつちよ！」

ベルが泡を食っている間に、別のドラゴンが中心に躍り出る。

待っていましたとばかりに、全員がニヤリと笑ってカーレンを見た。

さすがに何やら予感を覚えて、カーレンは白い目で一同を見やる。

『長！ 早く女！ 先越されるぞ！』

「余計なお世話だ……」

嫌な予感に、咄嗟にティアの耳に手を被せて蓋をした。

『むしろいつその事、そこをまるっと！』

それは少し斬新すぎる。

「……、」

「下世話過ぎるだろ、おまえら」

何も言えなくなったカーレンの横で、エルニスが呆けたように呟いた。

「焼き入れるか？」

「いや……」

言いたい事は多々あるが。

ただ、耳は塞いでおいて正解だったようだ。

「……え、今の何ー？」

ティアの声で、何とか気を取り直した。

杯を置いた右手が何となく手持ち無沙汰だ。いくらか手を彷徨させた後、隣の皿に積んである果実の酢漬けを摘み上げながら、

「仕様もない言葉を聞いて、耳が腐るといけないからな」

何より精神的にもよろしくはない。

だが、これが気に入らなかつた周囲から大不興の嵐が起こつた。

……とはいえ、さすがに、次の一言には物申したのではあるが。

『このむつつりが！』

「くたばれ馬鹿共」

びしつと弾いた果実の酢漬けが見事に音頭を取つたドラゴンの額に命中し、彼は昏倒する。

途端、周囲がどつと爆笑に沸いた。

無礼講にも程がある。

ティアも本格的に酔いが回り始めたようだったため、ロープで改めて少女をぐるぐると巻いて抱え上げ、立ち上がった。

「そついや今日のティアの寝場所、どうするんだよ？」

エルニスに言われて、やや考えた。

何だかんだで、肉を解体したその場で宴に移行してしまった。正面玄関の岩棚から多少は奥に入った所だが、客人用の館よりは屋敷の方が近い上、辺りは既にかなり暗い。カーレンが直接運ばなければ、まともに立てないティアが転んで雪まみれになる事は目に見えている。

「館に行くまでに冷えるだろう。このまま屋敷まで連れて行く」

言つと、またしても別の意味で周囲が沸き立った。

疲れた様子でエルニスがばちんと指を鳴らすと、軽い爆発音があ

ちこちで起こった。全く危機感のない悲鳴が上がるが、中には本当に吹っ飛ばされた者すらいたようだ。

気を回してくれた幼馴染に感謝を覚えつつも、カーレンは尋ねた。「それより良いのか？」

「何が？」

顎で示してやると、エルニスはカーレンの視線の先を追って、げつと顔をしかめた。

「酔い潰れてる」

「あああ、だから飲み過ぎなんて日頃から……！」

女たちが介抱しているベルと、彼女を回収に向かう副長の後姿は、今日も何やら滲むものがある。

「もう契ったらどうなんだ？」

苦笑染みた吐息を漏らして、天地もひっくり返るような馬鹿騒ぎの中からカーレンは抜け出した。

主役がいなくなっても、あとは適当に盛り上がるだろう。
ティアア

宴の場とは打って変わって、屋敷はひっそりと静まり返っていた。酔い潰れたティアアもいくらか寒さで酔いがさめてきたのか、カーレンの腕の中でおとなしくしている。

いっそ不必要なほど巨大なドアを片手で押し開くと、蝶番が耳障りな音を立てて軋んだ。僅かに隙間を作る程度に開いた所で、静かに間へと身を滑り込ませた。

そのまま、暗い中で夜目を利かせて、廊下を進む。

養い親である夫婦は、現在は屋敷にはいない。養父が長の座をカーレンに譲ったのを良い事に、妻を連れ回して世界旅行へ出かけて

いた。ティアの来訪は全く予期していなかったため、館も使わなかった今、二人が居ない寝室が使えるのは幸運だっただろう。

「……寒いか」

問いかけると、んー、と、返事ともつかぬ声が聞こえた。

「寒くない　けど、くらくらする」

「あんなきつい酒を呷るからだ……今度からは、ベルに勧められた酒は金輪際飲むな。おまえはただの人間だから、下手をすれば死ぬぞ」

「そんなに言わなくなったって」

本当に分かっているのだろうか。

くすくすと笑った少女を覗き込むと、漆黒の目がカーレンを見上げた。

「なあに？　まだ、私が居ないと不安？」

「……………単に傍に居ないと、生きて存在しないとはまた別だ」

「意地張っちゃって」

「何を」

「お酒。ベルが飲めるのは樽二つって言ったのに、あなた、昼間三つって言ったわ」

「……………」

虚を突かれた気がして、思わず立ち止まった。

「大丈夫？」

ティアは静かに言う。

酒精に浮かされているとは思えないほどに冷静な声に聞こえた。

「……あの時の事を夢に見る」

辛うじて、そう返した。

心臓を貫いた傷の跡が、ひどく疼いて、ざわついた。

今でも思い出せる。左胸に冷たい鋼の刃が沈み込んだ、生々しい感触がまだ残っている気がする。

「世界が暗くて、寒くて、怖いから、必死に手を伸ばして、走る」
ちらりと、そうして目の前に白い花卉が舞う。

「最後にはいつも目の前におまえの手が差し出されて 名前を呼ぶと救われて、そうして夢は終わる。何度も何度も、その瞬間だけを繰り返し夢に見た」

そして、いつしか気付いた。

「ティア。私はあの時一度死んだ。おまえが『願い』を手繰り、叶える、霸王ドラゴンの特別な力を手にしていたから……たくさんの意志のおかげで、こうしてここでまた生きている」
だが。

「あの死の瞬間から、この世界の境界を一つ踏み越えてしまったよ
うな気がずつとしている。それだけが三年前から気がかりだった」
そこまで告げると、カーレンは溜息をつき、それから苦笑った。
歩き出して少し置いてから、言う。

「おまえには、昔以上に隠し事ができなくなったな」

「あなたのお父さん（ロヴェ）に鍛えられたのよ」

あっさり実父の名を出して種明かしをした少女は、小さく舌を出しておどけてみせた。

「実ははったりだったって言ったら怒る？」

「さあ」

言いながら、全く怒る気はカーレンにはなかった。どこから鎌掛けが始まっていたのか、問い詰める事もない。

やがて、両親の寝室に入った。火を飛ばして灯りをとすと、カーレンは二人寝の広いベッドの上に、自分の寵姫を注意して横たえた。

「服が皺になるかもしれないが、今日はもうこのまま寝る。明日、少し見繕ってみる」

包んでいたローブを直してやっていると、ぱちりと酒精で潤んだ少女の黒目が瞬く。

「今日はここで寝ないと駄目？」

何を言い出すのかとカーレンは呆れた。

「おまえ、ここでなかったらどこで寝る気だ」

「それはそうなんだけど」

全く、とカーレンはティアの前髪を掻き回す。

「いつまでも世話が焼ける子だな」

ティアは「子……？」と絶句したようだった。

「……私、もう十七なんだけど」

「あいにく、酔い潰れた拳句に他人に寝室まで運ばせる十七歳しか知らない」

「昔以上に意地悪になったわね、カーレン」

「あのひねくれた実父ロウキの子供だからな」

適当に答えて、カーレンはティアの頭まで毛布を引き被せた。

「子供はさつさと寝る。朝には二日酔いの薬ぐらいは持ってきてやる」

少女が頬を膨らませたのか、それとも大人しく目を瞑ったのかは分からない。

だが、おやすみ、という言葉だけは、部屋を出ようとしたカーレンの耳に届いた。

「……………」
そつと、ティアは被せられた毛布の中で目を開けた。

……………眠れない。

結局上掛け代わりとなったローブからは、毛皮特有の獣臭さはおろか、嫌というほど浴びたはずの薬草臭さすらない。

代わりにほんのりと漂ってくるのは、香りだった。

（甘ったるいマールチェキ……………あと、何だろ……………）

最初にぞくつとくるほど甘い香り。その後で鼻を突きぬける、香辛料のような爽やかさと、清涼な残り香がそつと忍んでくる。

（カーレンらしいと言えば、らしい香りなんだけど……………）

何だろう。香りを身に纏う習慣は、昔の彼にはなかったはずなのだが。

首を傾げながら、毛布の中から這い出した。

肩の辺りを探って、すっかり体温に馴染んでいた金属の感触を探し当てる。細い鎖だった。

引っ張り出していくと、服の中から小さなロケットが這い出して来た。

「……………父さん（ロヴェ）って、本当に、カーレンに悪戯して何が面白いのかしら」

にやにやと笑ってロケットを差し出してきた顔を思い浮かべながら、かちかちと隠された仕掛けを弄ると、中からころりと白い丸薬が出て来た。仄かにもった灯りでてろりと輝くそれは、妙に見た目が妖しい。

（『中級の……………そうだな、ヘクス辺りを三十匹。あとはそのロケットの中身で適当にあいつに悪戯してこい。それで試験終了』）

頭の中で彼の言葉を繰り返して、ティアはじつと丸薬を見つめ。
「効果は知らないけど……まあ、毒ではないわよね」

唇を開いて、そのまま飲み下した。

五秒ほど経ってから、ふと、異変に気付く。

「…………え」

飲み込んだ瞬間、ふわっと解けた丸薬の殻。

一気に全身に行き渡ったのは、間違いなく　ロヴェ・ラリアンの魔力だった。

やられたと気付くのに数十秒もかからなかっただろう。同時に、悪戯の手段の見当もついた。

「……………とうさん」

頭を抱える。喉から漏れたのは高い声。実の息子への悪戯に、どれだけ手の込んだ方法を思いつくのだ、あの父親。

「どうしろっていうのよう！」

あ、舌つたららずになった。

眩しい。

頭がぱっくり二つに裂かれたようだ。

散々飲み明かした翌朝は、いつも地獄の時間とばかりに、のたうつ事も出来ずにどんよりとしているしかない。

そんな愚痴をいつも零すので、彼女　ベリブンハントがどんな状態にあるかというのは、あっさりエルニスにも把握できた。

ところで、エルニスには帰るための家とは別に、副長としての部屋が長の屋敷にもある。普段カーレンと連携してウィルテナトやその周辺の里を回しているので、一応生活空間として寝起きもできる上、軽く食事を摂る事も可能な場所が必要だったのだ。

今の時期はまた大陸各地の里とウィルテナトが定期連絡を取り合う頃なので、そのために使いのドラゴンらが北大陸中の空を飛び回る。彼らの歓待や対談も 一部こそ周りからの補佐があるものも長であるカーレンが主導していくために、エルニスもこの部屋によく寝泊りをして彼を支えていた。

近頃になって大分やってくるドラゴンたちの数も落ち着いて来ていたのだが そこに、ティアの突然の来訪という滅多にない嬉しい驚きがあったのである。

大騒ぎとなった宴会からようやくベルを運び出して、住み慣れた部屋の方が勝手が良いという理由でカーレンとティアの後を追うように屋敷に戻ってきたのは、夜も大分更けた頃だった気がする。

……そこから、訳あってエルニスは一睡もしていない。

ちょうど夜明けの頃合いのようで、部屋の奥深くまで朝日が燦々と差し込んでくる。

ああ、明けたな、と回転の鈍い頭で考え。

ベッド脇に腰かけたまま、膝で頬肘をついて、エルニスはぬかるみにはまったような心地でずぶずぶと微睡みの中に沈んでいた。

そのまま眠りにいきたくとも、頭の中の鈍痛が邪魔をする。

カーレンほどではないが、エルニスもまた酒は普通よりも飲めると自負していた。しかしながら、カーレンの言葉通り、相当に酒精の強いものばかりが昨日は振舞われていたようだ。自分も二日酔いになったのかもしれない。

眠気と頭痛との狭間で呻いていると、ベッドの上でもっこり盛り上がる毛布の塊が、突然もぞもぞと動き出した。

「……………んっ」

やがて、両脇から頭部を抱え込んだ格好で、情けない顔のベルが顔を出す。

いつもなら指通りの良い銀の髪はぼさぼさ。顔も蒼白くひどい色をしているし、眉間にはくつきりと皺ができています。

更に横目で見下ろして、発見した。

(……あ、目の下に隈ができてら)

瞼を開けば、魔物顔負けの充血具合が見られそう。それこそ幼い子供なら泣き出しそうな顔を想像し、恋人だが、いや、恋人であるからこそ、エルニスは思ってしまう。

女にあるまじきほどの醜態だと。

放っておいたらその内吐くかもしれない。

ベッド脇に腰かけたまま、ベルの頭に響かぬようにそっと溜息をついた。

「……俺も何でこんなのに惚れたんだろーな」

そつと髪を撫でつけてやると、更にぎゅうつと眉根が寄る。

「は……っ痛」

思わず笑うと頭痛がひどくなった。少しじつとしてみると痛みは去ったが、だからといって二人してベッドで唸っている訳にはいかない。

傍の小さな机に置いた眼帯を取り上げると、それで右目の周りを覆い隠す。深い傷跡が右目の上を走っていたので、それを隠す意味合いがあった。

「二日酔い……っっていうと」

立ち上がって、部屋の反対側までふらふらと歩いていく。

箱型の食材入れの天蓋を開けると、エルニスは頭を抱えながら覗き込んだ。

「ミルだっけか？」

中央大陸の中部や、気候の穏やかな西大陸で育つという豆だ。

煎ってから細かく砕いて作った煮汁は、苦みと渋みと香ばしい香りのする飲料となる。

先日、北大陸の最西端からやってきたドラゴンが、土産物だと思っ
てきてくれたものだった。

煎るとくれば、エルニスお得意の炎であるが。

「……便利、ねえ」

ティアに言われた言葉を思いだしながら、窮地に陥る恋人の誇り
の最後の砦を守るべく、エルニスは香ばしくなったミルク豆を台の上
で叩き潰していた。

まあ、二日酔いの看病には、詫びという意味も入ってはいる
のだが。

そこで、昨夜ティアの代わりに、強烈な『魂入り』を飲み干した
長の顔が思い浮かんだ。

「あ。カーレンの奴、大丈夫か？」

もしも彼まで二日酔いだとしたら、ミルクの乳割りを持って行って
やった方が良いのかもしれない。

ばたん、と。

無言でエルニスは、一度は開けたカーレンの部屋のドアを閉めた。

今、自分は何を見たのだろうか。

首を傾げてしばらく悩んだ。手にはベルに作ってやったのと同じ
ミルクの乳割りが入ったカップがある。冷めると不味いだろうと思っ
たものの、再び開けて確認する勇気が出ない。

……とはいえ、部屋に残してきたベルの様子も気になる。

「……………よし」

小さく呟いて、再びエルニスは思い切ってドアを開けた。

「……………何だ。おまえ、ドアをそんなに開け閉めして、何がしたいんだ？」

カーレンが部屋の中で振り向いて言った。少し前に起き出し、たようで、洗い晒しのシャツと黒のズボンという実に気の抜けた格好でソファに座っている。

それ自体は特に問題はない、とエルニスは確認した。

問題にするべきは、彼が手に握っているヘクスの毛のブラシと、それによって気持ちよさそうに髪を梳かれ、カーレンの足の間で床に座り込んだ

「おまえ、その幼女をどっから拾ってきた」

どう見ても五歳を過ぎたばかりの、裸体にシートであつらえたドレス一枚の、小さな女児の姿がそこにあつた。

昨日の朝に入水自殺未遂をしたと思つたら、今朝は幼児誘拐か。何に目覚めた。いや、ついに何かに目覚めてしまったのか。くらくらと眩暈のする想いながら、エルニスの口は毒を生産していた。「不穏な噂のネタだけは尽きない奴だなおまえ。減らす努力をしたらどうだ」

「どんな妄想をしている。よく見る」

「ああ？」

顎で幼女を示したカーレンに眉を寄せつつも、エルニスは彼女を観察し　かくんと顎を落とした。

つややかな黒髪。くりくりとした大きな目。将来育った姿を見る

のを楽しみに思わせるような、一見でも愛らしい外見。

しかし、どこか知っているような いや、そのまま知り合いを小さくしたらこんな感じだろうか。

「ティア!？」

「うん、そう」

目を剥いて叫ぶと、幼女 小さなティアは頷いた。

「どういう事だ？」

「ロヴェエの……実父のせいだ」

カーレンが苦々しげに言った。

彼が言うには、こうだ。

ティアは三年ほど前から、カーレンの父親のロヴェエと共に旅をしていたはずだった。ところが、半年ほど前、彼女は彼に離れて旅を試してみたい、と冗談交じりに言ったらしい。

とある理由で面倒を見る事になっていた娘に対し、二年半に渡って行った身の守り方などの扱きは、もうあらかた終わっていた。それもあつてか、ロヴェエはそろそろ、寵姫であるティアとカーレンを会わせてやろうと考えていたようで、今回試験的にティアをウィルテナトに行かせる事を思いついたという。

ウィルテナトのあるクラスア山地は、中級（ロヴェエ自身にとってはその程度）の魔物や、たまに厄介な上級の魔物が現れる上、過酷な雪山という環境。

しかし、自分が扱いたのだから、間違っても死ぬはずがないという判断の下、ロヴェエは半月前にティアをクラスア山地の麓にぼんと置いて行った（ここでカーレンは蒼褪めたという）。

一応試験だからという事で、中級の魔物を少なくとも三十匹、ウィルテナトに行くまでに仕留めるようにとロヴェエは言い置いた。できなくても構わないが、その場合は更に一年ほど扱くと宣言されていたようだ。

昨日の事件からも分かる通り、ティアはその条件を難なく達成して、ウィルテナトにやってきている。

問題はここから。実はロヴェはおまけのように、試験の達成条件をもう一つ付け足していた。とはいえ完全にこれは彼個人が面白がってやった事のように、もしもできたらちよつとしたご褒美があるぐらいだとティアは証言する。

それが カーレンへの、悪戯であった。

ロケットの中の丸薬を飲んで、カーレンのベッドに潜り込む、だけ。

年頃の人間の娘にしてはずいぶんと問題行動だとは思ったようだが、丸薬の効果はまさかの身体の幼児化。着ていた服はぶかぶかで身に付けたら転んだらしい。

自棄になったティアは、深夜、（身体が少女だったからか、何かを振り切って）シーツ一枚を裸の体に巻きつけて、こっそりとカーレンの部屋侵入を決行した。

翌朝、ベッドの中で自分が妙に温かいものを抱えて目覚めた事に気付いたカーレンは、じつと腕の中から自分を見上げてくる、どこか懐かしい面影のある少女の存在 いや、少女を自分がベッドの中で抱き締めて寝ていたという状況を、なかなか受け入れられずにいた。

そうして目覚めて早々大混乱の中に突き落とされたカーレンへと、ティア扮する謎の少女は、止めの一言を放ったのである。

即ち、

「ばば？」

悪戯完遂。

ひくつとエルニスは頬を引きつらせた。あの愉快犯。

寵姫のあまりに性質が悪すぎる衝撃発言に、思考も身体も固まったカーレンは、しばらく立ち直れなくなっていたという。

ベッドの隅で片膝を抱え、ひたすら誰の娘なのか考えこむ姿があまりにも哀れで、見かねて種明かしをした後、いくらか回復したカーレンに身支度をさせられ、今に至るのだとか。

「……ロヴェエには、今後たつぷりと驚かせてくれた礼をする必要がありそうだ」

無表情で、ティアの髪を丁寧に梳きつつ静かに言ったカーレンの背に、エルニスは本気で薄ら寒いものを感じ取った。

「……ところで、いつになったら戻るんだ？」

寝不足からくるあくびを噛み殺しながら聞くと、ティアは一言で返した。

「ひとばん」

ブラシを握るカーレンの手が止まる。

「せいかくには、」

ティアが舌つ足らずながら、首を傾げて呟いた。

「ひがのぼってちょっとくらい？ だから、はやくへやまでもどらないと……」

カーレンはゆっくりと、エルニスに表情無く顔を向け、小さく途方に暮れたように眉を下げた。

衝撃から立ち直ったばかりで、頭が回らないらしい。エルニスはこめかみから髪を一気に後ろへ掻き上げた。

苛々と言った。

「服のあるところに連れて行け。即だ」

言葉通り、小さなティアを抱えて、カーレンが彼女に貸した両親の寝室へ走って行ったのは言うまでもなかった。

「ああ、エルニス」

と、部屋から出て行ったはずのカーレンが、ひょっこりとドアから顔を出した。

「……何だよ。行かないのか？」

「それはそうだが、おまえ、昨日徹夜しただろう」

カーレンは言いながら、僅かに眉を潜めた。

「酔いに任せるのは良いが、あまりベリブンハントに無理をさせるな。二日酔いどころじゃなくなるぞ」

……寝不足の理由は御見通しだったようだ。

エルニスは肩を竦め、「気を付ける」といい加減に手を振った。

ちらりと見えた幼いティアの顔は、会話の意味を悟ってか、子供の容姿には不釣り合いなほどに真っ赤になっていた。

「エルニスとベルって、いつから？」

すっかり十七歳の大きさへ戻ったティアは、屋敷の小さな食堂でカーレンと共に朝食を摂った後、そんな質問をした。

何が、とは言わない。もともと食事の後で聞く事すら躊躇われるような内容だったが、聞かずに居れなかった。

「私が長として里に引つ込んでから一年ぐらい経った頃じゃないのか？ 時期的には、それぐらいだと思うが。それから度々……たぶん、もう両手の数では足りないだろう」

答えながら、カーレンはティアへ、エルニスが作ってきたのと同じミルの乳割りを勧めてきた。

ロヴェエの丸薬が何をどう作用させたのかは知らないが、予想された二日酔いの憂き目には、どうやら合わずに済んだようである。しかし、ものには念を入れて、であった。

「……どうして自分の恋愛沙汰以外にはそんなに鋭いの？」

声が低くなると、カーレンは虚を突かれたようにカップを勧める手を止める。

「……やはり鈍いのか？」

「え？」

「ん？」

「……何でもないわ」

『………一時期、貴方にも呆れるほど鋭い時期があったと記憶していますか？』

二人以外誰も居ない食堂に、そんな声が響いた。

ティアは、その声に聞き覚えがあった。

すると、食卓の高めの椅子に上ってきたのは、真っ黒な体躯の小さな狼だった。爽やかな青の目が、親しげにティアの方を見て瞬く。

『お久しぶりですね、ティアさん？』

「ルティス！」

思わず彼を食卓から拾い上げて抱きしめると、カーレンが呆れたような視線を狼 自分の使い魔に投げた。

「おまえ、昨日の宴ではどこに行っていた？」

『久しぶりに空が綺麗だったので、星見をしていたんですよ』

長い尻尾を振りながら、ルティスは答えた。

『別に使い魔が四六時中、主人の傍に居なくてはならない決まりもないでしょう？』

切り返してから、彼は意味深気にティアとカーレンを交互に見た。『そういえば、妙な星の動き方でしたよ。何かが通る場所でも空けるように、星が遠のいていくんです』

規則的に揺れていた尻尾が、ぴたりと止まってぴんと張りつめる。すつと顎を上げて、狼は自分の推測を告げた。

『おそらく、凶星　『蒼い矢』の出現の予兆でしょうね。三百年ほど前にも似たような事がありましたから』

「凶星？」

「人間の間に凶兆と忌まれている星をそう呼ぶだろう。彗星、ほうき星とも言うが　数十年から数百年の周期で、光の尾を引いて現れる巨大な星の事だ」

カーレンが自分のミルの黒い水面を眺めながらティアに言った。

「ふうん……」

「ただ、蒼い矢に限っては少し勝手が違う。あれは、ある存在がこの世界にやってきている間中、夜空に輝き続けるからな」

「ある存在？　カーレンは知ってるの？」

「昔、ロヴェエと一緒にいた頃に会った事がある」

『ああ、その事は私も覚えていますよ』

頷くと、ミルを口に含み、カーレンは遠くを眺めるように目を細めた。

「獣の体の中に、空の世界を抱える　異世界エマルフィアの民、

『ミリアシエ』だ。彼らはヴァンリールと呼ばれる一族を、こちらで言う王たる存在に据えている。こちらの世界の事をアウルフィアと呼び、人に似た姿を取る事もできる……獣としての特徴が、耳や手首、足首の周りに残ってしまうがな」

ぼかんとティアは呆けていた。

「……まあ、突然言われても理解できかねる話だろうが。事実出会

つたのだから、そうとしか言いようがない。　　ロヴェエは私と一緒に
だった時も数えると、三度はヴァンリールの一族に出会った事がある
そうさ。大体三百年ごとで、今回も出会えるとしたら四度目だな」
「って事は、三百年に一度、ヴァンリールたちはこの世界にやって
くるの？」

カーレンは頷いた。

だが、彼らは一体何のために、そんなに定期的にやってくる必要
があるのだろうか。

ティアの手からルティスを取り上げると、カーレンは黒狼を膝の
上で遊ばせながら続けた。

「彼らは、王の世代交代を行うために試験を受けるそうさ。ちょう
どロヴェエがおまえに試験を課したように、ヴァンリールら王族は『
ミリアシエ』の民を導くため、試験を受ける資格を得るべくこちら
にやってくる」

つまり、とカーレンは言う。

「世継ぎが無ければ話にならないからな。番を得^{つがい}に、こちらの世界
に現れるんだそうさ。私とロヴェエが出会った時は、そのヴァンリー
ルは既に番を得て、エマルフィアへと帰還する旅の途中だった。二
人で見送ったんだ。……そういえば、ロヴェエに将来生まれる子供の
名前を考えてくれと冗談交じりに頼んでいたか」

ティアは目を瞬く。

「え……じゃあ、その生まれた子が、今度はこの世界に？」

「まあ、おそらくそうだろうな」

カーレンは言って、首を傾げる。

「こちらの星の呼び名に因んだ名前だ。男ならルメリク・アルナ。
女ならアストラ・シンシアフと名付けているはずだが」

「へえ……」

全く知らなかった。

「私、まだあの『お父様』に聞いてない事がたくさんあるみたいね」
「とはいえ、千二百年分の知識と経験だ。あれほど長く生きている

ドラゴンは多くない。一度に吸収できたものではないだろう」
カーレンが言った時、こつん、と音が聞こえた。

二人とルティスの一匹とで音の方向を見やると、窓から一羽の鷲が顔を覗かせていた。

ティアが近寄って窓を開けると、部屋に飛び込んできた鷲がカーレンの前に降り立った。

「……これは」

何かに気付いたのか、呟いてカーレンが鷲の首に手を伸ばす。

と、唐突にその手に古い封筒が出現した。

「……何？　今、何もない所から手紙が出たみたいと思ったけれど」

「魔術具だな。魔力を込めると、ここの球に対応して、ある程度までの大きさのものを中に『溜められる』仕組みだったはずだ」

鷲の首に括りつけられた球を示して、カーレンが言った。

彼は紅い目を怪訝気に細めて、封筒をひっくり返す。

「しかし、手紙が来る心当たりがないぞ　と、これは蠟封か？」

「蠟封？」

そんなものを封印に使うという事は、ただの手紙ではなさそうだ。その割には、紋は何も押されていない。それに……」

カーレンは封を開けずに、手紙をそのままティアの方に差し出した。

「ますます妙な事だが、」

きょとんとしているティアに、カーレンは告げる。

「おまえ宛てだ」

「……私？」

ルティスがカーレンの膝の上からテーブルに駆け上って、ティアの前までやってくる。

『まるで計ったように来たのも怪しいですね。ティアさんがこのウィルテナトに来ると知っている第三者が、果たして世界にどれだけいると思いますか、マスター？』

「さあ……少なくとも、ティアにこんな手紙を出す人間がいる覚えはないな」

カーレンの言葉にはティアも同意した。

第一、カーレンは別としても、今の自分には、ロヴェと、一緒に育った義弟以外には身寄りがないのである。

「ロヴェの新手の悪戯かしら？」

「そんな訳はないだろう。彼ならもつと変わった方法を使ってくる」

『……楽しければ、何でも良いようですからね』

いずれにしても、気味が悪い事は確かだった。

謎の手紙の処遇に困っている所に、食堂の出入り口の方から物音がした。

ベルだった。

見事に二日酔いに見舞われた頭を重そうに抱えてはいるが、顔色は良い。エルニスがティアたちと別れた後で、彼女の世話の続きでもしたのだろう。

「カーレン……何か、中央から手紙が来てるわよ……」

「……え、カーレンにも？」

大雑把な手つきで彼に投げられたのは、純白の封筒。それを見て、どこからのものか、カーレンは一目で悟ったようだった。

「マールウェイか」

「何で分かるの？」

「色だ。里の間で公式な遣り取りをする時は、大抵その里を象徴する色に封筒を染める」

封を無視して横の口を破り、カーレンは中の手紙を取り出した。

無言で読んでいく内に、眉が潜められる。

「……アークセンブリ？」

思わずといったように、カーレンの喉から困惑の音が漏れた。

何の事かとベルに視線で問いかけると、「族長の会合なのよ」と返事がくる。

「数年に一度、中央大陸に全世界からドラゴンの里長たちが集まるの。あんたが初めてウィルテナトに来た時は、ちょうどまだ長だったアラフル様が会合から帰って間もない頃だったから、知らないのは当然よ。それに、今回はカーレンにとっては初めての顔見せなの」とはいえ、まだ時期が早くないか。あれは今年の夏辺りに開く予定だったと聞いたが」

「知らないわよ、私は」

ベルが髪を掻き上げながら言った。

「ただ、エルニスと最近使いで他の里に行つた時……ちよつと気になる話は聞いたの。あつちでは妙な動きがあるらしいって」

「どんな」

聞いたカーレンの顔は、既にティアが接していたものとは全く違うものになっていた。

いつの間にかカーレンの周りに漂い出した風格染みたものが、初めてティアに、彼がこのウィルテナトの長なのだと認識させる。

「……、」

呆けて見ている間にも、ベルは首を傾げながら記憶を掘り返しているようだった。

「うん、と。何でもね、若いドラゴンたちが聖戦以来の古参の長老たちと張り合つてるみたい。里が二分しかけてるんじゃないかってつて言つても、ウィルテナトは基本北大陸の取りまとめではあるけれど、積極的に他と交流を持つ訳じゃないわ。私たちはつい最近長アイクセンブリがカーレンへ代替わりしたばかりだから、前回の族長会合には出席していないし。実物を見た訳じゃないからどうとも言えないのよ。

先代のアラフル様からは何も聞いていないでしょ？」

カーレンが頷き、ベルはうんざりした顔で結論付けた。

「なら、つい最近の間に起こっている事で間違いはないと思うわ。向こうで事情が変わつたのよ……族長会合を早めなければならぬ

何かがあつたんでしょ」

「何はともあれ、招かれたのだから行くだけだな。エルニスは今どこにいる？」

「ベッドの上」

くあ、とあくびを一つ、ゆっくりとすると、ベルは少し据わった目であらぬ方を見やった。

「沈めてきたわ。昼まで起きないでしょうね」

「……………大概にな」

言葉に困ったのか、それだけをぼそりとカーレンは呟いた。

会話がなされている横で、ティアは手の中の手紙に目を落とした。

「……………」

蠟封の間に指先を滑り込ませると、弾かれるように封筒は呆気なく開く。

かさりと手に触れたのは、一枚の折り畳まれた紙だった。

取り出さなくても見える位置に、流麗な文字で何か書かれている。

『オリスヴィツカの空の下で

気付けば、いつも貴女を案じている』

「……………」

オリスヴィツカ。

それは、町の名前だ。ある名の貴族が治めていたという、土地のティアの胸に、一瞬の激痛が走る。心臓が一つ跳びるように跳ねた。

震える指で紙を開く。

だが、そこに文字はない。

「だから、すぐに発つ必要がある。時間はあまり残されていないだ

ろつから どうした？ ……ティア！？」

がたんとカーレンが席を立つ音が後ろから聞こえた。

手が食堂のドアを掴んでいるのを、遠くで感じた。

いつの間に部屋を横切ったのだろつ。

だが、気にならない。

構ってられない。

行かないと。

オリスヴィツカに、行かないと。

「ティア！ どうしたの！？」

廊下をいくら走ったところで、誰かに手首を掴まれた。

「あんた、自分が今どんな顔しているのかわかってる！？ 真つ白

よ！？」

覗き込まれたけれども そんなの、どうでもいい。

「ティア。何があった？」

カーレンの低い声がする。

「私、行かなくちゃ……」

憑りつかれたように、呟いた。熱に浮かされた時の頭のように、一つの事がいつまでも頭をぐるぐるとまわっている。

「行かなくちゃ。待ってるの」

無理矢理に身体を反転させられ、腕の中に閉じ込められた。

「分かった。だから、落ち着け、ティア」

落ちつける訳がない。

記憶は、回る。

紅い色が、回る。

白い壁一面に広がった血痕。血を流した人間の姿は、どこにもな

かった。

空っぽの空間に、愕然と立ち尽くした日の事だ。

あの日は、ティアの中でずっと鮮明に残っていた。いくつも傷付けられてきた過去の中で、最も新しく、心に深い傷を残した日だった。

忘れなかった時などなかった。

『気付けば、いつも貴女を案じている』

忘れた日など、なかったのに。

「待つてるのに……！ 私も、待っていたのに！」

自分が何を言っているかすら、分からなくなっていた。

「それは、それは、」

カーレンの胸を叩く。目尻が熱い。

気付けば、ティアは泣いていた。

「それは、私の言葉だったのに！」

ランファアという獣が目の前にいる。

牛を三回り大きくしたような、毛むくじゃらの獣だ。

大柄で温厚で人懐こく、良く食べるがそれ以上に良く働く。畑を耕すなどの力仕事にはびったりで、農村では頻繁に飼育される事多い獣だった。

触ると、淡い灰色の毛の中に、柔らかく手が沈み込んでいった。春の初めのため、まだ冬毛だ。夏になれば、この毛は抜け落ちて、冬とは違ってとても硬くてごわごわとした毛が生えてくる。

「……………」
もふ、と顔まで埋めてみた。全身が毛に埋まって、春の肌寒い日にはちょうどいい温かさである。

ランファアはぐあぐあど鳴く。やや緊張したりしていた初めの頃と違って、今ではすっかりこうされていて、も穏やかだが、出会った当時は完全に興奮して敵視されていたものだった。

「……………」
『ぐあぐあ』

「……………」
『ぐあ。ぐあ』

「……………」
『ぐあ……………』

「……………」
「あ！^{あん} 兄ちゃん、またランファアとだべってんのかよ」

『ぐあ』

ランファアが鳴く。

横目で見ると、彼の巨体の影から顔を覗かせたのは、一人の少年だった。名は……………確か、コルフなんとか。

「コルフリークだよ。いい加減覚えてくれよな、兄ちゃん」

『ぐあ』

何故考えている事が分かった。

「……………」
「なんつーか、あんたがランファアといると、ランファアがあるんだの事を代弁してる気がするよ」

「……………」

『ぐあ？』

そうだろうか。

「絶対そうだって。ていうかさ、いい加減こっちに顔ごと向けてくれね？ ランファアの毛に頭突っこんだまま会話されると不気味過ぎるんだよ」

『ぐあぐあ』

「……だめか」

『ぐああー』

そう、離れる気はない。

「離れてくれないと困るんだよ、兄ちゃん。また出発する頃だからさ。護衛してくれんのは嬉しいけど、こいつと一緒に村まで帰らないといけないんだから。……あんたも引っ付いて来るんだろ？」

『ぐあ』

たぶん。

「……」

顔をランファアから離して、コルフリークをじっと見つめる。

「……でも、あんたがランファアから離れると途端に訳わかんなくなるよな。なあ、本当に喋れねえの？ こっちの言葉は理解できる癖に」

それみたことか、というように、再びランファアが鳴く。

「おおい、コルフリーク　っと、何だ。またヴィニアと話していたのか」

「ヴィニアって、親父、いい加減にその名前やめようぜ………本当の名前聞いてないんだから、勝手にあだ名付けんのは良くねえよ。て

か、美姫ヴィニアで。兄ちゃんは男だろ」

「ぶっ飛んだ顔のすかし野郎に美姫ヴィニアってつけて何が悪いんだあ？
ああん？」

「うっわ、ちよ、酒くせえ！ まあたこの親父は昼間っから酔っぱらって……！ オリスヴィツカの大公様は、本当にこんな不真面目な面下げて税納めに来ても、笑って許して下さるんだもんなあ。お心が広すぎて涙が出るぜ」

「……」

肩を竦めると、少年はひよいとこちらを覗き込んできた。

「にしても、親父がうっかり見てひっくり返ったってあんたの顔、俺見た事ないんだけど。そんなにぶっ飛んでる訳？」

言われて、ぼさぼさの真っ白な髪に触れる。長すぎて顔をすっぱりと覆い隠してしまった髪の下は、自分ではあまり分からないが、見た者にこの世の終わりを持つてくる……らしい。

「見んなよゴルフ。男として終わんぞおめえ」

「訳分かんねえよ糞親父」

自分より一回り小さな手が、顔を覆う髪束を掴む。

「ぐあ」

あ。

そろつと下から覗き込んできた少年は、そのまま固まった。

「……ぐあ？」

大丈夫……な訳はないか。

皿同然に見開かれたゴルフの目は、雄弁に語っていた。

何こいつ、と。

「……親父。こりゃ美姫ヴィニアって呼びたくなる気持ち分かるわ」

ぼつっとゴルフは呟いた。

「喋らねえし夜会ったら怖いし動物にやたら懐かれるし、そのくせやたら剣の腕は立つし、最後にこの顔ときたら、そりゃ俺らにもつたいないぐらいの護衛だわ。いろんな意味で。すげえ傷が一本あるけどさ」

でもさ。

「俺、この顔に会った気がするんだけど。いや、でも一度見たら絶対忘れられないし……どこで見たんだろ。他人の空似かねえ？」

「……」

「なあ。兄ちゃん。ひよっとしてあんた、家族とかいない？」

『ぐあー』

……さあ。分からない。

「何で」

『ぐあ、ぐああ』

覚えていないから。仕方がない。

声の出し方を忘れた。

顔の動かし方を忘れた。

ただ、何か、探している気がする。

それは、何だったろうか。

ヴィニアと呼ばれた男は、首を傾げながら空を仰ぐ。

『ぐああ』

なあ、コルフリーク。俺には分からない事がある。

「何？ 兄ちゃん」

『ぐあ、……ぐあ。ぐあぐあ』

時々、恐ろしいくらい強い想いに駆られる事がある。

『ぐあ』

誰に向けているかも分からない気持ちで。でも、一杯になると、自然と言葉が出て来るんだ。

『ぐああ……』

『愛してる。会いたい』、つて。

ある日。

某国のある町で、全く誰も関知しないような、秘された会話が為されていた。

町の一角の、少し小金があるような者が使用する中級宿。そのの一室は、カーテンによって光が閉ざされて、中を窺い知る事もできないようになっていた。見た者は、誰も部屋に入っていないと思うのかもしれない。

明かりすらつけていない室内から外のざわめきを聞き、ラーニシエス大公はそんな事を考えていた。

ちょうど、話が一段落したところだ。

「……どうせ、おまえが呼ぶんだからそんな事だろうとは思ってたけどな」

と、物思いにふける背中にそう投げつけてきた声があった。

「奇跡の御子を保護したって噂は本当だったんだな」

「奇跡の御子？ …… ああ、あの子」

聞き返してから、誰の事が見当がついて、大公はおざなりに頷く。それと同時に、少し苦笑した。

「……君の言う噂というのは、大抵が人に知られているものではないだろうか？」

「まあ、そうだが」

振り向くと、薄暗い室内で、向かい合うような形で二人の男が座っていた。

声をかけてきた方は、長い足をソファに行儀悪く投げ出していた。青地に羽根飾りの重そうなコートと、間から覗くレースフリル。頭半分は白いものの、金の陽光の髪と碧い瞳という容姿は、それだけならばどこから見ても貴族という印象を見る者に抱かせる。ソファに立てかけた剣も、実用には程遠いような儀礼用の剣だ。だが、それにも関わらず、どこか野性的で、絶対的な強さを見る者に確信させる空気が、彼の全身からは滲み出していた。

そんな一見貴族の男は、ボトルを振りながら傲然と笑う。

「随分とでかい喧嘩吹っかけてんじゃねえか、大公？」

「私としては、必要な喧嘩だったんだ」

からかうような口調に、薄らと笑いかけてみせる。

すると、やれやれというように男は頭を振った。

「ハルオマンドが奇跡の子を擁立して、戦にでも乗り出すってか？」

「そんなものではないよ」

「へえ。じゃあ、大義は？」

「ない」

「……それは、少おし私には納得できかねますねえ」

黙っていたもう一方の男が、ねっとり口を開いた。

黒髪、黒目。病的なほどに白い肌に、さらに白粉を塗って、両の頬から頬にかけて縦に一線、鼻先にも墨を重ねた独特の化粧。さらに真っ黒な司祭のような服。彼こそまさしく、黒い道化と呼ぶに相応しい容姿だった。

納得できないと大公に主張した男は、そのままかくりと首を傾げ

る。

「なら、どうして貴方ともあるう方が、かの御子を保護する流れになつたのですかねえ？」

「別に、ただの私情だよ。もとより、私が公的な目的で動いた事があつたかい？」

「おやおや……では、自国の民を想つての行動ではなかつたと仰る？ 貴方が その彼が例えたように 喧嘩を売った相手は、とても私情を挟んで良いようには思えませんよお？ 下手をすれば民を危険に晒すではありませんか？」

矛盾していますねえ、と、男は眉を潜めた。

「ですが、貴方がここに私と彼を呼んだのなら いかな私情であるうとも、我々二人は何か、得るものがある、という事ですから……当然、何らかの対価となる知識など、教えていただけると解釈してもよろしいので？」

「……そうだね。君たち二人には、もともと知ってもらいたくてここに集まってもらつたんだ。いや、これからのために、知る必要があると言つべきなのか」

大公は静かに微笑する。

「教えてあげよう。彼らと起源は、私と全てが共有されている。私を知る限りの全ての事、それが対価だ。下手な連中の上層の醜聞よりも、よほど効力を発揮する。周知となれば、彼らの沽券にかかわる話だからね」

「そんな事まで知ってるつか。材料も豊富、突き方もこつちの興味のくすぐり方も心得ていると……おまえも大概腹黒いなあ」

呆れたように貴族風の男が言う。

「ラウス、おまえは知らないかもしれねえけどな。俺が知ってる奴はまだ可愛気があつたんだぜ」

「私だつてそれに毛が生えた程度だよ、ラヴファロウ。それに、彼は死んだ。私ももう大分、かつてとは考えも違つてしまつている」
主旨が明確には存在していないものの、それぞれに事情を心得て

いる者同士の会話は続く。

大公は唇に弧を描いて、すつと手を伸ばすと、机の上のグラスを取った。気配を察した男の方が、ボトルからワインを注いでいった。「史実じゃない。本当の事実が、いよいよ日の下に晒される時が来た。だが、これは誰の為でもない。私と　かつて、私が挑み、そして滅ぼしていった者たちのための、手向けの序曲だ」

「んふふふ」

道化司祭の男が笑う。

「良いですねえ。手向け。鎮魂歌という訳ですか……確かに、厚顔無恥な彼らに吠え面をかかせたいとは、長年思っていたのですよお」
そして、もう一方は、大公の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「……それは、ひいては『あいつら』のためになるのか？」
「なる」

大公は頷く。

「いいや、　私が、そうさせる。償いなんだ。犯してしまった過ちと、起こってしまった間違いと、そして、今の世界に対する私なりの、ね。協力していただけにかな。オリフィア　並びに、ポウノクロス国王」

並べたのは、中央大陸北方の、強大な二国の名前だった。

「聖神教を沈めたい。　どう思う」

言うと、オリフィアの国王が、頬杖をついたままにやりと笑った。「いいぜ。乗ってやるよ、その喧嘩　一人じゃ分が悪いんだろう？　ハルオマンド大公」

そうして、三人の密かな合意は為された。

ちょうど、時を同じくして。

あるドラゴンの青年と、小さな少年が、同じ大陸の片隅で出会っていた。

先に待ち受ける、運命も知らずに。

・ 3 ・ 運命の手招き（後書き）

次回、一章に続きます。

そういえば、ドラゴンの背中に乗せてもらうのは久しぶりだった。カーレンの漆黒の体躯に跨り、突き出た鱗に掴まりながら、ティアはそんな事を思っていた。

眼下を流れる景色は疾い^{はや}。先ほどまでは見渡す限り一帯が海だったが、今は既に緑に覆われた平地。大地が大半を占めている。点々と、たまに見かける町らしき白いものを見て、それが海岸沿いにあたりすると、あれは自分が幼い頃を過ごした場所だろうか、と思っていた。

身寄りもなく、幼かった頃のティアが、孤児として十三、四の頃まで育つたのは港町だった。カーレンと出会ったというより、いろいろあつて再会した場所もそこだ。

もしも彼が外に連れて行ってくれなかったら、あの後自分は どうしていただろう。

想像もつかない。

つかないほど、今と昔の自分はかけ離れているのだと、ふとした瞬間に思う事がある。

だが、きつと、もつと、今の方がティアの世界は大きくて楽しい。掛け値なしにそう思えた。

『もうすぐハルオマンダの近くだ』

響くようなカーレンの声が聞こえた。

「……うん」

頷く声は、自分で思ったよりも低く、静かだ。

中央大陸から送られてきた自分宛ての手紙を、たすき掛けにした鞆の上から押さえる。ティアをこの地へと誘うだけの衝撃を与える

のに、十分な威力を手紙は秘めていた。

必死に宥めてくれたベルやカーレンのおかげで、いきなり飛び出してしまふという無鉄砲な事にはならず済んだ。それでも抑えきれないほどの動揺と激情がその場に残った。

居ても立ってもいられないティアを見かねて、カーレンが、自分がマールウェイに行くついでにティアを送ると言い出したほど、その姿は見ていられなかったらしい。

ともかく一日待ってから、カーレンはエルニスとベルだけを伴って、ティアを乗せてマールウェイへと向かっていた。

『カルス山脈の麓^{ふもと}辺りで降ろす。そこからハルオマンドに入ったら西に向かえ。王都ラベニスタを回って、大公領直轄のオリスヴィツカまで南下するといい』

ティアは少し目を丸くした。

「人里が近いわ。大丈夫？」

『むしろ尾根にでも降ろしたら、山を下って平地に出るだけで一週間近くかかるが』

そもそもおまえ、生き残る自信があるんだろうな。

言われて、ティアはう、と詰まった。

北大陸のクラズア山地で半月耐えたのだからそれなりに可能だろうが、かといってそれだけ旅程を延ばすほどの忍耐が今の自分できるとは到底思えない。

それに、姿を晒す危険さえ冒してここまでしてくれろというなら

申し訳なくて何も言えない。

はー、と息を吐く音に、溜息を吐いてしまったようだと思いき、ティアは唇を引き結んだ。

いけない。こんな事で心配をさせれば、カーレンがマールウェイでの集会に集中できなくなる。

……と、思ったのだが。
予告通り山の麓に降ろしてもらった時にも、大きく溜息を吐いてしまった。

「……本当に大丈夫か？」

「……ん、大丈夫よ」

わざわざ人化してやってきたカーレンに聞かれて、ティアは苦笑した。

「山脈のこつち側に降ろしてもらえただけでも十分よ。ごめんなさい……いいえ、ありがとう、カーレン。同じ中央大陸でも、少し回り道しないといけなかったんでしょ？」

「……まあ、別にこれくらいは大差ない。だが、本当に大丈夫だろうな？」

言ったカーレンの頭を、べしつとベルの手がはたいた。

「あんたいい加減にしときなさい。気持ちは分からないでもないけど、さつきから『大丈夫か』だけしか言っていないわよ」

「だが、」

「やめとけてカーレン。おまえ、いくらティアがあの時取り乱したからって、過保護にも程があるぞ」

「……」

副長にまで諫められ、カーレンは押し黙る。懽然とした様子で顔を背けたのを見て、ティアは首を傾げた。

とにかく大丈夫だともう一度念押ししてから、エルニスに向き直る。

「そつちこそ、マールウェイに三人だけで行っちゃうの？」

「あんまり大人数で行っても仰々しいからな。普通、側近とか信頼できる奴を数人伴って行くんだよ」

エルニスが言っつて、肩をすくめた。

「とはいえ、俺とベルだけっていうのは、さすがに少なすぎだ。普

通は五、六人単位だよ」

「……他のドラゴンは？」

「いない。いや、いると言えばいる。向こうに、マールウェイの方に派遣されているクエンシードのドラゴンが三人ぐらい」

言つて、エルニスはふと口をつぐんだ。隣で、ベルがふう、と遠い目で溜息を吐く。

「……っていつても、その三人がどうかって、それは勘定には入れられないのよね」

「え？」

聞き返すと、だからね、と苦笑が返ってきた。

「要するにこれは、長の面子と矜持の問題なのよ」

ベルに言われて、麓から続く平原を眺めているカーレンをきよとんとティアは見つめる。

物思いに耽るような紅い眼差しは、どこを見ているのか全く分かっていなかった。

と、その双眸が動いて、カーレンは踵を返しながら、流れるような動作でマントを捌いた。

「そろそろ、行くぞ」

言つた瞬間、カーレンの姿はその場からかき消えていた。

「はいよ」

返事をしながら、エルニスがティアの横を通り抜けた。

「じゃあな、ティア。危ない事には首を突っ込むなよ」

「それ、いつも私が首を突っ込んでいるみたいじゃないの！」

抗議すると、エルニスに続いて地を蹴りながら、ベルはからからと笑った。

「違うの？」

「違ったんだな」

「違うわよっ！」

『 いずれにしても、』

カーレンの声が頭上から響いた。

漆黒のドラゴンが、空からこちらを見下ろしている。

『 無茶はするな』

「……カーレンもね」

分かっているとしても言いたげに目を瞑り、黒い翼が広げられた。

あつという間に強風を巻き起こし、蒼穹の彼方へ消えてしまった
三体のドラゴンを見送ると、

「 さて、と。私も行かないとね」

ティアは自分に言い聞かせるように独りごち、踵を返して、西を
目指して歩き出した。

「 三年前から溜まりに溜まってるのよ。度肝を抜いてあげるわ、」

、と名を呼んだ。

ひょっとしたら、もう持ち主さえいないかもしれない、名前を。

クロツドがハルオマンド公国に入ってから、旅はさらに一週間ほど
続いていた。

一言でいえば、疲れる旅だった。

例えば、ルデイの坑道での話だ。

カルス、並びにイディエ山脈は、中央大陸の北西部を縦断し、隣
り合う二つの大国の国境ともなっている場所だ。

そんな山脈を貫く坑道は、伝説通りに蛇が掘ったのではないかと
思うほどに巨大な、真円の長い穴だった。おそらく直径は、人の背
丈の優に五倍はあっただろう。

時折大昔の魔術の痕跡らしき灯りを見かけたりもしたが、この坑道、とにかく暗い、寒い、冷たいの三拍子が揃っていた。

公国からやってきた時にもここを通ったというレダンが魔術で光を灯して先導し、エリックが細やかな気配りや注意などをしてくれたのだが、

「あ、エリック。そこ段差があるから気を付けてやってくれ」

「だそうだ、アストラ」

「あ、はい ひゃあああああっ!?!」

だからといってアストラがすっ転ぶ回数は減る訳でもなく。

「っつ」

「あ……す、すみません、クロッドさん」

「おまえが毎度失敗するのはもう織り込み済みなんだよ……」

「あうう」

へたつと耳を伏せる少女がいたかと思えば、後ろでは、

「フュー、大きな石があるから滑らないようにね」

「えっと……この段差は？」

「降りなさい。自力で」

「……ええと。ルミナさん」

「行けるわ。私が行けたもの」

「……おまえは鬼か？ どう見てもそいつの身長は四倍はあるだろ」

自分も魔術で降りたんだから、手伝ってやれよ。

クロッドから見ても不憫だと思おうような、優しさなのか厳しさなのか分からない理不尽な仕打ちが行われていた。

行程は一日半ほどで終わり、後は坑道を出て、ひたすらに山を下り、平野を歩き続ける事三日間。天候に恵まれたのもそうだろうが、イウエンの町で心配したほどアストラはか弱くはなかったようで、音を上げる事もなく黙々と歩き続け、逆に何がそんなに楽しいのかと思うほど、いつもにこにこ笑っていた。

「だって、楽しいんですよ。見た事のない草木が一杯生えてるし、空気の匂いも全然違うんです」

びくん、とフードの下では耳がせわしなく動いている。

しかし それはどこを旅した場合にも同じような感想を抱くものではないのか、とクロッドは思った。

きつとこの女はどの世界であろうと、初めての場所ではこんな風にのほほんとするに違いない。

呆れながら、さらに歩いて歩いて、その日の夕方に、舟に乗る予定の川沿いの町が見えた。

「ふむ」

そして、レダンが財布の中身を確認ながら唸ったのは翌日。川を渡って、舟を降りた時の事だった。

「残りはエルト銀貨にして三枚、小銀貨が八枚か。どうだろうね」

「まあ、大体は予定通りだな。旅費は十分足りている。宿に拘らなければ、野宿と半々で行けるだろう」

船頭に金を支払い終えてきたエリックが、レダンの隣から覗き込んで言った。

「それか、期間を短縮するか、だ」

一つ息を吐いて、レダンは財布をエリックに放り渡した。

「ところで、そちらは大丈夫なのか」

声が飛んできて、クロッドは顔を上げた。

一拍おいて、首を横に振る。

「全然ダメ」

「う……す、すみません。ちょっとまだ、ふらふらします……」

「ちょっと、大丈夫？ 吐くなら川に吐くのよ」

ルミナがうずくまるフューの身体を擦る。

要するに、船酔いだった。

「どうせ食欲がなかったんだから、中なんて空だろ」

「クロツド」

「はいはい」

髪を掻き上げながら、クロツドは顔をしかめた。

「アストラ、おまえは？」

「私は大丈夫ですよ？ お舟でもぶかぶか浮いてるって楽しいですね！」

「……よし、元気だな」

ぱつと笑みを咲かせたアストラに、クロツドは静かに頷いた。

「クロツドさああん……！」

アストラの抗議の声は聞き流してレダンに向き直ると、大人組は二人揃って苦笑していた。

「フューには悪いんだが、一難去ってまた一難、かな」

レダンがまだほろ苦く微笑んだまま、親指で後方を指す。

「乗り合い馬車はいけるか？ 慣れないと尻が痛む事になると思うが」

「……う……」

エリックの言葉に詰まる少年を見下ろし、ルミナがぼんぼん、と適当にその頭を叩いた。まだまだフューの受難は続くようだ。

「でも、ラーニシエス領のオリスヴィツカといえば、ハルオマンドでは旧王都ラベニスタと同じくらいに栄えている都よ。ここも主な交易路の一部だし。まだ道は綺麗に整えられているわ」

一応は慰めになる言葉だった。クロツドも正直、あの硬い板の席に腰を長く落ち着ける気にはならない。それが悪路ならなおさらに「そつえば、石畳を敷いたのは先々代のラーニシエス大公だった

かな？」

レダンが言いながら、小銀貨を二枚ほど財布から取り出した。

「どうでもいいけどな。揺れはしても、砂利道じゃないだけまだマシだ」

クロツドは言ってから、ふとアストラを振り返った。

「おまえ、フードは大丈夫か？」

「あ、はい。ずっと深く被ってるんで、ずり落ちる心配はありません！」

ただ、とアストラの笑みはやや引きつったものになった。

「ちよつと、怪しい人になった気分が続いてます」

クロツドはアストラの足元から頭の天辺まで眺めてから、ぼつりと言った。

「間違ってはいねえよな」

異世界の住人など、こちらにしてみればそれだけで十分不審人物だ。マントとフードを引つ被っていたら、それはもう、立派に後ろ暗い所がある人間にしか見えない。幸いにも、純白という色と質の良い布地が、いくらかその雰囲気緩和してくれてはいたが。

「ほら」

手を差し出すと、きよとんとアストラは目を瞬いた。

「……何でしょう？」

「馬鹿」

「ふえっ!？」

急に罵られて動揺する彼女の手を取ると、クロツドはすっぱりと、

「おまえは放つとくとまた馬車の手前で転ぶだろうが」

「……そうでした」

若干しょんぼりと肩を落として、アストラは呟いた。

何もなければいいが、とクロツドは思う。数年前にこの国で起き

た政変は、さほど国内情勢を悪化させる事なく短期間で終わったというが、それでも空気が妙な心地がした。

「……何かありそうだな」

ほつつと零した言葉だったが、ルミナがそれを拾っていた。

「あなたもそう思う？」

肩を並べてきた彼女は、秀麗な眉を潜めて言う。

「『匂い』ってするものよね。誰かが、何か考えているような……でも」

「レダンやエリックじゃない」

クロツドは首を傾げた。

「むしろ、馴染んでない。外からの奴だろう、どうせ」

否定こそしなかったが、ルミナは呆れた様子だった。

「そこまで分かると、もはや野生の勘ね」

「野生？」

クロツドは呟いた。

「野生なんか、この姿の時はほとんど忘れてるもんだぞ」

「じゃあ、いつ思い出すの？」

「……飛ぶ時、かね」

「ふうん」

どちらにしても、一騒動が起こりそうな予感はしていた。

*

「……おい」

「何」

「起こったぞ、面倒事」

「みたいね」

ルミナは隣で軽く、退屈そうに欠伸をした。

実際、退屈ではあった。馬車は立ち往生していたのである。

とはいえ、ハルオマンド公国の中でも大都市に近く、往来も激しい方の街道である。整備されているのは当然なので、道の穴に車輪がはまる事もない。ましてや賊に遭遇する危険性は、あつてないようなものだ。馬車を止めるのは道を横切る羊ぐらいだろう。

しかし、クロツドラが出くわしたのは、羊よりも厄介で面倒な集団だった。

騎士団である。

「……たくさんいますね」

反対側に座るアストラが驚きも露に囁いた。

「そこしか気にならないのか、おまえ」

呑気過ぎないかと、ちらりと頭にそんな考えが浮かぶ。何も言わないフューは、クロツドとルミナの間に挟まれて、小さくなって息を潜めていた。三人がいるのは馬車では右端の方だったが、更にその前にエリックとレダンが陣取り、時折油断なく目を走らせている。妙に緊張している二人と少年だが、前者はあくまで気持ち程度の変化だったため、一週間以上共に行動しているクロツドやルミナ、アストラにしか分からない程度だった。

「公国じゃない」

レダンが胡乱な目で彼らを眺めながら言った。

「あれは聖殿騎士団　聖教の総本山、ゲッヘンブルグを護る精鋭揃いだ」

「何でまた持ち場にいないんだよ」

大人しく総本山にすっこんでいればいいものを、とクロツドは毒づく。今の状況以上の面倒は御免被りたい。

「たまにこうして、各地に異端の気配がないかを探るんだ。……慣例みたいなものだけだね。今じゃ中央大陸のほとんどの国に聖教が広まっているから」

「よくやる……」

呆れかえって、それしか言葉が出なかった。

だが、実際形骸化していても無理はないのだろうとも思った。

象徴として崇めるのは実際に歴史上存在した人間だ。どの神や聖霊が遣わしたかを論じる必要はないと信徒らは口を揃え、実際に聖教側もその辺りを改めさせる気はないという。何をせずつも、聖人エルドラゴンの名は他大陸でも広く知られているほどの名前なのだから、権威を広められればそれでいいのかもしれない。

「聖殿騎士団は聖教の中の奇跡と言われている。上層部が腐敗しているにしても、珍しい事に、將軍格まで敬虔な信者たちで構成されているんだ。狼藉はないし礼儀正しいしで、皆がありがたがるが、代わりにこちらにとっては厄介なんだな、これが」

レダンが言ったこちらは、施政を行うラーニシエス大公側にあたるのだろう。

「いろいろ後ろ暗い部分もあるって？」

「無い方が逆に気持ち悪いけれどね……まあ、そうでない事もあるさ。地方による」

「ちなみにそっちは？」

「最近までは後者だったんだが、」

言いながら、レダンが体を更にならした。フューが騎士団から完全に見えなくなる位置関係になった事に気付いて、クロッドは眉を寄せる。

「今は前者だね。彼のフードを被せてやってくれないか、クロッド」
言われた通りに少年の顔を隠させると、クロッドはエリックを見やった。

「こいつ、本当に何なんだ？」

「……とりあえず、『聖衣を纏う者』は見られるとまずい」

エリックの答えは、確かにその通りだった。

目と髪の色は生まれついたものであり、望んで得たものでなくとも、彼らはそこに居るだけである程度の尊敬を受ける。

だが、どう考えてもそれ以上の理由がある。これは、あからさまだ。

フューを見ると、彼は小さくなったまま、表情無く視線を下に落としていた。

「フュー」

クロツドは、そつと少年を呼んだ。

彼は、鮮やかな色の瞳でこちらを見上げた。

「……クロツドさん」

言ってから、フューは笑う。

「そういえば、まだお礼を言っていないですね。……ありがとうごさいます。クロツドさんに会って、僕はイウエンの町ですごく助かりました」

……それは。

少し、違う。

「馬鹿。おまえも馬鹿決定」

「え」

フードの上から小さい頭を鷲掴みにすると、クロツドはぎりぎりとゆっくりフューの頭を締めた。

「痛い痛い痛い」

「馬鹿だからお仕置きだ馬鹿」

「訳分かんないですクロツドさん」

一通り少年を苛めてから、クロツドは溜息を吐いて後ろを向いた。馬車の中も騎士団の姿も視界から締め出して、たまに木の生える草原や延々続く道だけを見る。

「……あなたの気持ちも、分からないではないわよ」
ルミナの声がした。

「私も時々、この子やアストラの時に似たような事を思ったから」
「……私も、ですか？」

アストラが、確かめるような調子で訊ねた。

「ええ。あなたもよ」

少女は答える。

「だってそうでしょう？ あなたは明かして、フューは隠させられているけれど、どっちもどっちで似てるわ」

言って、ルミナは僅かに微笑んだようだった。

「ひよつとすると、立ち場まで似ているのかもしれないわね」

隣でフューの身体が強張ったのを、クロッドは確かに感じた。

「顔の確認をしたいんだって？」

「変な事するわねえ……」

馬車の中で誰かが言ったのが聞こえて、すつと身の内が冷える。

「……一応、これはまずいのですよね？」

アストラがフューを気にしながら呟いた。

「だろうが、どうしようもない」

少なくとも、今までのフューやエリックらの態度を考えると、騎士団に見つかってしまえば尊敬を集める程度に終わりそうにない。

「この辺りで、異端の物語を語り歩く人間がいると聞いた。見目について情報がある。確認をさせていただきたい」

白に金の縁取りの刺繍という団服を着た騎士が、馬車に寄って言った。

上手い事を言ったな、とクロッドは思う。

レダンとエリックは顔を見合わせ、眉を寄せている。やはりフューが騎士団に見つかるに困るのだ。

「……ねえ、クロッド、まずいというなら、あなたもアストラもま

「ずいんじやないの？」

ルミナが囁いた。

「アストラは耳がある。あなたはよく見なければ分からないけど、目が普通の人間じゃない」

気付かれれば詰問を受けるのは目に見えている、とルミナは言外に示す。

「どうしろって？」

「任せて。あの騎士、ちょっと女ったらしっぽいのよ」

言われて、クロッドはルミナが示した騎士の顔を見た。

薄い茶色の髪に、少し垂れがちな緑の目。髪自体は短く刈り込んでいるので優男という雰囲気は駆逐しているが、クロッドは妙に、騎士の男に胡散臭いものを感じた。

レダンは敬虔な信者が多いと言ったが、それは裏返してみれば、そうでない者もいるという事。

ルミナの言う事も微妙に信用ができないのだが、それでもクロッドは自分の勘と合わせて判断して、「分かった」と小さく呟いた。

ルミナは何気ない動作でレダンとエリックに近づいて、同じような提案を二人にした。彼らもクロッドと似たような反応をしていたが、やがて小さく頷くのが見えた。

「うまく行かなかつたら、その時はその時で、立ち回りを考えておいて」

小さく片目を瞑り、にっと、ルミナは相変わらず人形顔に似合わない笑みを浮かべた。

「ねえ、騎士様」

まさしく鈴の転がる凜とした声で言いながら、ルミナが馬車の乗客の間から身を乗り出した。

「異端のお話を語るその人、どのようなお話をなさるといのでし

「よいか？」

ぬつと現れた美少女に騎士は一瞬目を丸くしたが、すぐに目尻を下げた。

「異端の話は、異端の話です。私どもも話については聞き知った程度ですが、」

小首を傾げたルミナにじっと見つめられ、騎士は一瞬言葉を切る。「お話ししましょうか？」

声に気持ち、熱が籠もる。

「ええ、是非とも」

甘い声でルミナが笑った。

怖い。

クロツドは総毛立った。

豹変ぶりに啞然とするアストラとフューもそうだが、レダンとエリックの二人もまた、狐につままれたような顔をしていた。

異端の話というのは、騎士が言うには、聖戦時代についての話らしい。

世を救った聖人が、実はとある少女に恋をしていたというのである。

ここまでなら何の変哲もない、聖書に付け加えられた誰かの挿話だ。

しかし、その少女が問題であったという。少女は敵方の　つまり、世界を当時荒らして回っていた悪魔、ドラゴンらに、ある村から生贄として捧げられていたというのだ。

ドラゴンによって穢れた身である者を、間違っても彼らを敵とする聖人が想い人にする訳がない。聖人を貶めるための異端の仕業だとして、騎士団は話をしたその人間を追っていた。

騎士の話を、最初は面白半分に聞いていた馬車の人間らも、なる

ほどと頷いていた。

顔を見て回るための口実としては、妙に真実味がある。

ひよっとすると、騎士が言う異端の話自体は本当に流れているものなのかもしれない、と、気を取り直したクロッドは思った。

「ところで、お嬢さん、お名前は何と？」

「ルウナというの」

「ああ、確かに。貴女の声に対応しい名です」

……誰がこの会話を終わらせてはくれないか。

思ってみたものの、ルミナはフューを隠すためにこの役を引き受けている。

我慢のしどころだ、とクロッドは深呼吸をして気持ちを落ち着けていた。

だが、救いの神というのは現れるものらしい。

いや、この場合は疫病神なのだろうか。

「どうです、宜しければ行く先のオリスヴィツカで、また我々の巡回の折々の話など」

「まあ、素晴らしいお話がたくさん聞けるのでしようね」

「それはもう。私テミス・ストフィクが保証いたしましょう」

胸の十字剣に手を当て、おどけて一礼してみせた彼の肩に、ぽんと手が置かれた。

「テミス……おまえ、女を口説くのはほどほどにしると言っただけだ」

同じく、聖殿騎士団の団服を着こんだ男が、テミスと名乗った騎士に呆れた様子で言った。

よく見れば、男は騎士団の中で一人だけ、青いマントを羽織っている。他の騎士は皆左肩から片側に同じ色の布をつけているのだが、マントと呼べるほどの幅はない。

隊長格か何かだろうか、と思っていたクロツドの脇で、フューが小さく息を呑む音が聞こえた。

「アラスタ……？」

思わずといったように漏れた擦れ声に、クロツドは片眉を上げる。知り合いなのだろうか。

クロツドが思う傍らで、アラスタという騎士と、テミスの会話は続く。

「何ですか隊長。俺はこのお嬢さんに自由時間の予約を申し込んでいるんですよ」

「今はそんなことをしている暇があったらきつちり件の人物を探してくれ……」

「本当にね」

……ちよつと待て、とクロツドは首を傾げた。

今、さり気無く第三者が会話に乱入した気がする。

はつと振り向いた騎士らだけでなく、ルミナまでもが弾かれたように顔を上げた。

クロツドもまた目をやると、いつの間に近付いてきたのか、青毛の馬に跨がった若い男がこちらを見下ろしてゆるりと微笑んでいた。「私の領有内で娘を口説くとは、聖殿騎士団も暇が多いようで結構な事じゃあないか。別に禁じている訳でもないが」

平和で何よりだ、と闖入者の声は穏やかに、しかし確実に毒を含みながら続く。

目を瞬かせるクロツドらの前で、エリックがほう、と溜め息を吐いた。

「助かった……」

見るからに上等な乗馬服を纏っている所といい、エリックの独白
といい。

クロツドの中でつつすらと予感がした。

彼は、もしかすると。

「旅の帰りだね。馬上から失礼するよ、聖殿騎士団。今年もよくぞ
我が領土まで足を運ばれた」

唖然とする一同に対し、明朗な声が可笑しがるような響きを含む。

「……『げ』つつつても良いんでしょうかね、隊長」

「それは俺の台詞だ……」

騎士らの密かな会話は、クロツドの耳にはしっかりと届いた。おそ
らく間近にいたルミナにも聞こえただろう。

「何者だ？」

騎士の一人が怪訝な声を上げたが、テミスに握り拳で潰される。

アラスタが溜め息混じりに、頭を振り振り呟くように告げた。

「第二十一代ルヴァンザム・ルーベム・エル・ラーニシエス大公爵

……代々本名・御年不明はいつも通り。なぜ当主全員が奇跡のよう
に同じ顔なのか知りたいものだが、」

アラスタがちら、とラーニシエス大公を見やったが、大公はにつ
こりと無言で笑っただけだ。この様子では、彼には答える気は全くな
いのだろう。

そして腹の裏はきつと黒いに違いない。故郷にいる好好爺を始め
とする老獪な長老どもよりは、そうあからさまでもなさそうだが
気付くとしつかり手の上で転がされていそうで、その点では彼ら
と良い勝負か。

ああ、また面倒事の気配がする。

ますます引き返せる気がしなくなってきた所で、クロツドは大きく嘆息した。

「ところで、どうか。もしも嫌でないのなら、我々と共に昼の休憩を」

「は、いえ、しかし……」

「ああ、顔の改めなら私たちも手伝おう。最近このラーニシエス領でも、妙な語りをする人間がいると聞いていた。そろそろ取り締まらねばと思っていた所なんだよ」

「ですが、大公。我々にも神と聖人の名の下、剣を振るう者としての使命が」

「いいから、構わずに。共に大地の恵みを分かち合う者同士じゃないか」

アラスタの言葉をさえぎって、大公は笑う。

「いやね、実は旅の行程が思った以上にはかどってしまったって、食料が無駄になるところだったんだ。どうせ捨てるのなら皆の口に入った方がましだろうと思って」

実はそちらが本命で近づいたんだ、と彼は苦笑した。

「あくまでついでだよ。私と君たちが信じるものは皆同じ。是非とも協力させてくれ。こちらも既に人相の情報は得ているから」

いらぬ世話を焼いてくれるな。

おそらく騎士団全員がそう思ったに違いない。

しかし、大公がアラスタを説得する背後では、既に馬車を大公の後からやってきた従者が取り囲んでいる所だった。

「なっ……!!」

クロッドは目を瞪る迅速さで動いた従者らに驚いたが、彼らは何食わぬ顔で、他の乗客らと同じようにフューの顔を覗き込み、他の者に対して首を横へ振った。

それを合図に、レダンが馬車から飛び降りて、残っていたフューを抱えて地面へと降ろした。

クロツドの前にも、まだ若い少年の従者がやってきて言った。

「貴方様も問題はありません。終わった方から馬車を降りて、あちらの方でお待ち下さい。（……仕切りをいたします。レダン様、エリック様と共に、そちらへ。どうか顔をお出しになられませぬよう）」

後半で囁かれて、思わず目を瞠る。

どついう事だと聞きかけた時、隣でアストラが「わ、」と声を上げた。さつさと馬車を降りたエリックが、アストラをフューと同じように地面に降ろしていたところだった。

「行くぞ、クロツド」

「あ、ちよ、」

二人の素早い行動に啞然とする間もなく、くい、と袖を引かれてクロツドは振り返る。

ルミナだった。

「私も降ろしてくれるのかしら？」

「、……………」

答えに困っていると、ルミナは片眉をひょいと上げた。

小さく微笑んだものの、目は笑っていない。

「降ろすのよ？」

逆らうと後が怖そうだ。

「……了解、姫」

盛大に皮肉を籠めて言うと、クロツドは言われた通りに動く事にした。

だが、実際にルミナを抱え上げた時は、僅かに目が丸くなった。不思議なほど重さがない。

「……どうしたの？」
「おまえ、生きてるか？」
「吹けば飛びそうとか言わないのよ」
「もし言ったら？」
「杖で殴るわ」

残念だが、現実離れた人形顔で言われても、その発想に真実味をくつつけるだけであった。

*

「いや、助かったよ。昼の休憩ついでに食べる口が増えて、その上賑やかと来た。旅の交流の条件としては最高じゃないか！」
「あつははははは！」と、クロツドの肩を容赦なく引き寄せて大公は笑う。

「そう、ですね……」
クロツドは乾いた笑いを漏らした。
完全に絡まれていた。しかも、自分とそう種族的には年齢の変わらない人間に、である。

さつきから右の頬に突き刺さる視線　遠くからの聖殿騎士団の憐れむような目が気になって仕方がなかった。なぜこうなってしまったのだろうと思っても、いくら考えても分からない。

遠い目をしていた所で、隣に座る少年が微笑みながら、クロツドの持つ杯に並々と見事な赤色のワインを注いだ。彼は先ほどまでフューが被っていたフードマントを身に着けている。よく気が付くところを見ると、元はおそらく使用人の子供の一人か何かなのだろう。（「……あの子を隠してくれてありがとう。一緒にいたルミナという少女の機転も素晴らしいけれども、君も彼を救ってくれた恩人だ」

ぼそ、と肩口で小さく囁かれ、クロッドは更に顔が引き攣るのを
食い止めなければならなかった。

「……あんな餓鬼を政治利用か」

呟き返すと、大公はふつと苦い笑みを浮かべた。

「まさか。保護を頼まれただけだよ」

保護と聞いて、クロッドは眉を潜めた。

「その辺りは、私情でね。ただ、レダンとエリックから聞いたけれど、家で保護する事になった子がいるらしいね？」

ちら、と大公が目線だけで示した先には、ルミナの隣できよるき
よろしながら、おっかなびっくりワインを口に運ぶアストラが居る。

「ふうん……異界エマルフィアより来たりしミアシェの民。しかも王族、ヴァンリールときたか」

ぼそつと大公が言った中には、彼が知るはずのない単語が入っていた。

「！ んぐつ！？」

胸にワインを支えさせたのはクロッドだけではない。耳が良いのか、アストラもまた一しきり咽せてから、目を零れるぐらいに見開いてこちらを見た。

「あんだ……！」

「青い矢から落ちてきたっていうんだから、そうだろうと思ってね。家の歴史を舐めてはいけないよ。過去五百年続いてきた大家だ。知識の継承も確実に行われてきた」

さらりと言つてのけるが、クロッドはそれどころではない。

人間の間に何人もが知るような知識ではないはずだ。なのに、彼は平然とその知識を引っ張り出して、さらに他の知識の存在すら匂わせた。

一つの家が紡ぐ歴史は、長くて数百年。しかし、五百年ともなると、滅多にないような破格の長さだ。時の流れの中、生き残るためにした大仕事は、十や二十で済まされないかもしれない。

「あんたら、一体何をやってきた……!?!」
啞然として呟くと、大公は頬杖をついて、何の気負いもなさそうに笑った。

「そりゃまあ、いろいろとね?」

笑いながら、啞然とするクロツドの口に持っていた干し肉を突っ込んだ。

「ぶぐっ」

「あはははは、君面白いね」

突然の肉の強襲に、クロツドはぶぐむぐと口を動かすしかない。強引に誤魔化したというよりは、今はこれ以上深入りしない方が良いと言われたような気がした。

、した。

「大公……それ以上飲むと馬から落ちるよ」

レダンの声が背後から聞こえた。振り返って見上げると、呆れた顔でレダンは大公を見下ろしている。

「っと……酒が過ぎたみたいだね」

注意された方は、「いけないいけない」と苦笑したが、ある瞬間から笑みの質が変わった。

「それで? どうだった」

「駄目だね」

主旨のない質問に、多くを省いてレダンは返し、肩をすくめてみせる。

二人の間に横たわる暗黙の了解を感じて、クロツドは果たしてここに居ていいものかどうかを考えた。ろくでもない雰囲気は両者の声から滲み出ている。

「ますます悪化している。抗争は激化、ついに老いぼれたちも重い腰を上げて、各方面にも召集がかかった。巻き込まれるのも時間の問題だ」

「……そうか。なるほど。ありがとう、レダン。ここからは私がエリックとフューを連れて行こう。引き続き偵察を頼めるかい？」

レダンは無言で小さく頷き、クロツドたちから離れていく。と、振り向いてクロツドを呼んだ。

「クロツド。二日と半日ぐらい、俺は旅から抜けるよ」

「さっきの件？」

「ああ。もともと、フューを連れてくるのはエリックの役目で、俺は本来別の件に携わってるんだ。オリスヴィツカでまた会おう」

じゃあ、と微笑して手を振ると、レダンの姿はその場から消えた。魔術で転移したのか、と思いつながら何気なく空に目をやると、はるか頭上へきらりと白銀の輝きが昇っていくのが見えた。

「……え」

思わず声が出た。

まさか、跳んであれほどの高さには？

しかも、騎士団の方も誰もレダんに気付いた様子が無い。

啞然としてクロツドが見上げていた横で、大公が溜息を吐いた。

「困ったね」

あの子は間に合ったのかな。

何が何だか分からず、混乱するクロツドの前で、大公は思惟に耽るような顔でそう呟いた。

「クロツドだっけ？」

「あ、ああ」

「君は世界についてどれだけ多くの事を知ってる？」

それは、突然の質問だった。

「世界？」

「何でも良いよ。歴史でも、場所でも、今起こっている事でも。自分では到底、全てを把握しきれないと思うかい」

何を考えてこんな事を聞いて来るのか、クロツドには理解できない。

困惑して黙っていると、大公はそこから「そうか」と、答えても居ないのに何かを納得したようだった。

「……さつき、君はフューを利用するのかと聞いた」

大公は静かに、クロツドを置いて独白のように続ける。

「これが答えだ。彼は何も知らない。君も、きっと、何も知らない。アストラ姫も、もちろん」

でもね。

「そこに存在するだけで、何の罪もなかった者を、人は簡単に悪魔に仕立て上げる。疑念と邪推が、その誰かを殺す」

ざわりと鳥肌が立った。

それほど、彼の言葉には情感が籠もっていた。溢れるほどの切なさ　憎悪の色が、そこにあつた。

「私は、その人々を許すつもりはない。悪魔にされた人間だって、殺すつもりもない。私はどうしようもない彼らの愚かさによって、大切な人を喪ったから」

ふと、クロツドは悟る。

彼が悪意をどこに向けているのかは分からない。

しかし、紛れもなく、彼が秘めているのは復讐心だった。

恐ろしいほど静かに、青々と冷たく燃える火を、彼の奥に見た気がした。

「ただ、これ以上、大切なものを、傷つけさせたくはないんだよ。分かるね？」

振り向いて微笑む大公のその表情はひどく素朴で、とても年若い男がする表情には思えない。

クロツドは初めて、彼が本当に見た目通りの年齢なのかと訝しんだ。

ハルオマンズの旧王都、ラベニスタの住民たちは、この数日、何とも言えない光景を目にしていた。

彼らが覗き込んでいたのは、街角にあった食堂の中だった。入り口から中へ入る者は誰も居ない。入ったら最後、『巻き込まれる』と誰もが直感していたからである。

「……ほい、次」

とろつとした眩きと共に、重みのあるジョッキを、若い男の手が机の上に置いた。

手の持ち主の向かいに座っていた男は、一瞬息を詰めたような顔をしてから、急に口元を押さえて食堂の隅に用意されていた桶へと走っていく。事は叶わず、途中で見事につんのめってその場で昏倒した。だけでなく、桶に出すはずだったものもそこでぶちまけられた。それで、店の外にいた見物客らはさり気なく目を逸らして、男をそんな状態にした張本人を畏怖の目で見やった。

「……あーあ、だめだなこりゃ。最近の若いのって、酒に弱い奴多いのな」

どう見ても若いおまえがそれを言うのか。

目は口ほどになんとやらで、見ていた者たちから向けられた視線は、異瞳同音に語っている。

感じ取った男は、肩をすくめてから「親父、」と呼ばわった。

「悪いね、飲み比べなんかやらかしちまって」

「いや……別に構わんが……おまえさん、大丈夫か」

「何が？」

「瓶三本も飲んだろう」

言われて、男は床に転がる酒瓶を半目で見やる。

「別に。いつかよりは大した事ねえし」

しれつと言つてのけたここ数日の連客に、勝負の行方を見守って

いた食堂の主は大きく溜息を吐いた。

「ならいいが。全く、ウチの客も懲りんくて済まん。やたらと酒に強いから、絡むのはやめとけと言ったんだが……」

言われて、男は紅い髪を弄りながら首を傾げる。

「……仮面でもつけてきた方がマシかねえ？」

「まさか。その顔に引っかけられるようなこいつが馬鹿なのさ」

主人は苦笑しながら、自分の息子に言っただけで床に伸びた酔っ払いを片付けさせた。

今日の飲み比べはこれで終わりだと悟ったのか、食堂前に集まっていた人間たちはわらわらと散っていく。

その中に一人だけ、ぼつんと立ち尽くして残っている者がいた事に気付いて、男は「……あん？」と入口を見やった。

見知った人間だった。

というより、半月前に別れたはずの少女だった。

「父さん！ こんな所で何やってるの!？」

ぶっ

隣で机の片付けをしていた主人が吹いた。

「その年で娘!？ おまえさんいくつだ!？」

「養い子だよ妹みてえなもんだ。変な勘違いすんな」

ああ、この三年間で何度言われた台詞だろうか。

数えきれない回数に達したお決まりの答えを呟いてから、男

ロヴェ・ラリアンは、唇の端を吊り上げて、艶然と笑った。

「半月ぶりだなあ、ティア。ウィルテナトには無事にいけたかい」

「行けたけど……どうして父さんがラベニスタにいるの？ ブレインは？」

姿の見えない義弟の行方を心配する養女に、ロヴェは苦笑する。

「おまえと同じような事になってるよ。まあ心配すんな。死にはし

ねえから」

「……父さんが言うとお洒落にならないから不安だわ」

一応信じるけど、とティアは溜息を吐いた。

「それよりも。私がどうしてここにいるのかとか、どうやって来たのかとか、全然気にしないのね？」

「そりゃあな」

ロヴェエはにやにやとしたまま、空のジョッキに手をかざし、「水」と呟いた。瞬時にジョッキの中を冷水で満たし、一気に飲み干すと、口の端を拭って大きく息を吐く。

「俺の娘なら来て当たり前だからな」

「……その自信はどこから来るの」

僅かに苦笑した娘を見つめ、「だがまあ」とロヴェエは首を傾げた。

「こつちから迎えに行かなければだめかと思つてたけどよ。おまえ、奇跡みたいに戻つて来たなあ？」

「え？」

「マールウェイで各里の長の召集が始まつたつて聞いたよ。息子カレンの奴も呼ばれたんだろ。いよいよ元老と騒いでるガキ共が総当たりかつて全員真つ青だつたぜ」

「……それつて、カーレンの所でもちらりと聞いたけど」

「ああ。だからおまえを迎えに行こうかと思つたんだ。そうしたら向こうの方からおまえが来たから、手間が省けたと思つたのさ」

ロヴェエの言葉が理解できないようで、養女はゆっくりと瞼を瞬かせた。

「何だ？ 何が起こつてるか知つてるんだろ？」

「え、でも、だから……マールウェイで騒ぎが起こつてるつて話は聞いたけど……」

そこまで言つてティアは言葉を濁らせる。どうしてこの話でロヴェエがわざわざティアを迎えに行こうとしたのか、その理由を量りかねているようだった。それで、「ん、」とロヴェエは思い当たる。

「ひよつとして、聞いたのはそれだけか？」

こくりとティアは頷いて肯定した。

ロヴェエは眉を潜めた。妙な違和感がする。

今自分が知っている事を話してやってもいいだろうが、それだとせつかくこの場にいるというのに、ティアが余計な事をしでかしてしまう恐れの方が大きい。

瞼を半分伏せて思案顔になっていると、ティアは次第に訝しげな目になってこちらを見てきた。

「父さん？」

「うん……そういやおまえ、何でここに来たんだっけか？」

「さつき聞かなくても分かるみたいな事言わなかった？」

「カーレンに連れて来てもらったんだろう。そこまでは分かる。けどおまえは最初、俺がここで何をやってるのか聞いた」

一つ一つの話を材料を並べてやると、ロヴェエは片目を伏せた。

「という事は、俺がここに居ると知っていた訳じゃあない。しかも久しぶりにカーレンに会ったつてのに、おまえ、ずいぶんと早く別れて来たよな？ ……何かあっただろう」

ロヴェエが言う内に、ティアはそれを切り出す事ができないのだとでも言うように、難しい顔になっていった。

すっかり塞ぎこんだ様子で俯いた娘を見つめ、ロヴェエは、今まで会話の外で取り残されてどうしたものかと戸惑っていた店主を呼んだ。

「親父。ちょっと軽く食えるモン頼むわ」

「……あいよ」

話す時間は短くとも、ある程度回す頭が必要になるかもしれない。腰を据えて考え、話す必要がありそうだった。

「……なるほど」

ティアが差し出したのは、一通の古ぼけた封筒だった。

机の上に置かれたそれを、ティアに目で断ってから取り上げ、中身を見た後でロヴェエはそう口にした。

封筒を彼女に返すと、店主が持ってきた軽食　葉野菜を包んだパン切れを指で摘むと、そのまま口に放り入れた。硬い塩漬け肉と一緒に青く瑞々しい風味が唞内に広がるが、残念ながらこれだけ娘が落ち込んでいると、香りや味はしても、何かそれらしいものを嚙んでいる気分にはかなれない。食事に集中が出来ないのだ。

最も、良くその状況で食べれるものと、二、三本の非難の視線は頬に突き刺さっているが。

「……そりゃ、おまえがそれだけ早く帰って来る理由も分かるわな」
ぼつと定まらないティアの視線は、今まで張りつめていたものが、ロヴェエを前にして一気に解けたような印象だった。

「……勢いだけで来たけれど、私、本当にオリスヴィツカに行くべきなのかしら……」

「……行ってもいい、と俺は思う。だがなあ……勧められない理由がいくつかあるんだが、これも、ちよつとな」

ティアはロヴェエに焦点を定めた。

「それ、どういう事？」

「きな臭いって事だ、要するに。最近、奇跡の御子が失踪したって話を聞く。……あくまで裏で出回ってる噂だから、大声じゃ言えないが。そうなると動くのは……」

ちら、と目を向けると、ティアは瞬きをして、答えに辿り着いたようだった。

「前に、教えてもらった……聖殿騎士団？」

「選りすぐりの精鋭ばかりで構成された小さな集団が、この前ハルオマンドに入ったんだと。建前では異端の話語る人間を探しているらしいが、それが面白い事に、出回っている人相はどうやら俺のものらしい」

「……何かしたの？」

「さて。おまえとブレインを連れて回っている間に、酔ったついでにこの辺の奴らにそんな話をした覚えがおぼろげながらある。しかし一年よりは前だからな……よくそんな微妙に古くてどうでもいい話を見つけたもんだよ、本当に」

まあ、その話は別に良いのだ。問題は、同じハルオマンド国内に聖殿騎士団とティアがいて、しかも両者が目指す目的地も一致しているという所だ。

「奇跡の御子は、黒髪に紫の目を持ち、聖衣を纏った者と呼ばれるが、とにかく目立つさ。歩けば噂が立つ。……そんなのを保護できる奴っていえば、領主級の力を持つ人間だって事だけだな」

下手に接触すれば、最悪ティアが領主か騎士団か、どちらかの手駒にされるだろう。それは養い親であるロヴェエとしても面白くない上、望まない所だ。

「もう一つ、オリスヴィツカに行くのを躊躇う要素がある。政情の問題だがな。さっきの御子の話と絡んで、どうやらハルオマンド周辺の大国が妙な動きをしている。オリフィア王も関わってるって話だ。この辺りでそれらしき人相が目撃されたって噂も……まあやっぱり噂だが、火の無い所に煙は立たないってな。金髪だったそうだが」

「……それって」

ティアはぽつりと遠い目をして呟いた。

彼の大国の王が治める白亜の都に、ロヴェエとティアは数度立ち寄った事がある。ティアはそれ以前にも二、三度、各地を放浪していた頃のカーレンに連れられて、王となる以前のラヴファロウ・ステイルド・オリフィア本人と　　とはいえ、当時はオリフィアの名は当然冠していなかったが　　、ある程度の親交があったはずだった。そもそもカーレンが王と親しかったのが知り合っつきっかけだったのだ。

となれば、彼女は彼の王がもともと金の色だった髪を敢えて黒く

染めている事を知っている。

オリフィアの王が目撃されたという噂は単なる噂でしかないだろう。しかし、金髪である、という事であれば、ロヴェエの愛娘はその立場から、いくらか王がそうする理由の見当をつける事は出来るのだ。

「地毛を晒したんだろう。あの王は黒髪で平民出身だって事で有名だが、もともと没落貴族の血を引いてただろ。即位前から染めてるんだ、国内で身近だった人間はともかく、ハルオマンドで知ってる奴はほとんどいなかったから、噂に留まっているんだろうさ……全く、逆転の発想つつうか何といおうか」

黒髪ならば、髪を明るく染めた時にも、他よりは少し濃い色になるだろう。そんな思い込みが、地の金髪を晒す事で逆に王の顔を民衆から隠すというのだ。

「ま、風に聞けば、あの王はたまに剣一本でその辺ほつつき歩いてるらしいけどな」

「すごい自信家……死んじゃわなにかしら、ラヴファロウ」

ティアの呆れた声に、ロヴェエは笑う。

「俺と剣を交えられるぐらいの剣客だ。相当に追い込まなければ、腕利きでもおいそれと勝てねえ。安心しろよ」

まあ、それだけうるつきながら国の政治が微塵も揺るいでいないという点を見れば、彼は大した器であるのだろう。

「っと、また話が逸れたな。とにかく、要はオリスヴィツカに行くなら聖殿騎士団と他、情勢に気をつける必要があるって事だ」

言ってから、「まあ、」と苦笑する。

「俺と一緒に行きや良い話なんだがな。で、この手紙の差出人、どこに居るのか見当はついてるのか？」

「……たぶん、」

そう前置きしてから、ティアはロヴェエに、彼女の予想している場所を告げた。

尻が痛い。慣れない乗馬でしつかり動かされた腰や脇腹を擦りながら、クロツドは半ば以上にうんざりしていた。既に日は落ちて、宵闇が緩やかにやって来ようとしている中での事だ。

昼食を終え、騎士団に気付かれやしなやかと内心心配しつつも、使用人の格好になったフューは、身代わりになった少年のおかげで注目されず、レダンが欠けている他は、無事に旅をしてきた全員で危機を乗り越える事が出来た。

「疲れたかい？ もう少してオリスヴィツカだからね」

欠伸を堪えていると、クロツドの前で手綱を繰りながら、大公が柔らかい調子で言う。

まさか一領主が自分の馬の尻に他人を乗せるとは思わなかった。その辺りにこだわりがないのだと言われてしまえばそれまでかもしれないが、フューの度肝を抜かれたような目つきといい、これは非常識の部類に入っているはずだ。

アストラはエリックの後ろでうつらうつらと舟を漕いでいるが、そこは元が獣の姿だからか、上手い事平衡を保っていて、落馬するという惨事には一度もなっていない。なぜ平地で転ぶという疑問が残ったが、ひよっとすると異界に来たばかりで身体感覚が慣れていないのか、という考えに行き着いた。エリックの前にいるフューはアストラよりも更にぐっすりと眠りこんでいるのだが、器用にもエリックが自分の片腕で支えている。

ルミナは驚いた事に自分で馬を操れるらしく、エリックと馬首を並べていた。

「……あのさ」

「ん？」

「俺の覚え違いじゃなかったら、あと二日か三日、オリスヴィツカ

までかかったはずなんだが」

馬車でも一日半ぐらいではなかっただろうか。使用人たちもいるのだから、もつと時間がかかっても良かったはずだ。

「ああ、君は賢いね。そうだけど、少しからくりがあるんだよ」

「からくり？」

「レダンが可能だった事は？」

逆に聞き返されたが、それが答えだと悟って、クロツドは目を剥いた。

「……あんた、化け物？」

大公は軽く笑う。

「まさか。ただの人間だよ」

しかし、そこから半刻と経たない内に眼前にいきなり巨大なオリスヴィツカの門が出現したので、クロツドは密かにこの青年を人外に認定した。

普段なら既に隔壁の門も閉められてしまっていただろうが、見張り番でもいたのだろうか。大公の乗った馬が近づくと、計ったように門が外側へと開いて、主人とその客らを中へと招き入れた。

オリスヴィツカの都に入ると、いくつかの建物からは明かりがちらちらと漏れていた。領主の帰還に気付くと、窓から顔を覗かせて、親しみを込めて微笑みかけて来る者もいた。

大公は後方からやってくる使用人たちに手を振って何らかの合図をする。大方なるだけ静かに移動しろという意味だろうとクロツドは察した。それでも往くのが石で舗装された道であるので、馬蹄の音が響くのは仕方ないだろう。

「クロツド。灯りの魔術を使ってくれるかい？ 少し近道をしようと思うんだ」

低い声で大公が言うので、クロツドは手を彼の後ろから突き出す形で、青白い光を灯した。

「ありがとう」

さらりと言い、慣れた手綱捌きで大公は馬の首を巡らせる。通り

から少し外れて、やや急な坂になっている狭い道を馬は登っていった。

ざっと入る前に見たところでは、オリスヴィツカは丘陵　　といよりはなだらかな山だろうか　　の地形をそのまま利用した形でできている都だった。身分が高い者や領主に仕えている者が、職人や商人など町の人間らよりも少し高い場所に居を構えているようだ。そうになると、やはり領主の住まう邸宅は都の最も高い位置にあるのだろう。

火の矢でも遠くから射かけられたら簡単に燃えそうだな、などとクロツドは思ったが、要らぬ世話だったようだ。

「腕利きの魔術師たちが結界を施しているからね。代々家でも施してきた陣があるから、そう易々と突き抜けるような攻撃はないよ」
まるで心を読んだかのような声に胡乱気に見やると、大公はくつくと笑っていた。

「顔が心配そうだったよ」

「俺はそんなに表情豊かか？」

「それより表情が乏しかった人間を相手にした事があるから、私にとっては君は豊かな方に入るね」

言われて、クロツドは半目になった。腹芸屋が、と毒づくと、何が気に入ったのか、彼はついに爆笑しそうになるのを必死で堪える羽目に陥っていた。

やがて、坂を上り切った頃に、大公爵邸と思われる大邸宅が見えてきた。

透かし模様が美しい鉄の門の向こうでは、良く手入れされた様子の庭園が広がっている。少し遊び心を加えたような木の枝の整え方一つをとっても、ここの庭師の優れた力量が知れた。咲いている花々の名をクロツドは知らなかったが、香りは混ぜこぜではなくどう香るかまで綿密に計算されていて、漂ってくるそれらはむせ返るといよりは仄かに感じるといった程度で、素人目にも品位というものが分かる気がした。

要約すると、完全に上流階級の住まう土地だった。

「金が余ってんのな……」

「客に失礼がないようにだよ。一流というのも苦勞するものでね、本当は面倒なのだけど手間を懸けざるを得ないんだ」

「贅沢な悩みだな」

「うん、確かにそれはそうだ。まあ、気に入ったなら後で鑑賞でもするといいよ」

「花なんて知らないから別にいい」

言うと思つた、と大公は気安い様子で呟いた。

庭を通り抜けた所で道は小さな広場になり、そこで二人して馬から降りる。後からついてきたエリックは多少前後の二人を起こすのに苦勞していて、ルミナはそんな彼に目もくれずに馬の腹を滑り降りた。三頭が邸宅から出て来た使用人に引き渡されると、大公は離れた所にある階段の下まで歩いて行つて、こちらに向き直つた。

「さて。我が邸にようこそ、御客人方。今宵は夕餉も湯もたんと用意させてある。ゆるりと休まれるが良い」

なぜ今日帰るとも分かつていないのにそんな芸当ができるのかとクロツドは一瞬首を傾げたが、何の事はない、隔壁の門が普段とは違う時間を開けば主の帰還などすぐに知れるというものだ。

近道をしたとはいえ、ゆっくりと馬を進めてきたのだから、その間に魔術か馬かで連絡を入れた者がいたのだろう。

ただ。

「ただいま、サシャ。フュエルトラストル・リアノルトをお連れしたよ」

大公が開いた扉の向こうに投げかけた言葉に、弾かれたように背後にいた少年を振り返つた。

眠そうに眼を擦っていた少年は、エリックに背を押されて促されながら、きよとんとクロツドを見返した。

「何ですって？ ……リアノルト？」

ルミナが、聞き違いではないのかと、自分の耳を疑って愕然とした様子で呟く。アストラは「それがどうかしたんですか……？」とぼんやりと聞いてきたが、クロッドはその質問に答えるどころではなかった。

「どついう事だ？」

口調も強くエリックに問いかける。騎士はちらりとクロッドを見やると、肩をすくめ、

「どつもうつも、そついう事だ」

とだけ言った。

「フューというのは、元の名から取った、旅の間の名前だったんです」

クロッドのエリックへの詰問で目が覚めたのか、フューが申し訳なさそうに言った。

啞然として立ち尽くすクロッドの背後で、声がする。

「リアノルト。そうだよ。何も間違いはない」

大公の、得体の知れない、声。

「彼はフュエルトラストル。フュエルトラストル・ハイヴ・リアノルト・ファニスカ。言わずと知れた、今代の教皇アルティマシス・ハイヴ・リアノルト・ファニスカが認知した、正当な嫡出子。早い話が、聖君なんだよ」

少年の何たるかを、端的に告げた。

「私は教皇直々に、彼を極秘裏に保護するように勅を賜った、という訳なのさ。同じ聖衣を纏う者として、そして、聖なる血を受け継ぐ者として、ね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6577r/>

Dragon Eye第二篇 星の音色と白の神話

2011年8月26日03時21分発行